

川柳塔

昭和四十二年一月九日第三回創作発表
平成五年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七九七号



日川協加盟

No. 797

平成四年度 二賞発表

十月号

「川柳塔」 800号記念川柳大会

と き 平成6年1月16日(日) 午前10時開場

ところ なにわ会館 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19番12号 ☎06(772)1441

(交通便 近鉄上本町駅から徒歩3分・地下鉄谷町9丁目駅から
徒歩8分)

あ い さ つ	川柳塔社主幹	西 尾 栞
川柳塔のあゆみ	川柳塔社理事長	橘 高 薫 風
祝 辞	(副)全日本川柳協会会長	仲 川 たけし 氏
お は な し	川柳「塾」塾長	寺 尾 俊 平 氏
表 彰	功労者の表彰・感謝状の贈呈	

兼 題	「眼 鏡」	川柳塔社	小林 由多香 選
	「似 る」	都大路川柳社	奥 山 晴 生 選
	「 母 」	川柳展望社	時 実 新 子 選
	「ジャンプ」	時の川柳社	小松原 爽 介 選
	「 酒 」	ふあうすと川柳社	田 中 好 啓 選
	「 旅 」	北国川柳社	山 田 良 行 選
	「 鏡 」	番傘川柳本社	儀 野 いさむ 選

◎各題2句 出句締切は正午 席題はありません。

事前投句 「こころ」 川柳塔社主幹 西 尾 栞 選

◎所定のハガキに2句を書き、10月30日(当日消印有効)
までに川柳塔社事務所へ。投句は出席者に限ります。

会 費 3,000円(昼食・記念品・掲載誌呈)

懇 親 宴 8,000円 午後5時から同会場で開催(会席・予約制)

宿 泊 なにわ会館ほかをお世話いたします。

主 催 川 柳 塔 社
後 援 (社)全日本川柳協会

句碑二つ

西尾 栞

前月号で「甲吉句碑建立のよろこび」

を書いた途端、今月号で又々句碑のよろこびを書くことになった。それは、平成五年八月二十一日（日）の雨のはざまの快晴のことであった。香川県大川郡白鳥町の海に見える公園の小高い丘の上に、弊社の理事長薫風君の句碑と白鳥温泉の螢橋の袂に建った私の句碑の二つであった。

今年、国体が香川県で開催される運動場となる公園に、薫風君そっくりの容姿端麗な碑が毅然と建って、折からの快晴となった八月の太陽に燦然と輝やいた。

島一つ買って暮せば涼しかろ

彼独特の真面目な筆運びで、如何にも涼しげに海からの風を受けていた。この句を得るために、現地を訪れて、沖の彼方を見晴るかして決めたと聞いている。

一方、私の句は、昭和六年七月の阪大川柳会の創立句会における席題「温泉」の路郎選の天の句の

温泉や坐りらかむに寝る羅漢
という句で、白鳥温泉にふさわしいとい
うので、町当局が推奨して下さったもの
である。

石は香川県産の庵治石という最高のもの
で、一つの石を二つに割って、二人の
句碑としたという町当局の心遣いであっ
た。

野外行事としての除幕式の日が、最高の
快晴であったことは、町起こしとして
建立して下さった白鳥町の前途を占うよ
うで、洵に目出度い極みであった。

沢山およせ下さった祝電の中で、東野
大八先生の

句碑二つ路郎先生もおよろこび
と、田辺聖子さんの

川柳のころ伝えよ句碑二つ

のお二人の祝電が、特に私等の胸をうつ
た。路郎先生に可愛がられた兄弟弟子の
句碑が期せずして同じ日に同じ地に、一
つの石を二つにして建立した。奇しき縁
を涙なくしては語られない。あの世へ行
ったら、路郎・葭乃両先生に、どんなに
して話そうかと思うことしきりである。

この度の件については、白鳥町当局の
関係各位の大いなる御高配と、おっぱこ
吟社の皆々様の肝入りと、当日各地から
ご参列して下さった百六十名の皆々様に
心から篤く篤く御礼を申し上げる次第で
ある。

有難うございました。

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

突き放す愛が育てた太い幹

野口 節子

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 句碑二つ

反ソがんこ会

西尾 栞 ……(1)

川柳塔(同人吟)

東野 大八 ……(2)

自選集

西尾 栞選 ……(4)

川柳の群像 浜田久米雄

東野 大八 ……(42)

■古川柳 柳籠裏二篇研究(十九丁)

黒川 紫香選 ……(44)

水煙抄

黒川 紫香選 ……(46)

平成五年度 路郎賞・川柳塔賞

田中正坊 ……(68)

秀句鑑賞「水煙抄」同人吟

園山多賀子 ……(72)

大空のころろ (34)

橋高 薫風 ……(74)

銀河系

河内天笑選 ……(76)

反ソがんこ会

東野 大八



「北鮮のポシエトからシベリアへ、ぼろぼろの黒い戎衣の列が寒々と続く。」

丸腰に下げた食器代りの空罐がカランコンと果て

なき広野に佯しく木魂してゆく。極暑と極寒の一昼夜を、もう十日も歩き続けた。飢餓と疲労と絶望にさいなまれたおれは、いつか経文のように口誦んだのは

へ幾山河越えさりゆかば寂しさの

果てなむ国ぞ 今日も旅行く

の牧水の歌だった。この死神のうたを、おれは生涯、断じて忘れることはない」

素然と白頭の面を伏せてそうつぶやく彼をばくはただ撫然と見つめるばかりだった。

思えば、憎つくきこの赤露は、一九四五年八月九日からわずか七日ばかりで、中立条約を踏みにして満州国を潰滅させ、六十万の関東軍将兵をシベリアに抑留し、極寒の凍土で死に勝る強制労役に駆りたてた。その上、南樺太も千島もとてあげるといふ苛斂誅求を加えて日本領の北の小島一つ返そうともせず二度も訪日をすっぱかしたエリツインに加

茴香の花

「除く」

小出智子選 … (80)

一路集「ダンス」

金井文秋選 … (82)

「ゆっくり」

平松かすみ選 … (82)

初歩教室「呼ぶ」

町田達子選 … (83)

■エッセー「北斗七星は悲しい」

吉岡美房 … (84)

各地柳壇(佳句地十選/渡部さと美)

田村新造 … (75)

■句会だより 城北川柳会

吐田公一 … (108)

九月本社句会

… (98)

西尾栞・橘高薫風句碑除幕式

… (102)

藤井正雄・川崎ひかり・木村明人

柳界展望

… (104)

各地市民川柳大会

… (106)

十月各地句会案内

… (109)

■編集後記

… (110)

座右の句

ふる里の山は黙って見てくれる

(迷観子)

私の句

三十年 車線変更なしの道

川崎 ひかり

え、日本周辺の海中に、あらゆる有害兵器類の無差別投棄。何が対ソ支援だ。思っただにはらわたが煮えくりかえる。

「うむ、おれも君も想いは同じだ。汚辱にまみれた日の丸の旗の下の醜虐の死に損い、生き永らえてもつ五十年だな」

とばくは、隻腕の冷たい切株をなでて虚しく空間をふり仰いだ。そしてぼつりと

「ところで、シベリア帰りの君達が作った反ソがんこ会はいまどうなってるんだ」

「現在、もう跡かたもない。会員二万、当時はエライ勢いだったが、ふる歳月の無常な重味で、辛い凍土の怨念も消えたのだ」

「そうは言うが、今こそ反ソがんこ会を再編すべきだと思えるがどうだ」

「ソ連は崩壊した。まさに、ざまあみやがれと快哉を叫んだことだが、かつてのがんこ会の同志たちは、一応これで一件落着と処理したらしい。ただ、おれがいま頭にくることは、日本政府のラチもない対ソ支援政策だな。総理の面を眺めるたびに、またぞろムカムカしてな。その眼に寒々とまた展がるのは、まるで人骨のように凍土に散らばる白樺の墓標が、白ガスリのように展がってくる痛ましきさだ。草むす無数の屍もそのあたりで眠っている。それと思うと、ガンコ会そのものが哀れでね。歴史はつねに新しくなるばかりで、感傷には不感症だよ」



西尾 葉選

松原市 玉置 重人

よく聞けば足手まといは僕だった
いつでもどうぞ私に賞味期限無い

人間を見る人間の目が怖い

勲章を貰ったことがない軍手

均等法ああ居酒屋もパチンコも

無位無冠三度三度のうまいめし

大阪市 西出 楓 楽

たゆたうていよう仏の掌の中で

雨続く被害者意識強くなる

ジーパンをはくから女にじみ出る

哲学も美学もずれていて夫婦

世が世ならと思う日無きにしもあらず

孫のことかと勘違いした犬自慢

下関市 石川 侃 流 洞

生簀の鯛 美味しそうとは野性の血

素人の目に無細工な抹茶碗

酒癖の悪い客とは知らぬ招き猫

試験管の命を神に乞い祈る

料理する娘のマニキュアが気に入らぬ

倉吉市 奥谷 弘 朗

ふところがぬくいと言うことまでちがひ

こだわらん性で案外長続き

紐落しせずに亡くした娘を偲ぶ

走るのは陣笠大物腕を組み

時の顔などとおだてる手を使い

藤井寺市 吉岡 美 房

戦跡に水着溢れている平和

蟬殻のすがりつきたる命かな

友情を重荷と思うきりぎりす

西瓜切る気配で昼寝起きて来る

夕立のところによりが降って来た

倉敷市 小野 克 枝

バラも野菊もやがては土になる命

はずれくじいつまで持っている財布

後退を知らぬ男の高いびき

宴会の流れ見えない手を叩き

ワープロに背中を向けている頑固

松江市 柳 楽 鶴 丸

僕の背を見て育った子が怖い

馬鹿野郎と猫が言ってるかも知れぬ

やせているから瘦せる本を書こうかな

八月の花屋に秋の花 冬の花

雅子さんから妃殿下になった影法師

松江市 舟 木 与根一

長い梅雨南瓜の花もいらいらし

蒲焼きに食指が動き梅雨明けか

働くのが好きで気の合う冷や奴

一日一善今日も夕焼けすばらしい

ひぐらしも音痴になつている冷夏

仙台市 川 村 映 輝

新幹線の真ん中に居て肩が凝り

誤れば百薬の長も毒になる

代読の祝辞がつづき座が白け

自覚症状ないが七薬服してる

卒寿祝つて家族二十人温泉の宿

寝屋川市 江 口 度

鼻毛にも言い分がある雨の午後

買う方が安い魚を釣りに行き

カラフルなエブロン豆腐切っただけ

根くされということもある子煩悩

またマイク故障しました村芝居

島根県 榊 原 秀 子

弁当についたオレンジよく残す

忘れ傘とうとう私の手をはなれ

思い違い傷がいえない曇り空

真夜中にボソボソ話す老夫婦

居直つてペンを握っている夜中

今治市 矢 野 佳 雲

妻は乙女 無声映画の中にいる

正直なたった一人が笑われる

鈍感な男で飲んで寝てしまひ

蜜蜂は搾取されたと気がつかぬ

君のめしべで黄色く染まり寝ていたい

美禰市 安 平 次 弘 道

恋はまだ序章 仮面外せない

エネルギーの浪費でしたと恋終る

黙認をすると流れが早くなる

コインは裏 別れの科白探さねば

同床異夢 夫婦ごっこがきこえない

奈良市 天 正 千 梢

南円堂 蟻一匹もふむまいぞ

北山杉の風景を馳走にし

自問自答甘い点をつけている

落し穴手のなる方にありました

石女の隣は児童相談所

名古屋 越村 枯梢

老いの愚痴 結ばれたのは三りんば

野越え山越え聞える母の嘆き節

父ははと会話の弾むほとけの間

願わくは黄泉の道辺に珈琲館

耳飾り首輪もつけて未開国

柳井市 弘津 柳慶

神さまの悪戯にしては酷すぎる

雨もいいが豪雨となれば死者も出る

罹災地の陛下へ道路かたづけ

連立の烏合の衆にはならぬよう

たばこ屋のあなたたばこ吸わないの

廿日市 林野 甦光

素人にはなれぬマダムの風呂上がり

ラストシーンのところで眼福したと言う

風下の男が掴む妥協点

触るなど書いてあるので一寸だけ

生き字引にされて担任誣いられる

鳥取県 松下 たつみ

勘違いしている声が大きすぎ

忍従の茶碗が割れる日が怖い

地縁 人縁 故郷の人はありがたし

一病とうまく付き合う薬漬け

時は流れて堪忍袋の紐しめる

富山市 舟渡 杏花

何も言わず何もきかない根比べ

致死量のコップと話す遙けしや

この世にまだ用があるので辞書を買う

生き恥を埋める余白が足りません

巴御前の裔かとうごう娘がひとり

鳥取県 新家 完司

蛇が出る道へ恋人つれて行く

勤勉な農家に夏が寒すぎる

ともだちだけれど保証はできかねる

おとことおんな蔵へ入って出て来ない

おまもりを開けると胡散臭い紙

奈良市 宮口 笛生

犠牲者を出すまで雨期が停滞し

賑わいを取り戻してる盆の墓

兄弟も年寄りになる墓参り

酒好きな同士まとまり早いなり

八十歳 歳も歳だしとも言われ

堺市 楊井 二南

ネクタイを締め直してから出る小言

丁寧な言葉の裏に有る野心

義理ずくの土産は駅で買えばよい

お互いに気遣い過ぎる老夫婦

非公式とは重宝な逃げ言葉

豊中市 田中正坊

大阪市 本間満津子

義人とは一字違いのわたしの名
年かさね失いしもの得たるもの
ソロバンを弾くと合わぬことばかり
生きて老い病みて死ぬのが定めなり
ペンと剣 学徒出陣五十年

高槻市 川島 諷云児

尼崎市 春城 武庫坊

一汁一菜夕餉に父がいる平和
正直に生きて来たのに敵がいる
余生とは案外骨の折れるもの
折り鶴に息吹き込めば翔ぶ構え
人を恋い人を恐れている秘境

米子市 林 荒介

尼崎市 春城 年代

足跡にこだわっている僕の靴
活字を並べて影法師を作る
喧しいのは人数合わせの後列
鉛筆もおんなも怖いことを言う
踏切りを渡っては図書館に通う

米子市 林 瑞枝

島根県 小砂 白汀

学徒出陣 蔵を出た兄の日章旗
朝顔の茎のてっぺんから秋になる
墓の蝶 美人だった叔母の映し絵か
火の粉少し被って友だちと別れ
浮雲ひとつ掃くよう秋の風が吹く

本調子ゆるんだ糸を引き締めて
健康は強い味方だ素面素手
恐い話は心の隙に攻めて来る
鰯や数の子真夏に鰯無いじやなし
義捐金チョッピリ大阪はええとこで
原爆忌 鎮魂曲に蟬唱和
軍歌より歌わぬ男 泣き上戸
堪忍袋 老いのぼやきでつくろうて
駅弁は蓋の裏から食べ始め
ケーキより葛饅頭に手がのびる
公園で犬を放して悪びれず
だらけると私の年が加速する
足の裏にかびを感じている立秋
新聞の見出しだけ追う日の怠惰
本題からますますそれておもしろい
こがね虫タンスの角へ体当たり
くちなしを一枚余さず食われたり
太陽と親と笑顔はいつもいい
病院の隣に住んで病氣せず
先生をひとり残してみな帰り

西宮市 奥田 みつ子

寝屋川市 稲葉 冬葉

終戦は遙か 記憶は生々し
白い服 似合わぬ歳となりにけり
秋風に亡母の小紋を縫い直す
発展には遠く稜線美しい
転がらぬ嘘もてあます舌の先

八尾市 宮西 弥生

奈良県 田中 紀美代

骨折を見舞うて階段こわくなる
凜として鷺草炎天陽に負けず
親の背を見すぎて親から出世せず
パンツルク老母もこのごろ旅慣れる
団体のバスに慣れない尾骶骨

和歌山市 松原 寿子

島根県 西村 早苗

支えとや優しい君が傍に居る
愛は一途にむらさき彩が渦になる
走る血が絆の深さ知っている
今は内緒でも青春をしています
白い刻あるなら少し朱を足そう

大阪市 津守 柳伸

堺市 高橋 千万子

旅ごろ七福神を担ぎ出す
すぐ止めるヤングの職はフリーター
張り合うて生きる努力の積み重ね
お見舞に行く幸せを噛みしめる
初恋に終止符打ちに来る計報

年功序列かもしれぬ蟻の列
ときどきは誇大妄想狂になる
ともすれば舌の剣も出しかねぬ
好きなこと出来ると八卦そそのかす
老いらくの恋そろそろと参ろうか
融通がきくので妻にもたれてる
亭主より先に寝るのがうまくなり
友だちに坊さんがいる頼もしさ
庭の蟬 腹に力を入れなさい
山近し値段の高い虫が来る
思い切り言ったらよいにはしやぐだけ
腹立ちのおとこ手袋おいて去り
逢いたさに応答のないベルを押す
スキヤンダル風がなじっている夜更け
地下足袋の顔が明るい秋日和

バンザイの声にもダルマ怖い顔
仮病とはわかっていても御大事に
はすの葉に極楽蛙乗ったまま
昔なら終った人生 恋をする
ふんわりと浮きそう風船屋の屋台

大阪市 河井庸佑

島根県 堀江正朗

ていねいな言葉遣いできついこと
頼まれていやと言わぬと見た誤算
曖昧な返事思わぬことになる
能ある鷹 爪見せ過ぎて嫌われる
自己過信穴に嵌った向こう見ず

東大阪市 森下愛論

幸せの彩がにじんだコップ酒
ひねくれた夜を一人で飲み歩き
人格を捨てて地酒の群れに入り
病院の廊下で長い立ち話
ドック入り年でんなあに腹が立ち

笠岡市 松本忠三

じいちゃんの意見が捨てたものでない
ばあちゃんの勝手つんぽにだまされる
本音だと言うから黙って聞いてやる
恋愛がもう七十五駄目かなあ
七三で老人クラブ女性占め

松原市 小池しげお

型破りの男と思う梯子酒
感情を殺し受話器を持ち替える
夢のような話を聞いて昼寝する
そうめんの好きな男で嘘が下手
長男も次男も嫁に惚れている

宵祭りほどよい酒に寝てしまい
長い道妻にすがって縋られて
お陽さまと話して嫌なこと忘れ
感度また狂うひたいを打つたびに
白杖と胸張って往く町の良さ

島根県 堀江芳子

挨拶もいつしか秋の語に変わり
適当に夫唱婦唱で世を渡る
雨しよぼしよぼ内緒話のように降る
盲人の妻でお喋りうまくなり
行く先が思いやられる世に変わり

羽曳野市 榎本吐来

婦唱夫随の欠伸を猫に覗かれる
八月やテレビが悼み乗せて来る
机上の蟻潰した後のもの思い
睦言に遠く茶の間の鳩時計
蟬しぐれ夫婦茶碗に秋が見え

弘前市 村田善保

哲学を持たない風は風となる
逆境に克つと味方が倍になる
振り向けばだあれも居ない縄電車
アドリブが苦手 出世と遠く居る
逆境に負けぬ男の鼻袋

十和田市 齊藤 島

少年の小さな恋よさくらんば
体験をしてる賢治の寒い夏
校長がオロオロ回る田を回る
朝晩はストーブ囲む夏休み
迷うてる蔓に一本藁を添え

弘前市 真喜内 實

風鈴がさわやか車とめられぬ
採りたての胡瓜一本よいおやつ
和尚様の賦課金割はお間違ひ
会長の電話の時間帯が来る
担当医のペットになつて食進み

黒石市 相馬 一花

清貧を唱えず清く生きてゐる
神様ももう手が付けられぬ狂い咲き
実家から妻が野菜を背負ひ出す
定年になつて萎んでくる笑顔
欠点は一つだけです真面目過ぎ

弘前市 小寺 花峯

仮り縫いの言葉がほつれてくる弱さ
会いたくない人がおります途中下車
青春の秘話焼き肉のたれとなる
ワープロの手紙に友の顔がない
三月月を仰いだ僕も欠けてくる

十和田市 阿部 進

言いたいこと何とも言える無位無冠
お人好し拝みたおされ金を貸し
想い出のあの日も午後は雨でした
生真面目の嘘をまわりが信じない
ありし日をよみがえらせる時計台

弘前市 肥後 和香子

カロリーの高い愛とは百も知り
その後の虹がいいので雨は好き
離婚の印洪々押すのはエチケツト
野放しの男の首につける鈴
ひと匙の塩で愛増す五十代

弘前市 佐治 千加子

近く夏へネプタの武者が見得をきる
解体のネプタ名残りの笛を聞く
生ききつてぎんぎんざらぎら陽が沈む
水中花とじこめられた過去ゆらり
百態の吐息を放つ牡丹園

黒石市 千葉 風樹

セールの鼻からはみ出た鼻毛
長い祝辞だ頭の上で蠅が飛ぶ
防風林の中で尿意が湧き上がる
節穴を落語のようにのぞき見る
尾骶骨の先までしみてゐるじやっぱ汁

五所川原市 對馬 一 閃

面舵を切つて人生波に乗り
一生を土とくらしして無位無冠
愛読書 英雄伝と書いておく
波枕 父に七つの海がある
真実 一路僕と歩いてくれました

米子市 小西雄々

日記には嫁の悪口ばかり書く
人間が怖いだまして金を取る
逃げ道を持つ六法を手放さぬ
夏帽子背のびしたがるので困る
正直に女の歳は信じない

米子市 石垣花子

紫陽花の頃だけ客を通す部屋
風呂敷の素直な性に負けておく
影武者に罪押しつけて返り咲き
飼いだばかり捕っている野犬狩り
鳩飼つて手品のけいこしています

米子市 野坂なみ

心経で朝のスタートさわやかに
ガン告知 花は気構えもっている
温顔へ包みきれない胸となり
開きすぎた距離へ油断がつきまとう
さよならはきつと笑顔でするように

米子市 政岡 日枝子

人間が吞むと薬になるお酒
今にして思えば薬効いてない
喧嘩しながら同じビンの薬のむ
彼奴もきつとドリンク剤を飲んでいる
ポストの中で恋の手紙に嫉妬する

米子市 菅井 とも子

夾竹桃の下で夢見ていた昔
台風銀座 祈る娘の嫁ぎ先
さよならも言えず握手して帰る(兄の逝去)
瞳をあわせさよならの声のみこんだ
故郷のこと語る相手ももう居ない

米子市 田中 亜弥

底辺で通い合うのは野の仏
運勢を磨き通して負けはせぬ
雨あがりの虹に縁起をまた貰う
行政の水はにがいぞ螢たち
支え棒の役目に僕はなりきろう

米子市 青戸 田鶴

呉越同舟 舟の行方が定まらぬ
幸せな気分で花をよっている
廃屋へ夏草思いきり茂り
待ち時間永く火花は一瞬に
薄い髪弱い脚にもいたわりを

米子市 寺 沢 みどり

蟬の喝采あびて夕顔咲き切った
紫陽花もあせて無口な庭になる
口笛を吹いて囀になつてゐる
枝振りを問われて松もおちつかぬ
幻の白馬がやどる魁夷の絵

米子市 澤 田 千 春

若い日も今も変らぬ丸い月
雑然とした部屋でほつとする時間
交差点 毬はゆく先思案する
曲芸のくり返しだな人生は
鉄棒が自信をくれた尻上がり

米子市 中 井 ゆ き

蛸に何もなかった夏が逝く
まず朝は自分にきかす笛を吹く
よりかかり大樹の呼吸きいてゐる
袋から出たがる鬼を撫でておく
草の風 戦の跡を撫でてゆく

米子市 光 井 玲 子

又あしたあしたと雑巾刺してゐる
ふところの深さが光る無口なり
汗のないくらしに弱くなるばかり
ハイヒールやつと体重持ちこたえ
赤ん坊をいとおしむように桃をむく

米子市 新 正 子

カツ井かカレーか悩みカツカレー
心から望むと虹が下りて来る
おくやみの真珠がはしやぎすぎている
縁談が三つ陽気なおかあさま
部屋中の羊と話す熱帯夜

米子市 白 根 ふ み

はづきとや身内に手帳握るもの
竿灯を掲げる男のブライドを
生き方を変えるとみんな好きになる
ひまわりにいつまで出合ふ闘病記
病める日は吾をはなれていく桔梗

和歌山市 牛 尾 緑 良

缶ビールひとつ夫婦の夏の夜
膝頭までは感じた夏の海
ひまわりの首は祈りを忘れない
雨あがり不意に話がしたくなる
夏の陽が沈んで残す恋心

和歌山市 堀 端 三 男

期待度は史上最高新政権
行く当てはないが梅雨明け待っている
青田風 北冷害と言うニュース
春夏冬の色紙が壁にある飲み屋
止まり木のとなりよく飲みよく喋り

和歌山市 福本英子

暁にいつも素直な夢を見る
中程に座り挨拶まで手ごろ
敗戦日何度も巡る夫の忌
絡まったマリオネットと小半日
ワンマンの男優しさには脆い

和歌山市 内芝登志代

幼子に教えられつつ母となる
てくてくと健康投資と歩いてる
蟬しぐれ哀しい人が多い夏
神代から女をたてて恙なし
気に入った服見つかった有頂天

和歌山市 木本朱夏

驟雨きてやさしい言葉聞き洩らす
信号は赤 突切ってゆく恋情
シャワー全開 ゆうべはなにがあつたつけ
待ち呆け場末の駅のはやり唄
おんなから見ても眩しい双乳房

和歌山市 桜井千秀

犬の瞳がまだまといつく一周忌
終止符を打つまで続く句読点
バカにしてはるやっぱり私バカやろか
万年筆が修理可能の電話くる
本当の悲しみ涙後回し

和歌山市 福井桂香

花の種やさしい人にもらわれて
はぐれ雲 私とおなじ星座だね
脳しんとう起して蠅は立ち上がる
削岩機みたいに喋り嫌われる
ゼネコンのヒントは崩れかけている

有田市 松井かなめ

油照り踏切り弱い音でなる
冷静になつてゐるつもり勇み足
観音講木魚叩いてよどみ捨て
観光もせず細かく貯めてやる子ない
寡婦の家 五時にはすべて鍵かかる

和歌山市 細川稚代

憧れの方とカレーを食べてます
雨続き花屋おまけをしってくれる
御見舞へ奥様の顔まだ知らず
理路整然 殺し文句はよせつけず
大丈夫 文句いいいいよく食べる

海南市 三宅保州

医学書を読んで主治医に叱られる
神様は知っていたのか突然死
過労死という病名はないはずだ
パトカーを運転したいなと思う
騙された振りして出方確かめる

和歌山市 青枝鉄治

鳥取県 林露杖

夾竹桃あの日のままの色で咲き
戦友が二十歳の顔で夢に立つ
寺と湯をセットして発つフルムーン
信号を守ってるのはランドセル
ユニホーム補欠の白が目には沁みる

和歌山市 山田高夫

鳥取県 土橋螢

入退院いのち継ぎ継ぎ生きている
鼻の差であっても負けは負けと知る
豊かさの中で誰かが飢えている
またあした山へすくと陽が落ちる
みごもってそれから先の女道

和歌山市 宮口克子

鳥取県 江原とみお

あなた次第です聖女にも魔女にでも
その日から内緒のものが見当たらぬ
夫には夫の妻には妻の秘話
彼岸花 亡父に詫びたい事がある
ドラ猫のボスがミカチャン猫を呼ぶ

鳥取市 両川洋々

鳥取市 武田帆雀

盲人じゃないに政治が見えて来ぬ
森が病む悲鳴の中で与作死ぬ
ご破算でねがいましてでも錢が要り
NOと言う勇気を神よほめてくれ
人間の愚かさのせて地球まう

語りべも老いぬ八月立葵
清濁を吞んで時流に逆らわず
右顧左眄して大綱を踏み違え
世紀末賄賂汚職も億単位
潔癖も過ぎると他人を傷つける
毎朝五時に目が覚める癖がつき
太陽に翳す草刈り鎌を研ぐ
仕事せぬ男が波に浮いている
仏さま今日の私はなま臭い
生きているうちに仏に抱かれる
本音ばかりに冗談をつかいます
葱坊主に叱られている怠けぐせ
相好もくずさず酒をのむ和尚
招待状が胃袋をおもくする
招かれて連判状を書いている
神の眸の油断にポテンヒット打つ
茄子胡瓜 二人暮らしに成り過ぎる
金欲も出世も捨ててから強い
瞑想の如く病院順を待つ
菊弄り一日幾度手を洗う

鳥取県 幸家單車

真珠より光る男の汗が好き
ふる里の藁屋と山が調和する
未来図に書いてなかった曲角
ふる里にゴクゴク飲める水が湧く
良く弾むマリも倅せ探してる

鳥取市 美田旋風

野心などないからズバリ物を言う
平坦な道を歩いて平のまま
椅子ひとつ上り孤独な風に逢う
押し売りへすまぬがボケた振りをする
果たせない夢があるから生きられる

鳥取県 羽津川公乃

汗握る感動もあるまだ若い
夫より先に他人を意識する
ふるさとの絵も初恋も風化する
うちの米やつぱり旨い朝の膳
毒舌を浴びて毒消し飲んでおく

鳥取県 津村八重子

歩けあるけに老いた血液よみがえる
芸術は世紀を越えてまだ光る
貧しくも心に晴着付けて生き
雑音に私のリズムくるい出す
老いらくの恋にやさしい花も咲く

鳥取県 さえきやえ

風ランがみごと故郷が捨てられぬ
風ランはきれいなはなしばかりする
たのもしい鼻だ時々吞ませとく
席を立つバラがいつわり秘めている
世をすねてまばろしの花となりました

鳥取市 西原艶子

瞬いて星は答えてくれそうだ
活字ミスとても疑い深くなる
良心の自動制御が効き過ぎる
けんかした相手は男ばかりなり
ラブレター小さく折って手渡そう

岸和田市 福浦勝晴

薬づけ亜鉛不足で呆ける舌(老妻・味覚不能)
内輪もめすんなりけりがついてめし
失恋の痛手に秋の遠火花
貧厨の朝大根を刻む音
見え透いた欲を無欲に見せる嘘

岸和田市 芳地狸村

海舟の凄さが判る筆のあと(懐古園)
霧晴れの緑に映える藤村碑(藤村記念館)
激流を霧がかくした千曲川(小諸城址)
みやげ屋へどかどか入る雨宿り
勇み足ばかりしている三代目

岸和田市 島崎 富志子

大和高田市 岸本 豊平次

ばあちゃんを遊び仲間に夏休み
まだあった腹を立てるといふ気力
うとくなる目で見ると世間狭くなる
一病を持って下着は白を着る
ほしい雨いらぬ雨と祈る雨

岸和田市 古野 ひで

泥沼に咲く蓮だからなおいとし
泣き言は言うまい老いの道だから
本堂に座れば煩惱消え失せり
雨宿り聞くともしにきく秘密
仏具磨きにちらほら亡夫顔を出し

岸和田市 高須賀 金太

あの女も流浪れていった短暑なり
あたふたと墓参すませてはつとする
発展はええから自然置いといて
秋の風 心変りをせきたてる
引き潮のなぎさで自己を消している

岸和田市 岩佐 ダン吉

痛いところは母が責めてくる
星条旗 富士の裾野にある痛み
サンブルには海老が三匹のついで
しびれ切らしい母さんが口を出し
粗品には弱い母さんだと思ふ

山の辺の道にも舗装の堅い音
東海遊歩道 熊が出ますと注意札
何歳で死んでも男は未完成
うつ伏せの孫を腹ばいになって撮り
アルバムの数に長男次男の差

姫路市 人見 翠記

日本列島頭も尻尾も傷だらけ
長雨で寝て居た神経痛起き上がり
惚け防止インプット アウトプットを繰り返す
甘えは惚けの始まり自分にきびしく
曇天つづき風鈴の音まだ聞かず

箕面市 坪田 紅葉

パラソルが杖がわりする夏が好き
ちよつと出たすきにくる宅急便
忘れんぼつまらぬ事はおぼえてる
嫁った孫急に大人の顔になる
一人では淋し二人は荷が重い

西宮市 門谷 たず子

生きる欲まだ考えてます栄養価
画廊出て一枚の絵がつきまとう
妥協ぐせすぐごめんネが口に出る
娘につたえたい自分史にある水たまり
すいとんを忘れた舌でフルコース

高石市 浅野 房子

四面楚歌 生きるヒントを模索する
目立ちたい雑魚で真っ赤な服を着る
不整脈 私の夜を支配する

少女なら一度は読んだハイネの詩
デパート一周 晩のおかずが決まらない

大阪市 大塚 節子

問診から流れ作業の大病院

いいかげんなこと言いなはんを見てまっせ

カタカナの店の名覚えて来たはずが

兎一羽うたて気に食う夏大根

滔々と名乗りを挙げて川の旅

寝屋川市 岸 野あやめ

引っ越して医者の評判聞きまわり

いっぺんにひとまわり老け病み上がり

邪魔だった道具 出番に見当たらず

清貧をわれは凡人喜べず

看取りにも慣れそれなりにある対話

宝塚市 丸山 よし津

他人事と思った老いがしのび込む

はずみ過ぎたボールは溝に落ちたまま

教えられ いるかは喝采待っている

下積みで一円玉は出番待つ

旅疲れ土産ひろげて癒えてゆく

竹原市 森井 菁居

幼き日から白樺白き肌を持つ

お互いに罪はろぼしの夫婦旅

スケールが違うぞ北海道の虹

旅疲れ禁句とすべし露天風呂

美唄讃歌 芙美子の影をしかと見た

呉市 槇田 英詩

雨無駄に降るなよ先はまだ長い

観音様も老母も無口でおわします

しんどいね老母より十九若いのに

喪の家のキッチンにいる両隣

どなたさんも美人に見える妻の友

竹原市 時 広一路

狭い道だつて二人の縄電車

六十路坂まだ点滴を知らぬ幸

逃げ道の曲り角なら見向かない

体重計二キロ減らせてくれた汗

五勺なら目をつぶろうよ休肝日

竹原市 岡本 清水

心身快調ついスピードをあげている

体力減退 関白の座が揺れて来る

被爆して未だある命 原爆忌

計の知らせ他山の石と識る齡

日除などする事もなく秋立ちぬ

竹原市 岩本笑子

八月の空人間として祈る
潮風のリズムで島の盆踊り
襟足のああ日本に生まれけり
ナストマト一本ずつ植えこと足りる
花手桶 息子娘をしたがえて

八尾市 宮崎シマ子

紙人形泣いたら袂から破れ
赤とんぼに似合うた風がやがてくる
五味八珍 茄子の浅漬その一つ
死んだのも生きてゐるのも帰る盆
河内音頭一枚きりの浴衣着て

八尾市 高杉千歩

歩哨中 撃たれしという月よ幻よ
真夜中に起きて向き合う絵具皿
軌道修正 今からだって遅くない
上手な嘘に続きをお願いし
針の穴ほどの過失に脅えてる

八尾市 山下美津留

酒も毒煙草も毒で生きてゐる
歩の位置で泳ぐと世間よく見える
戦前の水着を見せて一くさり
街角で一息入れる万歩計
突然死 無念の声を聞き損ね

八尾市 吉村一風

君はどう今輝いてやつてるか
旅の味覚えた舌がゆきたがり
他人の痛みなんとか分かる歳となり
埋み火へ火照る思いの便りくる
思い出し笑いを猫にみつけられ

八尾市 片上英一

おかゆ炊く義父とあんたの二人分
塩分は控えめにする余命表
街角で別れた人とすれ違ふ
戦後史にやみから闇のある頁
パチンコの台を終了させ無言

香川県 松村迷観子

一回りした新籍にも票の割れ
欲得の話も金でゆきづまり
母なるはみな小難として受け止める
上昇の波は斜波に気がつかず
唯怒るだけの一生だつてある

香川県 木村明人

七人の敵ありがたしありがたし
古里の川にホタルが戻つてき
前輪を追い越す後輪だつてある
松茸を二切れ食つて秋終る
ソロソロとネジがゆるんで来た傘寿

香川県 成重放任

無料とて汚すな空気皆のもの
未だなお論す亡母の夢枕

豊満なビキニが老いを楽しませ

音をたて空気吸い取る池の鯉

光り物付けないままに逝った母

香川県 川崎 ひかり

風になる子供が広場に見あたらぬ

よくもまあ文句の種があるもんだ

テレビ見てビールとピーナツあればいい

散る時を風と相談してみよう

好き嫌い猫にも犬にも私にも

香川県 池内 かおり

帰省客見送り犬も大欠伸

三千株 善女で埋まる萩の寺

八十の老母 粧えば女です

細ばそと火種を守る機を織る

スイッチを忘れて今朝の飯がない

香川県 新川 マサエ

文明が自然を破壊するこわさ

下り坂優しい風とペダル踏む

光るものないけど温い人と居る

本当に嘘でもよいのあの笑顔

熱帯夜 螢となつて飛びたいね

香川県 永峰 伽名子

和尚さんのご都合 一夜の宿をする
非自民の宰相は温故知新のお殿様

亡母の歳思えば余命四年半

子等よ孫ようんと羽搏こう思い出に

財布の紐ゆるめてその日を待っている

香川県 工藤 吟笑

薬漬け死にたいなどと嘘の皮

借りに來た嘘より一枚上の嘘

居心地が良いのか貧乏神去らず

気が付けば文句の言える歳でない

子の背広 親父の給料持つてゆく

唐津市 田口 虹汀

初盆のお布施が重い提げ鞆

精霊が迷うお盆の新と旧

叩かれてお礼を申す座禅かな

B型の妻は夫の役をする

いい笑顔妻が差し出す心太

唐津市 久保 正剣

国民と仲間裏切る永田町

玄関で少し待たせる夏の客

野合とは野党連合のことだろう

シャンデリア浴びて麒麟の夜会服

衣擦れの音を忘れた訳でない

唐津市 仁部 四郎

いやそこは違うちがうと外野席

老兵の闘志くもらす週刊誌

厚化粧男まさりの嘘をつき

じいちゃんの片腕彼も十二歳

町名が変わり由来は埋められる

唐津市 山口 高明

真っ先に消えたふたりをさかなにし

政界のドンには閻魔あきれ貌

影武者で終るものかよ禊する

老母さんの部屋も造ると持つてかれ

卑猥だと言ったおんなが耳をたて

唐津市 筒井 朴竜

日銭追う暮しで柳句を詠む余裕

弥陀の愛 地獄で縋る蜘蛛の糸

余命表握り潰した癌告知

古唐津の絵皿は飾り棚に据え

唐三彩 目で撫で回す抹茶碗

唐津市 浜本 義美

若竹の舗道裂いても生きる意地

齒科通い麺と豆腐とジュースだけ

冥土への土産は要らぬ身の軽さ

老女独り猫が四 五匹 日々好日
良薬を勧めてくれた人が逝き

出雲市 板垣 草丘

御成婚 山から庭へ樹を移す

月の夜の裸は男寄せつけず

咽頭の粉衣にむせる麦こがし

離婚した次男と暮らす寡婦の姉

合羽着て蒸れない養の話きく

出雲市 尼 れいじ

くちなしの香り地面へ零す雨

カレンダー持たぬひぐらし鳴いている

筆ペンの先が震えている計報

平坦な道は知らない乳母車

Gパンの母が浴衣の娘を連れる

出雲市 園山 多賀子

単身赴任何時まで続く栗の花

旧姓の亡母の鯨尺生き残る

一言が虫の居所誤解生む

長雨の情性スパイス効かせねば
ドミノ倒し退屈凌ぎかもしれない

出雲市 吉岡 きみえ

夏すだれ追憶の中の遠花火

つき合いがよくて私と缶ビール

裏口を照らす月夜のしのび逢い

微熱の中 逢いに行く日の眉を描く
生活のリズム崩さぬ鶏の声

島根県 松本文子

たくさんの雨に出逢った傘を干す
リサイクルやっぱり惜しい母の絹
パン食と米食が居る皿の数
伴せな音で鍵束が帰る

同伴者のような素振りをしてくれた

出雲市 島 祥庵

耳底に消せぬ昭和を背おつて
基敵へ電話してみる今日の雨
昨日の鼓動が残るぬれた傘
赤い傘夢のしずくがまだ切れぬ
まだ声にはりがあります父の舟

島根県 佐々木 芳正

先生がお嫁にいった通りやんせ
夕焼の見事な位置に書斎置く
さよならを何度する気でいる喪服
人妻に惚れて夕焼道帰る
かりそめの恋の終末 遠花火

出雲市 伊藤 寿美

外で逢う妻につき合うモカの味
蓋しても焦げた臭いはもれてくる
カンナノ朱 愛の重さを知りつくす
ノラになる空想もあり米洗う
誕生日嫁から届くハナエ・モリ

出雲市 小玉満江

奉賀帳ふるさと思う人ばかり
札束へ心貧しい野獸たち
蛇苺おどろおどろな山の道
仕事中笛を吹くのはお巡りさん
孫達と私はポチの味方する

出雲市 小白金 房子

譲り合う心やさしい農の道
来客へ猫も出て来て爪をとぐ
いい人に出会い女の白髪染
風鈴の下で碁盤のにらみ合い
牛糞の力豊かな農やさい

島根県 石飛 水煙

偶然が出来過ぎ誘いにのつてみる
ごめんなさい裸で手紙書きました
亡母の忌は話つきない子が揃う
選挙戦 お隣同士目をそらす
ざわついて御一行様ご到着

大阪市 北 勝美

六十年連れ添う妻の爪を切り
戻り道影は俺より先を行く
遮断機の向うで轢かれた俺の影
地を這ってどうにか隅で生きる黒
滝つばで虹を画いた陽のこぼれ

京都市 都倉求芽

亭々と杜の茂みは神となる

雨雲が山の機嫌をもてあそぶ

油断すな消しゴムの屑捨ててまで

汗拭いてふいて返事をととのえる

浮き沈み最小限度で来た小舟

京都市 松川芳子

生きて来た歴史卒寿にある自信

素晴らしい笑顔に宿る人間味

正直に見つめてくれている鏡

淋しい日味方の声が欲しくなる

この辺で暮しのリズム整える

富田林市 片岡智恵子

母と子のゆとり子ばなれ親ばなれ

人ひとり赦してちよつと背のびする

保育園 先生もいっしょにする昼寝

鳥の恋見届け軽く拭く硝子

外国のいくさ忘れて遠花火

大阪市 神夏磯典子

鰯雲 舌はますます肥えてくる

酒呑みは酒が薬と決めている

おんならしさへ幾つになろうとも嫉妬

深呼吸したら少しは楽になり

机上論 青いりんごが熟れてゆく

河内長野市 井上喜醉

弱気より故郷の空見上げよう

喪中でも噂になつてゐる女

頼まれた嘘アリバイの土産買う

台風が外れて喜ぶ里の秋

早起きの我が家の宝鳩時計

東大阪市 崎山美子

口元の扇子で女将過去かくす

何事も妻の意見が最優先

ふる里の墓をつつんだ蟬しぐれ

芽が出ないままにふる里遠ざかる

ふる里は亡母偲ばせるあたたかさ

大阪市 藤田頂留子

夕刊の見出しに眠れそうもない

雷も一喝したくなる世相

魚ぎらいに旅はつれない四方の海

噴水もまだかまだかとのび上がり

愚痴らずに忘れ上手になつておこ

高知市 北川竹萌

時化去つて裂果西瓜の後始末

梅雨時化の続くが茗荷当り年

花火見る莫産敷くお隣来てました

八十一の例会開く元気です

奥仁淀 思い出多い濁り汲み

西宮市 西口 いわゑ

吹田市 山本 希久子

琴線にひびく同士のうまい酒

万葉の彩を思わす露草よ

大臣の交代劇を見る茶漬け

触れ難い白磁の壺と待たされる

胸の内知つてゐるような雨の音

神戸市 山口 美穂

後ろ姿だけでも若くと背をのばす

まだ若いもう若くない夏帽子

終バスの席を占めてゐる塾帰り

尻尾振つて奥歯噛みしめる宮仕え

汚職にも怒らぬ日本の平和ほけ

堺市 黒田 真砂

春すみれ唄いつつする部屋掃除

老醜はかばうべくない春鏡

夫唱婦随で今日までつつがなく二人

欲望に負けて茜色の服を買つ

絵具皿 不服も共にといつておく

岡山市 山本 玉恵

愛少し足りぬかりんごまだ未熟

文学をかじり絵筆もなめて見る

切り札を持つ身に今日の向い風

アドリブで綴り上手な夫婦絵図

八起き目の虹を夫婦で追いかける

首塚の無念に揺れる曼珠沙華

肩パットほどの虚勢は持ち合わせ

ボトルキープ会いたい時に会うことに

いつか油に溶ける水なりさんご婚

タオルから朝の諍い姉いもと

倉吉市 淡路 ゆり子

盃を受けて約束縛られる

子育ての杭は深目に打つておく

赤とんぼお前も秋が大好きか

合掌の指から落ちる欲の種

七七忌 明けてひとりの向い風

岡山市 小林 妻子

痩せ我慢古希がなんだと少し呆け

台風よ食うだけの米残せるか

お隣の四男坊が来て遊ぶ

長雨に瓢箪を食う虫が居る

空缶を握りつぶして無念がり

大阪市 井上 白峰

喉にまで来てる本音が吐き出せず

軽口を叩く男に意図はない

口先で上手に捏ねる手前味噌

お呼びではないのが顔を出し過ぎる

本当の敵は自分の虚栄かも

守口市 結城君子

灯台守になりたい夢をまだ捨てず
台本にないアドリブが受けている
痛いところ来ると殊勝な声になる
余生見積り今日も飲んでる缶ビール
外出と帰宅はったり街の角

岡山市 井上柳五郎

生き甲斐を禁酒禁煙とはあわれ
少しなら禁酒解かれる嬉しい日
三年振りホロ酔いの味思ひ出す
運勢欄必ず見てる喜寿の父
老兵の入退院を知る便り

奈良市 米田恭昌

日章旗と言われ日の丸角がたつ
孫でさえ内緒の話こそばがり
家族会議 姑の出番がやってきた
灯火管制 満天の星忘れず
五七五の道に無器っちゃ迷いこむ

羽曳野市 田中透太

何遍もしたい話が胃に溜る
こだわりの虫一匹を追い出せぬ
その後の話は酒のせいにする
だとしても一言言つて欲しかった
今日だけで済まぬ話をして帰り

生駒市 北山悟郎

自己顕示 原色の服着こなしで
嘆かない義肢を頼りに歩を固め
一円を笑うおごりの悲しさよ
三途の川 行き戻り二度と渡らない
妻方の血筋か親に子が尽す

大阪市 中西兼治郎

角隠し過去も隠してしとやかに
功なり名を遂げついにはほけとなり
南北で日本列島いじめられ
大仕事したよう税務署から帰り
駐車場お寺のあった頃偲び

姫路市 大原業香

運不運 神にまかせて靴をはく
人形の目が生きている怖くなる
ノータイの人との対話うそはない
貿易黒字 庶民は不況風ばかり
地下茎の持つたくらみはまだ言えぬ

姫路市 丁坪サワ子

ファッションに縁切りさせた背の曲り
学歴を追う子らにない夏休み
きょうのこと忘れて昔の生字引
日本の父うしなつた笠智衆
お腹の子に免じ真夏の披露宴

姫路市 中塚遊峰

寢屋川市 柴田英壬子

歎異抄学んだあの日が極楽か

本当の味方きつい事も言う

「ありがとう」こんな言葉が出やすなり

笑顔見てこちら嬉しい年齢になり

度忘れの度がすぎ老いの佗しかり

今治市 野村京子

老醜を鏡よ写さないでくれ

夫婦茶碗きれいに洗う性洗う

シャム猫も花も無口で愛される

長い列 善男善女香匂う

人許す私も年だなと思う

岡山県 二宗吟平

年のこと思うひまなし回るコマ

ジョギングがノルマとなつて犬の連れ

形代に夏を乗り切る願いこめ

ご縁日だけは忘れぬご同輩

検診日忘れるほどのあれやこれ

尼崎市 田中薫

阿弥陀堂女の靴が脱いである

犯人のように戻つてみたい駅がある

かなしみを泳がせている 地下街

こころ弱き日は明りをつけたまま眠る

この世を見てしまった大きな過失

鬼灯になつて甘える盂蘭盆会

原爆忌語り部たちも老いすすむ

風蘭の香が風に乗る軽い鬱

立秋や青唐のたねの猛々し

訳もなくこの安らぎが嫌になり

羽曳野市 吉川寿美

再職へ鱗をはいだループタイ

時の流れの早さよ女の時刻表

逃がれ来た森が今更あたたかい

ひと呼吸おいた答で的を射る

もう一度信じてみよう遠花火

藤井寺市 中島志洋

文化人と言われる人の別の顔

あの人に会える気がする盆踊り

孫以外呼ばれたくないおばあさん

禁煙の勧め煙草を吸いながら

初恋の人と出合つた露天風呂

堺市 一瀬福一

三階の噂が降りてくる団地

自問自答 風の噂に立ち止る

妙薬の本家がそつと医者と呼ぶ

新米も秋田小町と調子よい

おしどりをじつと見ている倦怠期

西条市 片上明水

配膳の音で病舎の刻を告げ

ヒゲを剃る日の病舎いい日和

聴診器痛いところへ来てとまり

詰所の灯一つ残して病舎寝る

音一つずつ消して病舎の夜の幕

岡山市 荻野 鮫虎狼

暇である双眼鏡を取出だし

鬼薊真直ぐ帰れと通勤路

山の湯に浸り儲けを考える

時々妻が気になる事を言い

再就職 中古の靴を磨き上げ

吹田市 栗谷春子

ゆたかなる人のこころや茄子の色

老いたのし たいがいのこと許される

晩春は嫌です春はうららかに

闇を出てすぐに闇ありおこの世

わが世には水引というけじめあり

高知県 赤川 菊野

結び目を少しずらして妥協する

ブラトニックラブなら何時でもしています

鬼ごっこやさしい鬼で物足りず

説法を聞いて仏の顔で出る

信じない守り札だが持つて出る

北九州市 梅田宣司

古里に借りが無いので靴が鳴る

振り向けばカチカチ山のような過去

子の日記 親父のわしが出てこない

一本の薬の重さを知るカルテ

サングラス一番似合う顔となる

岡山市 花田 たけ志

駅前風情を変える町起こし

逃避する気持は流れる汗に無い

ささやかな欲が幸せ連れて来る

地球から見れば人間恩知らず

たまさかに出した勇気が勇み足

西宮市 秋元 てる

哀しいネ老い許されることばかり

問われても往事芒々白い霧

また元の一人の夜に掛時計

出来過ぎた話黙って聞く湯吞

電話値上げですよクロヤナギテツコさん

広島県 田村 新造

古傷を曝して見せる逃亡記(興安嶺逃亡記)

集団で逃げてその後の運不運

葡萄して掃射のがれた湿地帯

集団が蜘蛛の子散らすように逃げ

ふるさとはまだまだ遙か何百里

静岡市 安本晃授

ひと掴みの塩を敵からもらう余後
成り行きで敵の椅子にも座る妻
八十の飛び石軽く翔ぶ素足
朝露を踏むと夏草語りかけ
法被着る孫も御輿の花となる

静岡県 蘭田 模 沓

不況とは別に筍よく伸びる
梅雨冷えに鳥肌のたつ山の駅
補聴器へ新型やかんの笛が鳴る
豪邸で雨の降りだし気がつかぬ
脚線美そうでないのもミニをはく

大阪府 粂山 隆

み仏にすぎる夢見が悪いから
日当たりにたまたま出ないだけの悪
忽然と海に空港浮かばない
スローテンポにめりはりつけて歩いてる
漆黒の闇の彼方へうらばんえ

寝屋川市 堀江 光子

人工の島にも虫が鳴きはじめ
鎖ない碇がひとつ捨ててある
銀漢を背に祭りの太鼓打つ
川埋めて車走らす文化かな
それからのことこれからのこと墓の前

豊中市 吉田 あずき

麦藁帽子素朴な夏をなつかしむ
蟬しぐれ噂話を消すように
ペランタでまだ揺れている父の椅子
ポケットに反旗貧乏ゆすりする
新首相曇らせないで窓ガラス

岡山市 矢内 寿恵子

立秋へ梅雨の未練がまといつき
向う岸の灯りが見える快復期
飯の世を生きる背伸びをくりかえす
向う岸へ届かぬ石の運不運
古里の小川に嘘は流されぬ

奈良県 長谷川 春 蘭

生甲斐の句作に老いの薄暑なる
母が居るただそれだけの子の帰省
茄子二本植えて充実妻の日々
流灯となりても先をゆずらざる
病室の小さき世帯団扇して

京都市 山海 友 熙

ウインドー秋さきどりの模様替え
六地藏メルヘン世界語りつき
風花や叱られそうな長電話
書いたあと「これでいいの」と紙に問い
東北の座にハレー集団子らと指す

伊丹市 山崎 君子

夏の花 炎えろと言ってくれたけど
百合の花 亡夫もわたしも好きな花
盆過ぎて淋しくなった仏間です
別れても爽やかでした花時計
蟬の声だけが夏だと言っている

藤井寺市 福元 みのる

世も末と病む身 呻吟長電話
病人に励まされてる見舞い客
インターホン間に合ってます幸福も
鯖寿司の特価の列に上司も居
世のなが変わる自分も変えなくちゃ

高知県 小澤 幸泉

神さまの愛が無情か雨しきり (U兄逝く)
妻と二人ただペンの音流れ行く
L型に敷いた寢床に夏日射す
じっとしているといたたまれない夏の部屋
眠りたいだねむりたい酒を飲む

島根県 藤原 鈴江

良し悪しも幼なじみの仲なれば
どちらとも取れる笑顔にややこまり
野の花を活けて安らく幸せよ
正座しか知らぬ女の作法とや
雑念を払う念珠を爪繰ろう

豊中市 辻川 慶子

夏の浜 夕暮れが好き雲が好き
ひと駅を歩いて気付く街の色
お見舞いに行けば退院したと言う
あこがれている時がいい遠花火
風の盆久しい人に会う予感

大阪市 寺井 東雲

電話より内緒話はお手紙で
純粹な女性に政治まかせたい
旅行中生徒に持たすポケベルを
虫食いの一枚板を看板に
小児科の医師は母親せめている

砂川市 大橋 政良

日めくりの表情 雨の匂する
傘立ての傘思い出す雨の音
父という案山子が畦に立っている
鳩の足平和の道を疑わず
言い負けた音であしたの米を研ぐ

和泉市 西岡 洛醉

友の計に明日は我が身の計を練る
旅ブックあの日の僕は若かった
心臓がドキリ空似の人と逢う
気にならぬ爆音戦後遠くなり
耳掃除 今日所思案の抛り所

吹田市 茂見よ志子

熊本市 永田俊子

夏の墓地夾竹桃が咲きほこり
片蔭を選つて話の続きする
家計簿の赤字 冠婚葬祭費
言い分は少しひかえる軽い罪
ほんやりもうつかりも居て老人会

堺市 柿花紀美女

両隣 夫々違う匂持ち
中流の暮しせつせとカルチャーへ
先頭をきる蟻にある心意気
忘れたい事が時々顔を出し
朝顔の花を数えて老いの朝

大阪市 上田柳影

節操を曲げると重くなる財布
母さんをごろす文句は少な目に
わが道を行くとは恐い言葉尻
足音が静かだ借りに来たらしい
清貧に甘んじ人を疑わず

富士宮市 渥美弧秀

また孫に愚痴る老母の長電話
颯爽と富士に真向う万歩計
遠花火故郷を想う胸の襷
百態の富士が詩人にくれる
秋夜長しすかに老いを突き詰める

わき役で終るピエロの泣きほくろ
眼鏡変えてごらんよ日の丸美しい
明日は明日の風が吹く盆踊り
古い囲むたのしい嘘がありがたい
悲喜いく度収めて閉じるコンパクト

枚方市 小森正晴

行つて見りややはり大ロシアなり
（ロシア・ルーマニアの旅）
ブカレスト ヒールの跡と弾痕と
六甲の水をロシアの空で飲む
ルーブルを日本人だけ忙しく
神国じゃないが日本に生きる幸

今治市 越智一水

砂をかむ思いで育てた子がやさし
友達に恵まれ貧しさなど忘れ
川風を受けて浴衣の恋すすむ
遠花火うちわの風で恋すすむ
娘より母が見合へきれい過ぎ

大阪市 榊本落児

愚痴ならべこれが私の呆け防止
リラ冷えと教えてくれた女の顔
火葬場が全自動とは知らなんだ
大阪の味タコ焼で飲むビール
庶務の隅あのおっさんも大卒だ

阪南市 坂口 公子

ライバルのひよつとこ面には負ける
絵に画いた餅を現にさせる鬼

聞くだけで目眩しそうな理想論

手違いと言うて温めていたい金

吐こうにも吐けぬ弱音の鬼やんま

枚方市 海老池 洋

あご紐をはずすと和むヘルメット

夜の街 女も川も厚化粧

ミナミなら名刺で飲めたそんな頃

ソロバンを片手にもっている味方

肩書のとれて私の薄い影

箕面市 中嶋 田実子

エリツインが切り札に持つ北の島

家事なかば神の道説くインターホン

聞き耳を立てる私と膝の猫

蟬しぐれどうどう巡りする思案

窓開けてごらん他人のいい意見

七尾市 松高 秀峰

苔むした本家の墓へ花を立て

ふる里に太い絆の父母の墓

グループを抜けて良い人悪い人

面倒な言葉はいらぬ母の笑み

バーゲンで得したように無駄の山

町田市 竹内 紫鏡

肩にカメラ老人パスもしかと見せ

リクエスト曲のいわれに胸打たれ

丈もよしコントラバスを弾く美人

永奉公する図書館のバーコード

宇部市 平田 実男

満点の教え子がいる気の疲れ

神様をご存知ですと二枚舌

五七五 五七五で惚け防止

居心地を貧乏神に賞められる

広島県 藤解 静風

長雨に機嫌そこねた風鈴よ

わが家に妻 花屋に花のあるごとく

道半ば明日へ足場を組み直す

もう少し生きて憎まれ口たたく

大阪市 板東 倫子

新政権お手々つないだ犬と猿

献金はするが献血せぬ輩

トータルで見れば日本は良いお国

駄々っ子のような酔客あやすママ

和歌山市 玉井 豊太

一泊で名残りつきない里の盆

大変な冷夏の涙は波ばかり

風鈴とマンガの夢を見ています

友達が良くて一人に決めかねる

大阪市 稲本 凡子

亡夫によく似たひとと遇う盆休み
祥月命日 亡夫と長い話する

墓洗うわたしの朱色まだ洗う
亡き姑と比べられない座りだこ

宝塚市 吉田 笑女

渡す物渡して母も気が軽い
チャイム鳴るまた新聞の押し売りか

引き出しの奥で勲章眠らされ
長男の車で詣る盆の墓

河内長野市 植村 喜代

電話中インターホンへごめんなさい
遅れて来た夏にびっくりする暑さ
あきらめも悟りも出来ず子が育ち
言いに来る聞いてはくれぬ勝手者

箕面市 椎江 清芳

ライバルの影が背中に伸びて来る
小さい火を夫婦仲良く手で囲う
飽食に茶漬け忘れる肥えた舌
約束を忘れぬための傘を借り

岡山県 池田 半仙

熱いのが味を猫舌不味く食い
年毎に減って寂しい蟬の声
誉め言葉みんな信じる馬鹿でなし
アパートも兎小屋にも自家用車

倉吉市 野中 御前

芸のないわたしに生きる農がある
肩書きがとれて博士の庭いじり
酒倉の匂に血糖値が上がり
メイクよし別の女になる鏡

岡山県 千原理 瑛

胃に溜る思いを聞いてくれ海よ
今日もまたいつものリズムいつもの譜
まっとうに生きたい心ゆがめられ
引き際が悪いやつぱり温い椅子

松山市 谷 真風

清貧に焼き唐黍の味がある
関係ないと若いのが言うのです
お菓子よりはがきの便りありがたい
おしゃべり菩薩人を楽しくしてくれる

唐津市 浜本 ちよ

中元の苦勞も張りもなくて呆け
風習が多くて嫁に省かれる
風鈴も無言真昼の油照り
老いてなお丸味に遠い頑固者

池田市 岡本 吉太郎

終戦日 人それぞれの暑い夏
盆おどり白髪が目立つ里がえり
水虫も定年と共に縁が切れ
公僕とは名ばかりとなるお役人

岸和田市 原 さよ子

しびれないおまじないしてお茶の席
まだ若いと思っているのは自分だけ
愚痴多い馬鹿な私と手を切ろう
言いかけた言葉をのんで負けておく

大阪市 大野 武太

ああ妻も年金もらう歳になる
損得の計算だけが先走る
立秋の列島梅雨があけきれず
夏休み孫にはまごの夢がある

大阪市 渡 部 さと美

家もお墓も立派になった里の道
境遇が変わると語尾が裏返り
おっとりさせてはくれぬ秋の雲
秋の鏡につこり元氣つけてやろ

吹田市 井 上 照子

窓閉めて籠る他ない孤独の日
勲章も在世のうちなら栄えたもの
地球異変 誰かの予言恐ろしい
ひと切れのパン人生を右左

竹原市 石 原 淑子

犯人は狸 唐きび食べたのは
人の目に左右されない月見草
野菜高 夫の菜園見直され
流星群見たくて親子首一文字

貝塚市 行 天 千代

金もなし借金もない気楽さよ
死ぬ話すると孫が怒り出す
亡母のように桜咲く頃逝きたいもの
異常気象頭も身体も変になる

倉敷市 田 辺 灸六

人のため何が出来るか天の邪鬼
この嘆き二度と踏ませぬ原爆忌
台風が地震見舞いにやってくる
長雨にタンスも軋む兎小屋

和泉市 岡 井 やすお

天不興南台風北地震
野に下り先の野党の轍を踏む
棚ぼたの大臣の椅子身に添わず
惚ばれる人になろうと今日も生き

岡山県 岩 道 博友

老いた旅 階段の時間 倍に組み
手抜きしたうどんかネギが多過ぎる
抜け道を犬より猫が知っていた
夏休み親を誘わぬ歳になり

寝屋川市 平 松 かすみ

一日里親 筋肉疲労かな
モニターのペンがテレビへもの申す
雨の日はゆっくりゆっくりお米研ぎ
神仏へ自分のことは五番目に

茨木市 藤井正雄

出雲市 板垣夢酔

乾杯の言葉早くも選舉用
ボート漕ぐ水平線に揺れる恋
公園を斜めに走るご通勤
迷ったのが嘘だった飲みっぷり

八尾市 古川 寛然坊

白鳥町 昔弁慶の失恋所

犬の餌 盗んで雀子を育て

出雲市 岸 桂子

釣道具揃えてからの病氣勝ち

忘れたい記憶を戻す花みずき

名工の無口道具だけの音

大皿に盛っているのは夢ばかり

皇族の行動時計の中に有り

御期待に添えぬと書いた暑い夜

米子市 金山夕子

出雲市 竹 治 ちかし

午前零時 月下美人と語り部に

お陰様家族元気で貧しくて

親の顔見たいと言われるハイ私

染まるには面白くない偉い人

長過ぎる賞味期限にある不安

米子市 茂理 高代

幸せを招く音色の笛を吹く

梅雨だから口紅赤い色にする

倉二つ残し夏草お留守番

情熱には自信があるアワダチ草

年のせい愚妻の二字が勿体ない

出雲市 久谷 まこと

出雲市 石 倉 芙佐子

すさぶ世に余生どこまで続くやら

篩の目変えても駄目な落ちこぼれ

餌を引く蟻の執念見てるだけ

義理欠いて一人よがりの付けを待つ

砂糖少し撒いて意地悪をされ

鳥取県 土橋 はるお

隣が打った境界杭に引つ掛かる
倉庫番しながら握り飯を食う

ふる里の天気予報も聞くように
踊り娘のポケットベルが鳴っている

鳥取県 山根 八重

珈琲にお世辞も入れてさあどうぞ
あこぎ者運が強くて力もち

鉢植えに僕の個性を押しつける
花嫁が運んでくれる恵比須顔

鳥取県 上田 俊路

蛙の子それなりにある未来像
一番にいつも並んでいる囀

焼酎とラーメン美味い博多の夜
願ってもない話だが金がない

鳥取市 春木 圭一郎

Vサイン カメラが寄ればしてしまふ
ゆつたりと風いである海へ会いに行く

ふる里に味と香りと人が待つ
敵陣へ送った塩が効いてくる

鳥取県 黒田 くに子

さんま嫌い秋の味覚と言われても
亡母のメモたよりに秋の種を蒔く

パーティーへ一寸すましているメロン
禁酒禁煙してもゆとりのない暮し

鳥取県 西浦 小鹿

やまびこが澄んで何度も僕を呼ぶ
あなたの胸に触れると波が高くなる

波の音静かに旅の眠りかな
故郷へ実印取りに行つて来る

鳥取県 乾 喜与志

墓掃除だけはまだまだ譲らない
草を取る仕事場のある幸せよ

貪欲も愚痴も人並み以上かな
夏冷えに入道雲もいなくなり

鳥取市 岩原 喬水

先手取り斜めに歩くへそ曲り
金婚の妻です二重丸あげる

老骨も小指の味は忘れない
クラーがきかず金魚も欠伸する

鳥取県 石尾 かつ乃

穏やかな風を待ちます風媒花
末っ娘も二十歳我が家は花ざかり

散歩道とりたての茄子農夫から
踊り場のやすらぎ過去は振り向かぬ

鳥取県 石谷 美恵子

ふる里の情けへ癒える旅の傷
淋しさを隠す悲しい大笑い

退院後くすり飲むのも忘れ勝ち
草むしる怒りが少しずつ和む

鳥取県 鈴木公弘

通帳の0を数えてから寝よう
夕焼けを背に少年と語り合う
五右衛門の風呂でひと日を振り返る
泥をのむ親父の海は寡黙なり

大阪市 町田達子

花火師のいのち夜空に輝けり
英雄という名で兄が散った島
静かなり夏の団地の大異動
袋菓子に街の地蔵も時を知る

茨木市 堀良江

雑巾で這うてみがいて満ちている
回転寿司なぜか気おくれしてしまふ
抜歯中楽になさいと言われても
梅雨晴れのないまま梅雨が明けました

守口市 森川まさお

聞き分けのよい子になって浴衣着る
販売機近所のニュースに疎くなり
ついそこへ来たと勧誘員が来る
なんとなくもじもじ帰る見舞客

大阪市 神保拓生

背丈だけ大人の孫はあかんたれ
二人とも呆けないように月参り
説教のあとの無口は恐ろしい
長生きの薬を配るクラス会

倉吉市 最上和枝

意地張れば坂がだんだんきつくなる
父さんが金魚掬いに夢中です
舞子さん花かんざしに憂いあり
バーゲンで浮かせた分を無駄づかい

倉吉市 米田幸子

演技でも妻の涙は苦手です
勝負師が弱気になってつきが逃げ
気の弱い男だ妻を楯にする
子沢山 母が弱気じゃ育たない

倉敷市 井上富子

ペットたる自覚のうすい爪を立て
百万弗の汗が飛び散る甲子園
忠告を無視した過去の後遺症
身晶肩な皮算用をする茶の間

富山市 酒井輝

自分から触れてはならぬノブがある
遺産どうとかで見慣れぬ縁者来る
付き合いを迫る病がまた増える
嘘を書きそうで自分史筆を折る

大和郡山市 坊農柳弘

一人では何も出来ない案山子です
怒るのはもう阿呆らしい消費税
幾度目の見合いか今年も秋が逝く
三姉妹退職金の行く先よ

堺市 古市 三千代

住みついて花火も音で見えて来る
ゴキブリの隠れたとこに身構える
世相変わり質屋通いも気にならず
長梅雨に桃の甘味のいま一つ

宝塚市 中田 純次

友も又なぜか筆まめ老いの日日
百貨店酒の売場の銘に酔う
根を張った嫁の権威にあとずさり
窓口の美人が今日も休んでる

岸和田市 三輪 通彦

不惑越え顔に責任持てという
敬老日だけは老いにも日があたる
恥もかき頭も打って伸びてゆく
気がつけば噂の顔がそばにいる

和歌山市 北山 好笑

家事嫌い旅とお酒と歌が好き
花あそび六十路の淡い恋に触れ
泣ききった日から新たな虹をみる
カードでねエ売ってほしいわ知恵袋

芦屋市 黒田 能子

お役所の紐つきペンで書かされる
縫い物をするとうわたしの部屋になる
子供同士親の悪口言っている
この川をまだまだ泳ぐつもりです

羽咋市 三宅 ろ亭

だらしない政治へ殿さまの目が抑え
爬虫類の目 名だたる群像声もなく
正信偈上げると孫ら経めくる

大阪市 松尾 柳右子

友が皆背を向けた日の熱いお茶
眼鏡なし高い買物して帰り
豊満な二つの胸に肩こらし

鳥取県 乾 隆風

わたくしの仏に嘘がつけますか
お茶碗を洗う音から妻になり
呼び捨てのあんたと五十年暮らす

大阪市 清水 利武

代議士であろうと無謀許されぬ
平成の夏に恐竜大はやり
見せるだけ見せて二十歳のお立ち台

吹田市 瀬戸 まさよ

ファッションの浜で一日寝て暮らす
ブランドのバーゲン化粧して出かけ
カナヅチと言えず反故にするデート

鳥取県 西川 和子

急いでも孫の足にはかなわない
ふる里の夢はきれいなものばかり
ワンパターン今日も茄子を焼いている

箕面市 岩 津 ようじ

わがこととなれば迂闊を通り越し

あのクスリ効いたかと首ひねる医師

このおれが惚けるものかと惚けている

川西市 松 本 ただし

余命表越えてハードル高くなり

浄水器通したほどのうまい世辞

深追いはよそう延びない風の糸

豊中市 滝 北 博 史

露天風呂 真上の雲が動かない

自民党 甲斐の山から崩れだす

砂遊び埋められるのはいつもパパ

和歌山県 岩 崎 瑞 穂

この先は独りで歩く暖簾分け

クーラーをさけて縁台好きな老母

汗しらぬ白い手袋テープ切る

堺市 中 野 櫨 子

Gパンに若さをつめて空の旅

リング食む音さわやかに孫二人

忘れ上手ストレスためぬ秘訣かも

豊中市 三 宅 つえ子

父母の声甦らせるのだ仏

ひげ剃って眠った父は男まえ

ひと七日短い経を真似て読む

倉吉市 野 口 節 子

愚痴るまい選んで乗った舟だもの

泣き虫の血だなと思うことがある

飽食の世で山菜が見直され

鳥取市 前 田 一 枝

神さまに柏手一つ借りが増え

借りに行き無心言われてことわれず

従いて来い言ったあなたを見失う

和歌山県 西 口 忠 雄

煮つめると夫婦喧嘩は何だった

鉛筆は機会捉えて種を播く

鼻唄の妻は秘密を隠してる

豊中市 井 上 直 次

孫よりもはしゃいでいます夜の灯

あがる花火夜店も花火売っている

深窓の育ちと反りの合わぬ仲

鳥取県 田 村 きみ子

姉妹が揃うと部屋が春になる

ポケベルが何時も男を追いつく

わたくしを無口にさせるサスペンス

岸和田市 田 中 文 時

君が代を白けた顔で聞く実年

自分史に食指動けど筆立たず

ベルひとつ押すに人柄反映し

自選集

辻 白溪子

松川杜的

司会者が面喰っている国訛り
ベテランの自信へ委すバスの旅
長男に期待しすぎていた誤算
茶柱を信じ都合のよい期待
国会で謝罪をさせた言葉尻

月 原 宵 明

久家代仕男

我が道を行けば厳しい向い風
相槌を打つうち反対決意する
原稿紙一字も書かず鼻毛抜く
過労死の徴候を見る終電車
欲捨てた首が浮いてる露天風呂

大 矢 十 郎

河内天笑

土俵踏めなきや横審へ名乗り出る
母さんと呼べば親しい嫁姑
娘を訪えばいつも干してる掃いている
耐えている嫁で恵みの日を信じ
妻の前歩いていつしか後になり

はぐれ鳩一羽私の側を離れない
タクトなくとも蟬しぐれにあるリズム
塔見える茶房は恋を語る処
逝く時は二人と思う鐘を撞く
ZIP探偵団あれからおはぎよう売れる
親切に拘泥わりすぎではありませんか
肚の底読むと尻尾が見えてくる
梅を干す日和もなく秋に入る
秋灯下壁に守宮がへばりつき
田舎なら屋号で問えばすぐ判り
簡単に相槌打てぬ男だな
妻よりもうるさい友がひとり居る
荒れそうでこの場は阿呆になつておく
曲つてゐる胡瓜はどれも貌を持ち
誘蛾灯 虫もわたしも灯に弱い

水粉千翁

爪嚙んで思慮周密にして果斷
曲り角ばかりで踏みしめようとする
譲ってはいくれない孫に雨の音
お見逸れをしたとは嘘も美しい
損得の損の重さに悔いがない

正本水客

地震から津波へ祈るまもあらず
正座して天皇皇后見舞われる
長雨の誘惑台風つきつきに
自民党崩壊ソ連をお手本に
連立新党静かにほむら立つ

児島与呂志

只そばで暮らして来たからいる夫婦
この人のどこが良いとも言えぬまま
長いこと持つて歩いた不発弾
逝く時はひとりと悟る寺の坂
どっこいしよ重い軀にある不安

遠山可住

華麗なる花火 札束数えまい
夕映えに染まるとしゃべる道祖神
子宝が九人ふるさと空っぽに
二級酒の影が踊ってばかりいる
ゴルフ場のみどりにいつもあなどられ

岩本雀踊子

敵がいる味方もいます生きてます
私でない女の匂い嫉妬
落ちこんでいるのは私の影法師
ゼニのない時にお金のいる話
妻の乱どこで覚えた変化球

小林由多香

誰にでも読める名前をつけておく
よく光る星ふるさとをさしている
朝食を抜いて胃カメラ呑みにゆく
健康と美容にメロン高すぎる
晴耕雨読きようは本棚整理する

金井文秋

内需拡大どうしましょうかりサイクル
逆風に老後無理せず帆をたたむ
ゆっくりして行けと忙しいところを見せ
クラス会もう言うて来ぬ歳になり
引退のつもり未練が引き止める

有働芳仙

新内閣 日本の夜明けにして欲しい
天変地異 地球も少し疲れ気味
結び目でないところから切れた縁
冗談か本気か篩にかけてみる
別れ際の一言胸にこびりつき

工藤甲吉

自民党苦いクスリを飲まされる
唐詩選の句を感想に退陣し
戒名を半分もらいまだ死なず
人中へ出て佗しさをまぎらわす
どこへ行くにも独りは淋し

本田恵二朗

星一つなにが不満か自滅する
裏表使い分けれる顔を持ち
どの枝も剪るのが惜しい花鉢
連絡がなくてもちゃんと来てござる
本心は言わぬが花と頬かむり

波多野五楽庵

魔女かなと言われてみたいサン格拉斯
潮来舟天女に乗れとすすめられ
津軽弁雪の風土を抜けきれず
美しい小指と約束してしまふ
フアスナーを窘めながら寿司を食う

恒松町紅

親ゆずりの眉善人の中にいる
老眼の涙腺もろく情に負け
編上靴の汗は知らないキーホルダー
早めしは兵舎ぐらしの後遺症
夏草やあれから解けぬわだかまり

野田素身郎

仕合わせな孫に添い寝の小半刻
検診車父は胃癌で死んでいる
孝行のまね事 汗の墓掃除
妻のいない夜を何して過ごそうか
一票を投じたい人余所の地区

藤井明朗

四百四病人間右往左往する
握られる手にだまされそうな予感
男と女内緒話は派手にする
ビールにも四季のうまさを飲んで
いつか恩返しする暑中見舞を書く

八木千代

わたしは狸 月を仰げば浮いてくる
姥捨の森だみんなも寄つといいで
にんげんに騙されまいとする狸
狸に化けてしばらく死んだふり
月がのぼれば起きて鼓を響かせる

藤村ノ女

出稼ぎの父を待つてる祭笛
運動会空は青色日本晴れ
アンカーの孫先頭を軽く抜く
あれこれと持って帰れと包む友
もの言わぬ松が後世喋り出す

黒川紫香

高杉鬼遊

のぞき込むように鳴門の橋渡る（句碑除幕に参加して）

白鳥を祭りにさせた句碑二つ

内海の雲と小島とそして句碑

温泉や満足そうな羅漢さま

源平の矢玉屋島の海を翔ぶ

小出智子

朝顔の花に微笑を返しとく

線香の灰ほろほろとこぼれるよ

さみしくなったら冷蔵庫を覗く

階段を上る母には掛け声を

つまらないものにまたもや蹴躓く

西田柳宏子

回復の目途へりハビリ熱が入り（入院実感）

高野山 白鳥 ベッドで焦れている

入院費よりも高うつく貸テレビ

気許り三步前ゆく松葉杖

松葉杖すってんころりん後ずさり

植村客遊子

税務署でねばりパチンコ屋でねばり

財産もくれず孝行せよと言う

インテリへ物識りなかなか負けていず

しくじりに触れず転勤させてくれ

催促をしない女将でよく儲け

川柳塔（追加）

鳥取市 西村 黙 光

眠れぬと昼寝女房の高軒
大臣と同じ名前の隣の娘
援軍のナンバーワンは般若湯

島根県 加本 義 良

豆しぼり魚も箱で跳ねている
巻き戻し出来ぬ脳味噌焦り出し
団体参拝わたしや車で待っている

八尾市 鷺 見 章

点滴の窓一面の蟬しぐれ
麻痺癒えて五指に命がよみがえる

寝屋川市民川柳大会 11月3日（祝）正午から寝屋川

市立総合センターで開催。兼題は、本気・引張る・余白
タイミング・肌・生命（各2句）。会費10000円。

川柳太平記 (185)

川柳の群像

浜田久米雄

東野 大八

「私(紫香)がはじめて久米雄さんとお会いしたのは昭和八年頃、現在の大鉄川柳会の草分け大鉄局畔柳社へ、水客君に誘われて出席した時で、当時は福田山雨楼さんの御指導のもとに、故植山九天、岡田某人さんらの錚々たるメンバーで活躍されていた。

はじめは厳しい、怖い人に見えた久米雄さんも、なじみになると磊落で、言葉を飾らないお人柄が私を引きつけた。

『いよう!』

と手を挙げていつも簡単な挨拶ですまされる久米雄さん。

大阪鉄道局から広島鉄道局に転勤され、暫くお会いすることもなかった或る日、戦後の枕木不足で、有数の生産地である中国山脉系の各地を買いつけに飛び回り、たまたま伯備

線上下石見の業者と相談がまとまって、一ト駅岡山側の足立駅で現物の栗枕木を検査することになった。極寒二月、それも雪が降りやまない県境の山の駅である。

特に寒い日だが、急を要する品物であったので業者、作業員を集めて検査にとりかかったが、積んである枕木が凍てついてどうにもならない。手がつけようもない有様で難渋の折、『いよう、どないしてるんや』

と後から声をかけたのが、駅長の制服を着た久米雄さんである。岡山方面に勤務されているとはきいていたが、こんな山奥の駅長さんで居られたとは思わなかっただけに、声をかけられたときは本当に嬉しかった。

それからは久米雄さんの好意で、保線詰所の諸道具を借りつけたので作業も順調、終る

と駅長室で暖もとらせていただいた。このとき路郎先生や在阪柳友の話も出て、とても楽しい一日でもあった(黒川紫香悼文)。

「路郎先生が元気で川柳雑誌をやっておられた頃、隣り」をテーマにした秋の特集を組んだことがあった。書き上げた原稿を持って編集室へ行くと、先生は笑いながら、久米雄さんからきた手紙を見せられた。

当時、久米雄さんは、たしか伯備線の足立駅の駅長さんだったと思う。ここは、何分、中国山脉の分水嶺に当る淋しい駅で、駅長宿舎がポツンとあるだけで、隣りには何も無いから、この「隣り」の原稿は書けませんという断り状だった。如何にも生真面目な久米雄さんの性格がしのばれる懐かしい思い出であった(正本水斎悼文)。

本名太郎、明治43年1月13日岡山県生れ。岡山県立関谷中学を昭和2年卒業、この年9月に国鉄に就職。岡山駅助役のほか各地で駅長を勤め、勤続三十年で定年退職を前に、国鉄功績章を授与されている。

柳歴は昭和8年10月、大阪鉄道局に在った川雄大鉄局支部畔柳社に入会したのが川柳生活の第一歩。麻生路郎、福田山雨楼、西田草楽に師事。昭和10年兵庫支部岬柳社を創設し、昭和11年広鉄局へ転じると直ちに故九天らと

図って広鉄局支部創立。岡山へ転出後も早速支部を創立して支部長を担当。戦後は備前支部を郷里吉永町に創立して支部長。昭和30年以降から大森風来子、服部十九平らと交替でNHK文芸川柳、山陽放送の柳壇を担当。昭和58年2月15日死去、享年73歳、柳泉院浄悦久米雄居士。

「国鉄在職中は、大阪・広島・岡山の現場非現業を渡り歩き、川柳の種をまき、芽が出た頃転勤して、また種を播くの繰り返しで、広島川柳会長石原伯峯、岡山ますかつと主幹大森風来子等その他大勢の良き花を育て咲かせて来られたのです。(中略)

人生は悲しからずや左派と右派 路郎
を感銘句に挙げ、世の中は右があるから左がある。その証拠に書道・華道・絵画にもこれがある。路郎先生の「悲しからずや」を「うれしからずや」と割り切った心になる余裕を持ちたいものだ、とも言っておられた(行吉照路川柳後楽吟社会長悼文)

久米雄唯一の句集は『川柳叢書・凡人』(昭和38年11月・川柳雑誌刊)がある。この序文で路郎は、

「吹けば飛ぶよな将棋のコマに、その一生を打ち込む人もおれば、わずかに十七音字にその半生を惜しみにくく浸る人もある」

と川柳人久米雄を語っている。

「岡山県弓削町に、第三句碑ができたのが昭和25年9月、和気郡吉永町にできた第四句碑は翌26年4月で、わずか半年の間に先生の二つの句碑が建っている。

第一句碑から第四句碑までの句は、いずれも先生の代表句であるが、第三句碑の「おれに似よ」の名作がわが岡山県にあるということとは、県下の川柳人にとって大きな誇りといわなければならぬ。

第三句碑は津山線、この線は岡山から津山鳥取へ抜ける中国山脈横断鉄道である。岡山・津山間の途中にある弓削駅の駅前の鉄道用地に建てられてあるから、毎日この駅に降りる乗客は何人かを調べてみると、平均一、〇三〇人となる。この毎日千人の人々がこの句碑を眼にすれば、川柳を知らない人でもわかりやすいこの句のイミは自然にのみこめるわけで、この十七字が数多くの人々の心に植えつける教訓的なものは、とても銭金では求めることができないものである。(中略)

近頃各地でいろいろな句碑ができていようであるが、僕はやはり人間陶冶の詩である川柳による句碑が人心を陶冶するものであるということに信じて疑わない。かりに俳句によつてその土地の観光宣伝上の一つの資料に

することよりも、その句によつて後進を教え導くことの方が大いに意義があると思う。

また句碑というものは、そう簡単に建つものではないと思う。川柳の盛んな土地には必ず句碑が建つとは限らない。先生と門人とその土地との呼吸がびったり合つてはじめて句碑が除幕されるので、この点岡山県は、うぬばれてもよいほど呼吸が合っている。あの除幕式の昂奮は永久に忘れることができないのである。

備前支部の句会は、大森娛句楽邸とぼくの家とで、隔月に開いているが、おかげで月には必ず先生の句碑を拝している。

毎年四月には句碑の上の桜が満開で、その桜の真ん中に電燈をつけて、夜桜句会を楽しむのだが、句碑の上に散る一片の桜を仰ぎ見て、先生への敬慕の念を禁じ得ないと共に、川柳するものの幸福をしみじみと味わうのである(『川柳雑誌』No.362、岡山県の句碑、浜田久米雄)

握手した手はなれないまま坐り 久米雄
凡人へもつたいたなくも湯があふれ
ふるさとの道が曲つていてたのし
功績章汽笛のなかを歩いて来
いつまでの命両手で大事がり

▼次号は「土居 耕花」

柳籠裏三篇研究 (十九丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

316 十八のくれから不人相に成り

露舟

七久保『この篇で度々出て来た女の厄年を詠んだもので、人から忌み嫌われる年が、一夜明ければ来るというのでは、当時の迷信深い人たちであつてみれば顔色優れぬのは至極当然であらう。

川柳にも十九の厄を利かせた句は多く、佳人薄命おおむね死因は労咳などになっている。

岩田『賛。

十八のくれに大事の客が切レ

三14

佐藤『「不人相」になつたのは、疱瘡にかかつてあばたになつたことを諷しているように思ふ。他は礎稿に賛。

八木『賛。佐藤氏説「もつとも」のようだが、

厄は十九なのだから、十八であばたになつたのでは早過ぎるようにも思うがよく分かりません。

岡田『十九の厄年で、ソロソロ労咳気味……という句。不人相とは、ここでは気分すぐれぬこと。

317 むまひ事かくれ里から嬢が来ル 五扇

七久保『この「うまい」という語はもらった息子に関していえば「まぬけである。ばかである」との意に解釈でき、嫁側をみれば「巧みである。手際がよい」という事が出来よう。この嫁の相手は余程、世間知らずの馬鹿息子で、先方を調査吟味すれば、そのようなセコハンのな女をつかまずに済んだらうに……。

岩田『「かくれ里」は岡場所の事と思うが、どうもピンと来ない。「うまい事」は礎稿とは逆に考えていた。

佐藤『「かくれ里」は、「かくし町」と同義ではあるが、この句の場合は岡場所をいうのではなく、吉原を洒落ていったまどと思ふ。つまり、女郎上りの出身を世間に隠して嫁入りする意が、一句にこめられているのではないだらうか。

鈴木『「かくれ里」を狭義に解すれば岡場所であるが、広義にとれば吉原を入れてもよいのではないか。したがつて佐藤説に賛。

岡田『広義説賛。

318 きつとした異見鳩だの鳥だの 狐声

七久保『本句「鳩」「鳥」が不明。御教示ください。

岩田『「鳩に三枝の礼あり、鳥に反哺の孝あり。雀は忠と鳴き鳥は孝と鳴く。畜生まで、かように親の恩を知るのに、お前は一体何と心得おる」と叔父に異見されるところ。中国の故事まで持ち出すところは生やさしい学問では言える事ではなく、それを「きつとした」と表現したもの。

客の無ひ姉へ反哺のかんさまし

拾四 24

紀内―賛。

三二 33

和尚化して本田となるいすす川 二五五
つけびんを神ンきやつて見て笑ひ出し

岡田 長異見鳩や鳥をませて言イ
岡田 岩田君ご明解。

安八楼 1

319 御師でげんぞく笑ふまひく

東水

御参宮和尚あつはれ能おとこ
鈴木 佐藤兄正解。御師の宿で付鬘をして
安元楼 4

七久保 神に仕える身でありながら、急に俗
世間が恋しくなつて、俗人に戻るのも人間と
して宜なるかな。笑つてはいけないことだ。

岩田 還俗とは普通世を捨ててしまつた

ような僧侶に対して使う言葉なのに、如何に
も俗にそまつたような「御師」が職を捨てて
もことさら「還俗」とは、可笑しなものだと
解していた。

一寸狂言仕立の趣向。「なんじらもわらつ
まいぞ」。
岡田 同。

320 中の町ひろくとした郭公

花菱

西原 この御師は別に還俗したわけではなく、
俗人のなすことをやつた。それを笑うなど軽
い意味にとりた。

七久保 不夜城といわれた吉原の夜の明るい
賑い振りを詠んだ句。桜も咲いてほととぎす
も啼く。

御師「が」でなく、「で」であるから、御
師でありながら、還俗とはおかしい事だ、い
や笑うまいとの意もあろう。

岩田 「ひろびろとした」とあるので、礎稿
に賛し難い。
時鳥さくらをぬいたあした来ル 傍四 18

佐藤 これは、御師から伊勢詣りする僧侶が
神慮を懼れて「付鬘」する習俗のあることを
詠んだ句ではないだろうか。この付鬘のこ
とを「還俗して、頭のばした」と洒落たので
あろう。次のような例句があります。

仲の町の桜は、毎年植えては取るもので、
丁度桜も終わり、仲の町の桜を取り払って、
通りが広々とした頃、一声時鳥が鳴くとい
うのである。

岡田 岩田説のとおり。

附鬘をはつして御師へ暇乞い

一二二 6

川柳塔鹿野みか月 結成記念川柳大会

とき 11月14日(日) 午前9時開場
ところ 鹿野町営国民宿舍「山紫苑」
兼題と選者(各題2句・午前11時締切)

「雲」	高杉 鬼遊選
「縁」	長谷川紫光選
「駱駝」	小島 蘭幸選
「紙」	松本 文子選
「花」	小林由多香選
「沖」	八木 千代選
「影」	門脇かずお選

会費 2000円(軽食・発表誌呈)

投句料 1000円(発表誌呈)

◎投句は10月31日までに左記へ

投句先 〒689-04

鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279
☎0857(84)2100

中原 颯 人方

川柳塔鹿野みか月事務局

水煙抄

黒川紫香選

米子市 木村春枝

そもその恋は駅から芽を吹いた
忘れないためのノートが見つからぬ
途中下車違った世相知らされる
底抜けのピエロ演じて今日終る
喝采は終着駅に待たせよう

摂津市 木下道子

宿題を急ぎ立てている蟬しぐれ
冗談の好きなお方の真実味
下手な地図迷路ごっこが抜けられぬ
顔のきく人のうしろに雑魚が群れ
信濃路の水車が客を呼ぶそば屋

藤井寺市 高田美代子

一行詩秋がスルリと逃げて行く
そむかれて葉末を転ぶ露の冷え
参観日センセが何時もより綺麗
道修町へマタタビ買いに猫が来る
坂のある街で靴紐締めなおす

松山市 白石春嶺

空ビンの始末盛夏を飲んだ山
薄給の身だが意外に金を貯め
語るまい苦杯を嘗めた日の悪夢
しんみりと聞いている方も親がない
湯の宿へとときめく空の時刻表

松山市 宮尾みのり

記憶力未だ時効にしてくれぬ
先生と言われてからの自己嫌悪
肩パットとると気負いもふっと抜け
秘密めく文字を手帳に書いておく
至近距離意外な面を見てしまい

広島市 森田文

はまなすが咲いて浜辺は夏の顔
雨しとど下校の子等の水あそび
夏休み天衣無縫がひとりくる
離れてはまた寄りそうて散歩道
雨蛙濡れて瞑想続けてる

富田林市 池 森 子

遠吠えの街に吐息を溜めている
母になる初冬の海はノーヒント
ごめんねと言えず無言坂は雨に
バイオリンもピアノも銀婚の音色
直線が切れた辺りに向い風

和歌山県 杉 山 精 子

B面は意外とシャイな男だね
陽が登る宵待草の片思い
戦争の匂が消えぬ回顧録
全身で酸素を吸った北の旅
銀婚へまだ変らない手の温み

宝塚市 永 田 暁 風

切なくてびくもしない樹を揺する
ともしびを持つ手にわっと闇が来る
脳死は死なのか安らかだった妻の寝顔
ひとり寝る君も自由と言いますか
爬虫類の膚に激情が滑る

名古屋 藤 井 高 子

コスモスに情けを貰う夕まぐれ
せせらぎへ川石丸く丸く古い
人間が好きで喜劇を繰り返す
奥の手がバックの中で眠りだす
「そんな阿呆な」と言いつつ天中殺避ける

広島市 流 奈 美 子

何時でも読んで笑って友の文
優しさが溢れテンポはスローです
散髪をされて庭木がはにかみぬ
夕暮れの女に長い立話
笑顔ならただです存分ふるまえる

東京都 山 口 新 子

句メモる常夜灯をお借りして
出迎えの君を待つ間のレモンイエロー
恋人の亡母さまの句をこよなきに
貝の口キリリ誘惑振り払う
目を伏せて握手した事悔いて汽車

富山県 高 畠 五 月

牡丹見に來いと寺から風便り
老夫婦相合傘の歩の乱れ
灰皿が愚痴も小言も知っている
さくら貝 波にさらわれ恋終わる
野仏の頬に涙の跡がある

富山市 島 ひ か る

八月の花火追想深くする
流れ星に母の願いと娘のねがい
里帰り無口な父がよく笑う
寺町に住んで仏と近くなる
善悪を決めかねている閻魔さま

熊本市 宇野照代

帰省子が去って静かな老いの膳
窓外の声楽しんでいるベッド

ブランドに見向かぬ自負を持つ小店

成功の過去を妬心が掘り起す

虫も殺さぬそんな昔もありました

熊本市 大川幸子

反故にした白い煙にある未練

暑さ連発フル回転の冷蔵庫

垣根越しの交流いつか忘れられ

逃げるのがとつてもうまくなつた下戸

譲り合う言葉へ愛が芽生えてる

大阪市 江城修史

不景気が情けの薄い街にする

振り向けば想い出だけが過ぎてゆく

生きる汗知らぬ男に草臥れる

年金の暮し重たい義理を下げ

妻走るレールに休む駅がない

和歌山市 田中みね

ご近所から急場に借りる知恵袋

すまんのう口癖にして義父が病む

好きだった頃のあなたは光ってた

裏切りを知っても思慕は捨てられず

順送りと思えば楽な老いの世話

尼崎市 児玉歌子

腰にシャツへんてこりんが流行つて

反論を待つハンカチが膝にある

野良犬の身軽さがあるひとり者

わざと音出して孤独の中にいる

流し目に少し油断をしてしまふ

尼崎市 長浜澄子

不器用で四角四面に生きている

サンオイルぬって彼女と熱い夏

手火花にチロチロ燃やす片想い

強がって見せる女のワンルーム

ライバルの忠告妙に肌寒い

尼崎市 田辺鹿太

負けてから深爪をする癖がつき

反り返る椅子にこだわる父の背

虫のいい話を神に持ち掛ける

敵もさるもの同じ香水匂わせて

嘘が嘘呼んでほんとになる話

久留米市 鶴久 百万両

愛染明王へポンと奮発します恋

思慕いつかコンビニボーイに甘んじる

キューピッドに逢う休日の絵を描こう

ハートのクインよ逃げた男をなぜ庇う

もし死ねばアルプスに骨埋めてくれ

和歌山市 岩 本 美智子
敗戦日いくさの本をいつも読む

語り継ぐ銃後の苦戦きのこ雲
舌を出す犬を真似てる熱帯夜
突然死 明日は闇路か迎え火を

静岡市 沢 田 き ん

テレバシー嘘が早速顔に出る
散る花のところが少し分かりかけ

冷え切らぬうちに返事をしたためる
夏帽子ひと際若さ浮き上がり

熊本県 岩 切 康 子

友情の誘いに負けて靴を脱ぐ
石段の凹みが語る学校歴

気を使い独り言にも返事出る
肩書の癖が茶の間で命令形

尼崎市 森 安 夢之助

祭り笛 俄仕込の孫が吹く
呑み過ぎの反省ころり忘れてる

差し引きの物差しにある欲の影
軋む音確かに聞いた鬼瓦

尼崎市 的 場 十四郎

軽い過去明日に重たい喜寿の足
菩薩にも夜叉にもなれるサングラス

青畳 座って妻と見くらべる
キッチンを広げ姑と意気が合い

一声に二声返る子の脱皮

札束があればと思う倦怠期
左遷地で独り口笛青い空

陰口は覚悟余白はとってある

尼崎市 野 瀬 昌 子

表通る声に返事をしてる孫

古画鋳机の隅で過去想う

言い訳の嘘すらすらと電話口

蟬が鳴く八月の空つき抜けて

旭川市 朝 倉 大 柏

バーゲンの無駄三日ほどして気付き
身辺の整理こんなにあった無駄

譲ること互いに知っている笑顔

優越感少しおくれしてお辞儀する

西宮市 亀 岡 哲 子

亡母の歳過ぎて華やかレオタード

再会のはじめて握手して別れ

駄菓子屋の少し遅れたばんばん時計

風強し男の傘を借りて行く

出雲市 林 悦 子

笹舟に乘せて送ろうこの気持

火をつけたのはあなた燃えたのは私

浮かぬ顔 知らんふりするやさしさよ

コーヒーは朝と夜との顔がある

鳥取県 奥谷彩子
笛吹けば踊ってくれる妻と住む

フルムーンしんみりと聞く風の宿
赤とんぼ山から降りて秋告げる
里の風集めて亡母の声拾う

大阪市 亀井円女

お盆でも亡母にまむしを買って来る
日に一度澄んだ心になる読経
初孫に彼女出来たとよい便り
好物に手を出し何がダイエツト

西宮市 牧 渕 富喜子

姉いもと判っているのにけんかする
世の風にすこし当ろうかすみ草
吠えられているのにお世辞言っている
控え目な黒子の役目果す嫁

西宮市 菊 池 トミエ

雨宿りくちなしの花香る軒
待ちぼうけ駅の時計の見えるとこ
目覚しが夢の遠くで鳴り止まず
何事も許しやわらか紙おむつ

今治市 越 智 青 園

公園に着地タンポポ悔いはない
もうお洒落やめてしまつて恋終る
達筆のくせに名文程遠い
静電気 私の服が生きている

香川県 薦 沢 翠

耳もとで般若心経ささやかれ
仮の世の愛だ恋だとかしましい
天の川浅瀬でお待ちしています
ヒマワリも私も少し疲れ気味

出雲市 原 章 峰

悲しみの数ほど傘が傘立てに
男傘忘れ上手で別れ下手
禁猟区から投げ返されるゴルフ球
虹の橋滑らぬように気をつける

和歌山市 堀 畑 靖 子

現在の位置に少々不満あり
口裏を合わせるためにする電話
愚痴聞いてくれる人あり熱帯夜
失恋をバネにした日もあった夏

岡山市 中 嶋 千恵子

好きだから約束してる遠花火
気配りをしすぎて溜る愚痴の数
凄まれて足ぶみしてる影法師
何事もなかったような風に逢い

鳥取県 山 内 芳 江

厚化粧しても鏡は知っている
充分に取ったつもり車の車間距離
模様替えしても変らぬ兎小屋
貸す耳を持って長生きしています

福岡市 井崎 ミサ子

子らの声やつと響いた雨上がり
母さんの声道にまで聞こえてる
こつこつと窓叩くよに雨が降る
雨の日のセールス無下に断われず

兵庫県 酒井 靖子

友という嬉しい武器を持っている
実印の重さが生活まで変える
油断したばかりに鬼が来て座る
年金で遊び上手を身につける

唐津市 浜本 治幸

納得をせぬまま拍手の波に乗り
悪い方悪い方へと失意の日
タイムトンネルを潜って目が醒めた
結局は何も変わらず日が暮れる

唐津市 市丸 はる子

真実は月が知ってる回り道
自画像のバックの色が決まらない
オフレコで本音出て来るPTA
方言と景色豊かなローカル線

酒田市 永澤 裕子

古里の家他人めく代替り
噂にはお聞きしてたと聞く怖さ
来る人はないのに門燈つけて置く
小引出し孫に金蔓狙われる

鳥取県 植田 一京

ワンタッチお湯が出てくる有難う
許す気になって足どり軽くなる
せつちの父にゆったりした母だ
四季ごとの幸あり農に生きてゆく

寝屋川市 宮崎 菜月

たまに出す男の稚氣を愛すべし
窓ガラス震わせ花火の光跡音
孝養をつくす帰省の盆休暇
コスモスは乱れに乱れて可憐なる

静岡市 三浦 つね

同じ服着てもマネキンほど映えず
お洒落して行くあてもない青い空
広くても他人の荷物邪魔になる
まだ八十路登る靴紐締め直す

横浜市 菱田 満秋

日本晴れ天の恵みの有難し
見残したところ思い出し旅心
天気にも意地悪されている景気
爾靈山 乃木大将の字は残り(中国を旅して)

河内長野市 大西 文次

廃線の枕木過去を語り出す
膝枕するのはいつも猫である
どう真似てみてもりえには程遠い
よれよれのズボン余生もまた楽し

今治市 渡辺南奉

一錢五厘思い出したいくないハガキ
何もないから素晴らしい過疎なんだ
台風に新政権を覗かれる
粉骨碎身ふと過労死のことと思う

佐賀市 古川かずのり

生きてれば老いにも追い風向い風
すれ違う人から秋の風の彩
無為無策風の気ままに生きている
奥能登路走り豊かな合歓の花

米子市 鹿島松子

早とちり又も失敗してしまい
足音が近づくノート閉じましよう
裸の絵が待合室にかけてある
わけあって障子を少し開けておく

岐阜市 渡辺杏村

秋空も欲求不満澄んでない
円高がピンときません小商い
丹念にチラシ見まわす妻になる
長電話妻が持ちだす砂時計

唐津市 山門幸夫

梅雨明けの入道雲は威勢よく
お爺ちゃん切符とれたと弾む声
孫達に無情の冷夏虹の浜
組閣成る烽火と虹は美しく

相生市 中塚礎石

のんびりとバスが田んぼの中走る
気動車を満員にする過疎の夏
失恋をしてから男に負けていず
ぷつぷつと切れた電話は声を知り

十和田市 阿部喜久江

道草を食うこと知ったランドセル
仲人に拝みたおされ心決め
助手席の妻の指図に気が疲れ
下心あるのがきかす鼻グスリ

河内長野市 柏本靖子

姿見と相談をする外出着
ストレスを鏡磨いて消している
嘘つけぬように磨いてある鏡
どっちでも良い事だから負けておく

貝塚市 池田寿美子

適当な広さに満ちる仕事部屋
CMに利用されてる反対派
おにぎりのユニークな味秋の彩
散策の話題途切れた萩の露

鳴門市 八木芳水

自画像の鼻が天向き威張りよる
ポケットベル人の自由を束縛する
広びろと海はやっぱりお母さん
花束になってあなたに抱かれたい

堺市 桜井 莊次

回復が暇も余してるベッド
すんなりと嘘が通った曲り角
裏返しのまま拾って来た噂
又聞きの噂煮つめる片手鍋

倉吉市 加崎 正雄

長雨が身体の調子狂わせた
海を見た幼い頃を思い出す
出目金が誰か似ているふくれづら
ゆったりと裏の山から月昇る

尼崎市 岩倉 キク子

決意するほどの事でも無い決意
うろついて見たが何んにも落ちてない
許せたら楽になるのに意地張って
はだか電球ゆれて並んでいる夜店

天理市 飯田 昇

変化球投げて自分を見失う
尻馬に乗った話がふくれ出す
ああ噂 目鼻がついて走り出す
アクセルを踏みすぎ嘘も背伸びする

高槻市 芦田 静江

笑顔よし妥協はしない腹の虫
聞き返す事にも慣れた丸い背な
太陽に逢う約束の朝の蟬
妖怪のような口紅踊り好き

西宮市 古谷 ひろ子

初デートシャツのボタンをつけてあげ
よい返事たのむと傘を貸してくれ
ありがとうと笑って逝った姑の盆

京都市 小林 英子

五山の炎見えず淋しい京すずめ
魔術師のハンカチ謀反したくなる
蟬も人も太陽追っている冷夏

枚方市 森本 節子

朝のうち家事をこなしてあと自由
ひと息に朝までねむれた日の整脈
つながれた犬所在なくふて寝する

綾部市 藤田 芳郎

出陣の顔しか知らぬコンパクト
お役所で邪魔臭そうな指に会う
頂点へ打ち上げ花火耐えに耐え

寝屋川市 北岡 波留吉

エプロンの白で引き立つ妻の顔
汗かいた割には仕事はかどらず
気持よく寝ている妻は美しい

和歌山市 山口 三千子

もう女捨てたつもりが血がさわぐ
厄落としたのに裏目ばかり出る
対角線引いて居場所を考える

松山市 丹下 美津子

断る口上妻の意見も聞いて靴
言いくいことは結局妻まかせ
控え目な叙勲の妻に喝采を

熊本県 高野 宵草

お月さんみな無事でした仕舞い風呂
ベストセラーだから買っとく飾っとく
雨続き暑中見舞を出しそびれ

徳島県 浜田 白柳子

包丁をつきつけられて妥協する
盗聴器つけておきたい好きなひと
悪友をさそってぐるぐる縄のれん

枚方市 濱田 良知

返信の暇なかったと長電話
打つ人によつては曲る釘もある
片思いでしたと笑うクラス会

岡山県 富坂 志重

赤ちゃんの世界は母の背中です
怒るよりあきれる事の多い日々
時々頼って欲しい老いの知恵

大阪市 尾崎 黄紅

よい知らせきた電話機を磨いてる
非常持出は仏壇の下に入れ
銀行が来なくなつた不況だな

香川県 辻上 よしみ

盆帰り遺影の母に迎えられ
肝心な所で本音出しそびれ
雲行きが怪しくなれば避けて待つ

富山市 鍋谷 富士子

冗談といいつつ本音小出しする
老いの独楽まわる速度が遅くなり
冷えた仲夫婦茶碗は似合わない

熊本市 遠山 夏生

評論家という野次馬がよく喋る
遺言を書くほど資産あるのかな
墓参り涼しくなつて思い立つ

西宮市 山本 義子

露天ぶろ極楽浄土にいる気分
縄のれんで男の背中ゆれている
神様に白紙委任状出している

和歌山市 森 茜

お茶漬を所望してはる好かん客
おのろけを二時間きいた電話口
丁重に上座へお尻浮いている

和歌山市 榎原 公子

すんなりと妥協できない腹積り
季節はずれの花をいとしいなと思う
朝寝して不意のお客に起こされる

兵庫県 倉垣恵美

法要の済んだメロンを切っている

気丈夫な明治の姑についていく

それぞれの夏こそすのひそと咲き

羽曳野市 芦田絢子

お互いのミスかばい合う共白髪

言うだけはただとお世辞のありったけ

入道雲と海の話をしてひとり

泉佐野市 内田倫子

夜店にはデパートにない物もある

乾杯をされて淋しい送別会

冷蔵庫西瓜のために入れ直し

静岡市 小木久子

お見合いがまだ巖然として残り

不況風吹くと首筋冷えてくる

通ぶったブラックコーヒーもて余し

静岡市 柳沢たま

正体の分からぬ草を抜かずおく

犬と猫ご飯ですよと朝が来る

ヤッホーの声が谷間へよく響く

静岡市 大村正雄

たまさかの刺激求めて夜の街

足並みの揃わぬ神輿揺れに揺れ

信州路 村を跨いで夕の虹

寝屋川市 後藤黎之助

坊さんに仏の年忌教えられ

駅前を偲び立話

年金のくらし表も裏もない

兵庫県 森脇和子

一息を入れたい午後へ孫が来る

手の鳴る方へ行くしかないよと老母弱気

有頂天うっかり裏まで読み取れず

柏市 上鈴木春枝

老母からの相談 遺書の話とか

処世術 父の見事な低姿勢

好きですと打ち明けてからさこちない

今治市 村上久美子

直球を投げて手のうちすぐ読まれ

外目には幸せ色の窓灯り

ええ恰好してストレスを腹に溜め

鳥取県 土橋睦子

立秋に旅の予約を友とする

便利さに甘えた主婦をしています

夫のいる時が私の天下です

尼崎市 吉永伊三郎

甲子園燃えてアイロン立てたまま

健康を知らせてくれる腹時計

血統はむかし殿様いま総理

尼崎市 湊 修水
よう動く舌が神さま売りにくる

田高の街をバイクで盆の僧
盆くらい外出しましよと妻が言う

尼崎市 河津 正治

性格の違いか好み折り合わず
綻びを繕い合って老い二人
ストレスを溜めて連休無事終る

吹田市 馬 渕 光子

長雨の後一斉に蟬しぐれ

公約は差し引いて聞く有権者
食卓にバラ一輪と午後のお茶

東大阪市 指 宿 千枝子

計算が苦手で友に頼りきり
旅の前後主婦の雑用多すぎて
駅までを小走りに行く母の癖

松江市 安 食 友 子

雑草がノルマの量をふくらます

同病があっけらかんで救われる

奴さんのような肩です宿浴衣

静岡市 永 倉 柳 華

遅刻して気まずく座る指定席

富士登山青大将が下りて来る

たかが一票されど一票積み重ね

熊本県 増田 一 乗
ここだけよ噂の種を蒔いてゆき

駒捌き首相の腕の見せどころ
よく生きた一日とあり古日記

静岡市 浅 子 まつゑ

優しさが一言欲しい嫁姑
聞き役も嘘に相槌打てぬもの
換気扇 今日はおすしの風送る

静岡市 松 下 正 枝

山鳩もクウクウと鳴く読経の間

首振って下手な尺八吹いた父
迎え火を焚きつつ遠く星を見る

宇部市 中 村 三 良

何度描いても目が仏には成り切れず
コンパスをくるっと回す平和だな
悪事千里そんな噂も聞いて夏

高槻市 執 行 稲 子

円熟の八千代師花の裾さばき

しのび逢い不器用どうし黄昏る

踏み入った隣の墓へ花一輪

大阪市 勢理客 トミ子

垣根越し落葉の頃は気もめる

角砂糖だまって一つ二人仲

クーラーの部屋で静かな夏休み

松江市 松浦 登志子

長生きにいい事全部やってみる

夫婦づれ間をあけて投票し

納豆が好きで丈夫な嫁ときく

岡山県 福原 辰江

心ふと留守につけ込む隙間風

美しい心に還る里の川

妻子には見せぬ涙腺だつてある

唐津市 山門 タミ

老いてなお遊び心は二十代

一年に二度の便りで元気です

田舎にも時代の津波押し寄せる

和歌山県 藤井 春子

そよ風が心の迷いを和らげる

打ち明けてしまった夜の深眠り

決断をさせた男の朝の風

新潟県 高野 不二

絵葉書で今日の親孝行終る

二泊三日八食分の薬持つ

混浴で男一人がいじめられ

吹田市 古川 喜美子

新妻のお里の味に馴らされて

福引の団扇が夜店へ行こという

金魚二匹に夜店の匂持ち帰る

香川県 田中 ふみ

日本三景松が主役の青い空

尾ひれつけ気ままな風に噂飛ぶ

浜伝いゴミを集めた台風の手

富田林市 山原 昭水

仏にも鬼にもなれず芋人生

長男が茶道部 次女が柔道部

今日もまた小学唱歌口ずさむ

兵庫県 北川 とみ子

すれちがう風に落目は覗かせぬ

もう無理はきかない古稀の風を抱く

何もかも知って見送る母の笑み

島根県 小林 延子

先生が名おぼえていた同窓会

さつきまで息子がいた場所に立つてみる

送られるほうより送るほうが泣き

兵庫県 西井 つや子

掌を合わすと素直になれて地蔵様

戦争のいたみが深く深く揺れ

控え目の姑が明るい灯を点す

島根県 福岡 博利

気の強い人には負けぬ爪を切る

もやもやの窓みな開けて夏が去に

早朝の散歩ピーマンの艶匂う

尼崎市 向井末貞一

ゆっくりで鼻唄も出る上機嫌
長寿社会探る健康朝夕に
応援は下心ない友情です

八尾市 生嶋ますみ

補聴器をはずし夫に逆らわず
禁煙車給でがまんをさせられる
キッチンの改造を練るひまな午後

豊中市 みきわきみ

年金の掛け損でした過労死す
官邸を去る日漢詩の結一句
大臣を若いと思う日まで生き

高槻市 乙倉武史

事あれば男表に立たされる
ほろ酔いで終る人生それも良い
聞く耳を持たぬ自論を持っている

弘前市 岡本花匠

風が泣くちははの声か恐山
太陽を味方にと出る余裕
白無垢の涙は本音言っている

羽曳野市 福田悦子

母の顔母の香りの桐ダンス
世代交代サッカー熱に酔うた年
一枚の紅葉が秋の絵を飾る

鹿児島県 大山舞鳥影

綿菓子を父にも分ける夏祭
ゴミ出し日鳥が先に待っている
汚れた手かくす手袋白すぎる

唐津市 江川青琴

インタビューでつかい力士の細い声
青信号 次々変る心地よさ
部屋中が洗濯物の「すだれ」なり

静岡市 宇佐美寿美

信頼の糸が惹き合う今朝の幸
潮騒の青へ胸ごと沈めよう
夜のしじまつる不安が胸を噛む

寝屋川市 坂上高栄

意志曲げて渡らにやらぬ橋もある
海ゆかばPKOの斑服
子の顔も忘れにこにこ痴呆症

寝屋川市 籠島恵子

こいつには負けたと夫のうれしそう
父さんの夢は息子と竿を垂れ
お誘いがある事だけは言っておく

鳥取県 小西五十鈴

同期生会A子もBも癌で逝き
角砂糖溶けてほどよい妥協点
蝶になるつもり爪を切っておく

羽曳野市 山本 たけし

ナイターの灯が星を消す野球場

愚痴きいて上げればいそいそして帰る

岡山県 牧野 秀香

民宿の特別メニュー粥馳走

惜しまれて逝くのも人生花の道

嘘の文字朝刊飾るトップ記事

星一つふえて見上げる亡友の顔

池田市 木村 一笛

吹田市 吉川 渉

町々に貼り紙のある盆休み

藤山直美 父そっくりな地の演技

雷鳴はちびっ児走らす蟬時雨

存外に自分の敵は内にいた

夕時雨酔いに任せて雨に濡れ

最北限夕陽はやはり赤かった

出雲市 園山 かおる

和歌山市 池永 正雄

したたかな釘が金槌寄せつけぬ

バス停に今日もノルマへ並ぶ蟻

ひと言があつという間に炎え上がり

お茶請けに羊かんの出る聞き上手

過疎の灯が今宵明るく里の盆

單身者 冷蔵庫にはビールだけ

広島県 森川 抜智

今治市 白石 サダ子

バス賃を払うて安い物買いに

ファミコンを孫へ金持ち面をする

チャルメラは悲しい音色で通りすぎ

早食いの癖 付けが来て肥満体

街しずか選挙も相撲もすみました

お愛想で撫でたペットで絆出来

吹田市 西岡 豊

寝屋川市 井上 すみれ

訓導の時のピンタは愛があり

有馬宿 家族旅行の豪華版

古靴 書齋の釘にぶらさがる

かくれんぼ隠れた二人が今日大安

大阪市 川原 章久

福岡県 本田 忠男

巣立つ子が残してゆくのは排気ガス

石蹴りをまた流行らせるJリーグ

急ぐなら歩けと車降ろされる

始めから裸で不況を泳ぎ抜く

許し合う道で足りてる立ち話

鏡には怒ったままで向えない

香川県 堤 くに子

青森県 諏訪 明雄

変り身の早さを見せる風見鶏

あいまいに生きてバカにもなり切れず

姑風吹かせて火種たきつける

香川県 松岡 遼雲

誰からも愛されていて恋されず

めがねはずしてふんわりと美女になる

君だけを愛するなんてよう言わん

広島市 中村 要

左遷地で川柳詠んで憂さ晴らし

事なかれ主義に徹した細い腕

ジープンのお尻若さがこぼれ落ち

香川県 山地 マツエ

六法全書枕に遺産考える

七人の敵へ古靴光らせる

行く末は嫁に任せる妥協策

海南市 谷口 義男

老いたくはないから夢を持ち続け

自分から背負い込んでる世話係

其処までも言うなと妻が目で止める

弘前市 中山 雅城

鳩笛を淋しくなったら吹いている

手を打てば直ぐに集まる人面魚

東京へ行った彼女は戻らない

恋ひとつ有情無情の夢芝居

山の宿一番鶏と共に寝る

ホロ酔いへ螢が誘う迷い道

松江市 浦辺 静江

お互いに励まし合ったクラス会

ブランコが揺れっぱなしの夏休み

母ゆずり雑巾だけは手縫いです

島根県 菅田 かつ子

重ね着で暑中お見舞申し上げ

ゴミまたゴミやがて地球が病みはじめ

ポジションを守りだんだん強くなり

鳥取県 武田 照女

肩書きが取れて家族の和に戻る

厄除けのお札旅行について来る

若いから決意が右往左往する

鳥取県 橋本 孝由

末席で一声ついて座がしらけ

一本のビールで足りる梅雨の宵

二重丸与えた妻に捨てられた

和歌山市 山田 博章

飢餓の子にわが子重ねてみる写真

おふくろの味に笑顔が添えてある

究極のグルメ梅干し海苔茶漬け

河内長野市 印 藤 智 子

父さんのお天気だけが気にかかる

七夕になればあわてて星を見る

いかほどの覚悟もせずに娘は嫁ぎ

兵庫県 安 達 厚

老人会 達者でないとつきあえず

口あけて問いかけてくる歯医者さん

生きかたを遊びで覚えた大正っ子

箕面市 木 村 天 弘

心配は母親だけのエアポート

茶碗洗う音に出ているお腹立ち

美人コーチにしごかれ楽しスイミング

八戸市 島 田 昭 治

借金を置土産にした亡父恋し

要領の悪さお金も素通りする

あまりにも得する話で気味悪し

岡山県 江 口 有一朗

大切なこと聞き逃す大欠伸

田中の鑿に仏陀の声を聞く（田中美術館見学）

私がわたしに帰る散歩道

姫路市 小 井 里 兆

腰を踏む孫の軽さよいとしさよ

一休みしてから歩幅狭くなり

同行の二人で歩く気丈夫さ

寝屋川市 太 田 とし子

倅せを求めて老人ホームとは

借りといて今だに記憶喪失症

ブツツリと切れた受話器をじつと見る

寝屋川市 豊 福 路 子

女郎花の色に染まっている秘境

大せがき寺で冷麦たべており

店頭に香嗅ぎわける祇園盆

泉南市 坂 根 流 水

くどくなり老いの証拠と笑われる

老い痴れて妻の墓にも参りかね

信仰も独善的になりたがり

河内長野市 水 谷 正 子

無位無冠 空の青さに救われる

恋女房七年目には角が生え

今日からは課長の枕寝苦しい

和歌山市 木 村 親 路

どうしたらよいのでしょうか落石注意

サツカーに声を枯らして妻帰る

テニス終え主婦にもどって蜆汁

豊中市 田 中 道 胤

蟬時雨 視界遙かに白い海

夜更けまで赤々燃えるキャンブの火

止り木を齧る鸚鵡の失語症

唐津市 岩崎 實

わが庭の狭き空にも赤とんぼ
雨蛙チヨコンと座る梅雨のあと

藤井寺市 楠 昭子

今が一番若いと鏡に言い聞かせ

ふるさとの太鼓のリズム呼びに来る

東大阪市 松山 隆

模造品 喜ぶ笑顔ふと少女

肖像を描けとはイメージ邪魔をする

唐津市 木内 ミチ子

反省をするだけならば次郎猿

赤とんぼふえてお盆が近くなる

岡山市 国米 きくゑ

二番手に付けゆつくりと行く余生

トンネルを抜けて青葉の風に逢う

泉佐野市 河原崎 礼子

サイレンとデュエットするはうらの犬

おとなりはお里帰りかおむつ干す

鳥取市 谷口 百合子

倉の小さな窓が一つある

農博から知った野菜を買って食べる

東京都 小寺 九

ごろごろと丸太転がる夏の居間

丁重なもてなし受ける妻の里

大洲市 横田 放人

袋路に住んで選挙を遠く聞く
昔話 孫が寢床で聞いてくれ

弘前市 一戸 ツネ

写経千巻 虚を攻める鞭となる

ふる里の詠りにつられ無駄遣い

豊中市 月原 方郎

波風を立てて帰ってゆく女

他人とは自分以外と辞書にある

岡山市 土居 ひでの

風の駅別れを惜しむ恐れ山

連投の肩をなだめる防衛率

茨木市 島元 ふみ

古い家具置いて私の城になる

窓に灯が嬉しあの人帰ってる

神戸市 岩田 信義

握手すれば青春戻る同窓会

チャンチャンコ似合い定年近くなる

鳥根県 岩田 三和

西瓜より頭冷やしてくれる母

新政府いなか光あてるかな

鳥取県 清水 加代子

いいお嫁さんになりたい友もいた

高校三年生まだ夢があった

十和田市 小笠原 敏夫

痛みより吹き出る汗が苦しめる
補装具の背中の痒みとめられず

唐津市 野田 旭恒

冷奴葱を浮かして差し向い
夜中ふと傍にナースの居る安堵

島根県 森 茂美

惜別の愛をひきずる影法師
ゼネコンの袋が溜まる知事公舎

今治市 渡 邊 伊津志

賞味期間過ぎた夫婦で頼りなし
釣れますか鳶が笑って輪を描いた

島根県 三代 朝子

梅漬けを終えて一息うまいお茶
句作するひととき残暑蟬しぐれ

兵庫県 中 野 とよ子

言いわけを知っているのはお星さま
運転をまかせそばから口はさむ

八尾市 平 川 幸枝

喝采もなく夫と生きくらべ
陽が当りいつも喝采ひとり占め

八尾市 秦 正子

口あけて怯えています歯科の椅子
手放せぬ扇子へ控え目のシャネル

仲間から出ると一人の曲り角
組んでいる仲間の腕がたのもし

尼崎市 中澤 向西

前触れのない来客にうろたえる
追伸のひとことそれが本音かも

鳥取県 山本 正光

お持たせのお菓子でお茶を入れてくる
息子の電話 電報みたいに味気ない

松江市 佐野 木みえ

青蛙ちよこんと部屋のまん中に
モシモシの孫の電話も変声期

島根県 松本 聖子

竹筒へ銭入れて買う土大根
借り着した晴れ着車の泥が跳ね

静岡市 片平 静代

庭の草気にしています今日も雨
決心がついて煙草をねじり消す

藤井寺市 川 端 たかし

鍵かけた日記残してどうするの
台本に出ないセリフが大当り

池田市 水 木 博男

物置を出てくる鮑と顔が合う
夏の髪いやくるしいので切り落そ

姫路市 福島 姫女

姫路市 丸尾 はる子

台風に誘われ風鈴騒がしい
髪型を変えても夫の気は引けず

岡山市 山磨 行子

一日の疲れをシャボンにねぎらわれ
里帰り母の匂が吸いたくて

静岡市 増田 扶美

野仏の微笑み愚痴が軽くなる
悲しみを胸にたたんだ丸い背(通夜の席)

静岡市 中西 雅

あの人に心のカーテン開けておく
ようやくに蟬のぬけがらみる冷夏

鳥取県 中西 智恵子

敬老の日は若づくりしてやろう
新聞を斜めに読んで匂が出来た

姫路市 服部 一典

命より大事な年金となりました
ねつがいり手振り身振りで電話中

米子市 永井 三津子

防衛と依怙地重なり犬と住む
しっかりと生きてる汗を流したい

寝屋川市 瀧本 八十八

大掃除 肩身のせまい古畳
邯鄲の枕 仮眠で得た悟り

岡山県 伏見 すみれ

近火お見舞無事でよかった握り飯
夏休み粗大ゴミが増すばかり

和歌山市 村中 悦男

茶柱を倒さないようお茶を飲む
顔色をひとつ変えない嘘に会い

羽曳野市 徳山 みつこ

カメラ向ければはやポーズとる二歳女兒
銘水がうたうふるさと村おこし

島根県 安部 美恵女

盆帰省珍しそうに飛び回る
にわか雨カレーの匂う雨宿り

米子市 小塩 智加恵

時々女は女の六感ひらめかす
予約した旅館の裏に山がある

岡山県 福原 悦子

離婚劇 誤算ばかり凍りつく
ネクタイを解いて休日土と生き

唐津市 山口 ふさ子

無器用は無器用にしか生きられず
梅雨明けもせぬに台風矢継早

泉佐野市 大工 静子

庭ばかり眺める外なし老いの足
なごやかに暮す秘訣はやはり金

鳥取県 権代康女
たしかめる愛は電話の長いこと
自然には勝てぬ農業やっている

唐津市 福島紀一

初漬けのらっきよカリッとまだ噛める
聴き直せばもういいですと妻は言い

米子市 服部朗子

梅雨晴れに伯耆の富士がくつきりと
墓掃除孫が加勢し水を汲む

大阪市 今西静子

悟ったつもり的心ゆさぶられ
母の日へプレゼントする嫁二人

島根県 武島ちよえ

雑用と追いつ追われつ今日も暮れ
手をやかせ憎めなかった小犬死に

寝屋川市 前 たもつ

耳が遠くなり都合のいいことも
クラス会 気まずい女が二人居る

出雲市 荒木恵美子

緑風に誘われて行く散歩道
朝の道紫陽花匂う雨あがり

島根県 児玉幸子

緑日の夜店の金魚へしやがむ孫
誕生日孫へ気持の祝やる

和歌山県 吉田武治
自分のことになるとあれこれ良く迷い
職退いて人の心の裏が読め

唐津市 入江喜久亭

団扇風送れば孫が眠りこけ
弁当の飯にハートの花おぼろ

羽曳野市 酒井一壺

妻は服これでよいかと見せて出る
上手下手越えて続いた四人組

大阪市 乾哲静

心配の種播くだけの娘が残り
好き嫌い言わせぬ母の旬の味

兵庫県 玉田三重

さよならを言いたい客が座り込む
女医の手は脈を狂わせ要注意

大阪市 畠中智恵子

たつぷりの湯水につかり今日も暮れ
夏祭りカメラばかりが元気づく

羽曳野市 西村りつえ

えも言えぬ福を呼びそなお人柄
お隣の蜂の巣気にしシート干す

大阪市 小糸昭子

毎日が好い事ばかり他人の家
寝てるまに爪がだんだん伸びて行く

広島市 元 林 光子
トル安で酷暑逃がれてシドニーへ
原爆忌ドームにたたずむ傘一つ

鳥取市 近 藤 秋 星
暑い夏 暑中見舞いを出しそびれ
阿波踊り踊る阿呆の多きこと

大阪市 中 井 正 秀
喉ごしにお助け水のさわやかさ（大峰山にて）
たんばぽも花器に入れられ落ち着けず

鳥取市 中 澤 正 恵
切手にも古里自慢の梨の顔
口笛が吹けて貴男が飛んで来た

大阪市 大 河 未 佐 子
肩上げて下ろして夜店待つ夕べ
孫三日もう大阪へ帰りたい

藤井寺市 菊 地 繁 男
行楽のポスター前で思案顔
このけじめ離婚届できっちりと

大阪市 清 水 絹 子
蛇口一杯昨日はきのう顔洗う
暑いのにまだ汗ながすギャル御輿

大阪市 平 井 露 芳
姑看るところか嫁が先にこけ
尻尾見せる鯨に高い金払い

鳥根県 大 坂 藤 子
古墳出て神代のあかし世に伝え
盆帰省孫も手伝う墓掃除

和歌山県 上 岡 正 直
細川の八頭馬車は走りだす
ひな燕まず電線に初飛行

大阪市 中 橋 恵 美 子
居眠りも旅費に含んだバス旅行
駐車違反聞こえぬように文句言う

鳥根県 森 山 修 光
亡き母の居間を覗いて手を合わせ
半世紀経ても変らぬ顔もあり

鳥取市 谷 口 侑 里
山菜ブーム山の自然が荒らされる
モデルさんのポーズに見とれピンボケだ

高槻市 江 原 秀 夫
噂話たっぷり詰めて燭をする
最盛期ベダルしっかり踏みしめる

平成五年度 同人総会

とき 10月3日（日）午後3時から

ところ 大阪市立労働会館

交通便 JR・地下鉄「森ノ宮」下車すぐ

大空のこゝろ

(34)

橘 高 薫 風

柳壇の人々の第二回は川上三太郎である。

川上君はある意味に於て柳壇のツエッペリンであるかも知れない。思い出したように、飄然として旅に流れ出る。それでいて風景(ランドスコープ)は嫌いだという。

とぼけた顔、人を使った態度が川上君の賢明さを包んでいるので、意外に近づき易いところがある。が、しかし與みし易しとして無闇に近づこうものなら、忽ちにして烏賊の磨墨にも比すべき皮肉の巨弾を投げつけられるだろう。

川上君は物ぐさ党としても人後に落ちない方であるが、その物ぐさに似ず「新川柳一萬句集」の編纂がある。その句集の広告文に編者川上君を名人として祭り上げてあったが、この敬称を単に広告文の讃辞だとして読過した人も多からうが、自分などは寧ろうなすかれ、ほはえまされた一人である。

假りに「名人」という看板を持ち廻って川柳家の肩にのせて見て、据りもよく又持ちこたえ得る者を求めたとしたら、物ぐさで、し

かも鬼才縦横、名作進出の川上君の肩へ落ちつくのではなからうか。

川上君の話術は、のべつ幕なしに飛び出す機智の舞踏である。従って多くの話題には、それぞれにある種の魅力を持っているが、単にそれだけでは、対手を感じさせるに過ぎない。時にくたびれさせるに過ぎない。斯くいふことは川上君の話術を表通りから窺った素通り観に終らせることになる。

川上君は、あれでなかなかしみじみとした話をする。その話の底には友情が根を張っている。君の真実を観る力は凝って機智となり皮肉となって湧出するが、その友情は、それらの機智や皮肉の外殻に災され、眩惑されて他人の知るところとならないのだ。

その句風を知るために柳誌「すずめ」の第四卷十二号からその二三を抜く。

冬の日を手紙一本なつかしや

十二月某日猫の歩くを見

鯛ちりや降る雨ながら晝ながら
友だちのうしろ姿の有難味

亡姪を想う――

死んだ子に貸した背中に羽織着て

川上君の句に動物を詠んだ句の多いということはかなり有名で、馬や犬や猫などを詠んだ句は殊に多い。しかしながらそれが単なる写生句に終っていないで川上君一流の鋭い観察がその句を透して流れていることを知らなければならぬ。動物の呼吸が人間の呼吸、動物の行動が人間の醜悪であることさえも味読させられる。それはジャック・ロンドンが狼や犬を藉りて社会主義を闡明したのにも類するだろう。川上君の句にそうした目的は無いにしても、その句からうける興趣は深い。

右に掲げた句には川上君のしみじみとした一面が遺憾なく出ていると同時に、君の尤も得意とする技巧を窮知することが出来よう。

(中略)

川上君が川柳に指を染めたのは明治四十年ごろではないかと思う。大倉商業の出身で天津の支那商館に勤めていたこともあった。近年新聞記者をやめてから著述と放送に其の日を過している。居は南品川にある。年は不惑、愛妻と差し向いの生活。

川上君がかつて柳樽寺派に属していた事と、酒の好きな事とは余りに知られているので省いた。

平成五年度 路郎賞

ああ余生

つるべ落しに日が暮れる



熊本市 永田 俊子

身に余る光栄

永田 俊子

川柳塔社に加入させて頂きましてから諸先生および諸先輩方のすばらしい句の啓蒙によりまして、この度は身に余る光栄に浴しますこと、誠にうれしく有難くこれも先生方のお陰と心から御礼申し上げます。今後とも、諸先生方よりご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございます。

私の履歴

昭和28年 熊本川柳会に入会
同 58年 川柳塔社誌友となる
同 63年 川柳塔社同人となる

路郎賞候補作品

残ったのはロボット

だった消去法

黒川 紫香

肩書を知って女は攻めてくる 木村 明人

ためになる本を立読みしています

美濃市 安平次 弘道

西口いわゑ

受付にゆとりをくれる花がある 奥山美智子

逢えそうなきがして駅へきてしまひ

内田 結実

入れ歯からはじまる老後設計図 山本希久子

フィルムが残ったそつで撮ってくれ

小池しげお

寝屋川市

岸 野 あやめ

ビル三つ持って貧乏くさい伯父 丸山よし津
電話でもしろと電話で子を叱り 山田 高夫

路郎賞準優秀作 第二席

酉の年サンズイ偏も

要りますな

ああ余生つるべ落しに日が暮れる

〈推薦句〉

老いぬれば鬼が島でも日向ほこ 石倉美佐子

阿 萬 萬 的

ちぐはぐな絵をあたためている夫婦

玉置 重人

お湯の出る蛇口に慣れてゆく恐さ

吉川 寿美

温室の花で背丈が揃い過ぎ
自己主張しないやさしい子が増える

小野 克枝

島 祥庵

西田 柳宏子

苛めても泣かぬ女で物足らず
人形は笑ったままではつとかれ
ビル連立地球の墓標かと思ひ
尊厳死の形で松が立ち枯れる

《推薦句》

三枚目演じて本心のぞかせず
残ったのは口ポットだった消去法

山口 美穂
安平次弘道

野村 太茂津

出る杭も打たずにおけば役に立つ
ジェラシーを愛の証と思ふまい
燃え切れぬ薔薇の叫びが落ちてゐる

吉岡 美房
木村 明人
西出 楓楽
川島諷云児

適当に曲って屏風立っている
脇役の群で光っておればよい
水涸れの井戸の心に似て耐える
スベアキー誰かが持っているつもり

牛尾 緑良
JIS マークついたお方でつまらない

《推薦句》

横糸をしめてゆるめて妥協せず

西出 楓楽
西山 幸

つまずいた石を生涯温めたい
まだ白い真があつて負けれぬ
ひざ枕 妻は太目の方がよい
叱つて孫ににっこり笑われる
嫁も留守ばやき漫才始めるか
陽の恵み毒草までも花をつけ
かけ違ひとつを抱いて秋
忘れたことが多くて花活ける

《推薦句》

筥の一尺伸びて生き残る
公約をきつちり果す茄子の花

山海 友照
江口 度

橘 高 薫 風

何もでけへん人やと女うれしそ

玉置 重人

麦の穂の一本穂も春となる
幸せの身にも占うものがある
天晴れて千体仏となる樹氷
平成に昭和の疲れどつと出る
わが影も直立不動の日を忘れ
ときどきは岩戸へ消える妻と居る

栗谷 春子
奥田みつ子
佐治千加子
秋元 てる
小砂 白汀

泣き出してからの話は嘘だった

山下美津留
片上 明水

《推薦句》

日本の花で埋めたい父の日よ
西の年サンズイ偏も要りますな

田口 虹汀
岸野あやめ

《評》 格調の高い句、軽妙な味の句と、充実した十句の中からの一句を決めかねたが、最ペテランの率直な述懐の句と、機智に溢れた洒落た句を推薦する。

路郎先生は昭和22年、何もかもアメリカナイズされて行く世の中に対して「古くとも僕には仁義礼智信」と詠まれた。明治42年生まれの作者の師に通じる感慨は、淡々とした表現ながら深いものを感じる。次は、酉年がくるたびに存在の甦る句であろう。女性の句は抒情だけでなく、ユーモアやウィットも必要で、その意味でも推奨に値する。

路郎賞に思う

西尾 栞

今年の路郎賞は、曾て川柳塔賞を獲得された熊本の才女、永田俊子さんにきまつた。俊子さんは、本年度の熊本県文化賞を受賞された全国的な才女で、路郎賞獲得は当然である。熊本県柳界の婦人部のリーダーとして徳望の高い人と聞く。いよいよの清吟をお祈りする。



したたかに

生きる女の返し縫い

尼崎市 児玉歌子

川柳塔賞準優秀作 第一席

主のない鋏の

楔を抜いてやる

出雲市 原 章 峰

川柳塔賞準優秀作 第二席

狙でみじんに

刻む消費税

尼崎市 尾 宮 弘 治

川柳塔賞候補作品

小 出 智 子

自己主張孔雀が羽根をたたまない

余生とはコース外れてみるもよし

ひまわりが高く咲いてるよその家

他人にはおばあちゃんとは言わせない

晩に聞く鶏鳴の懐かしさ

息止めてみてまだあれも慌てない

高田美代子

宇野 照代

山口 新子

黒田 能子

向井末貞一

大西 文次

川柳に魅せられて

児 玉 歌 子

一生懸命やれば、何時か良い答えが得られる。そんなポリシーを抱いて、日々の雑感をベンに残す川柳、洗われる心の波を描き続ける絵皿に突然、川柳塔賞受賞の報せ。苦しくても川柳を続けていて良かったなと思う。ご指導下さった多くの先輩に深く感謝をし、沢山の柳友と語り、勉強出来た事を大変嬉しく思います。これからも自分らしい川柳を作り続けたいと思っています。本当にありがとうございます。

私の柳歴

昭和58年6月 杭瀬川柳講座入門
同 6月 おはま川柳会入会
同 10月 いくしま川柳会入会
同 10月 川柳塔社誌友
昭和63年10月 川柳塔賞準優秀作第二席

蜂の巣をつついて子らの夏休み 田中 みね
クラス会 花も風も越えた顔 市丸はる子
〈推薦句〉

女々しさの限りを尽くし亡妻記 永田 暁風
主のない鋏の楔を抜いてやる 原 章峰

板尾 岳人

露ほどの邪心もないかかすみ草 山田 葉子
夜叉の面捨てておかめの面かぶる

岸 桂子
最後の柿がボトリと落ちた日から冬

高田美代子
狂想曲遠くで聞いている冬野
人間が厭で一日海を見る
八木 芳水
岩本美智子

返し縫い女の意地がまだ迷う
国米きくゑ
赤い糸切りそこねてる糸切り歯 島 ひかる
結び目が一寸ゆるんだ赤い糸 大川 幸子

〈推薦句〉

風吹けば風 雨降れば雨まかせ 大西 文次
したたかに生きる女の返し縫い 児玉 歌子

玉置 重人

いくばくを生きるに仮面もついらぬ

森脇 和子
特ダネをたくさん持つておばあちゃん 都 狂四郎

遣伝子がこんなはずではないと言つ

藤井 高子
しあわせな音だけ聞いていたい耳 杉山精子

骨壺に入るくらい嘘にする 藤田 芳郎
雑談でさぐりを入れてくる視線 池 森子

十字架の下で人事を組み替える 鶴久百万両
父がいたら母がいたらと豆ごはん

〈推薦句〉

だから怒つてだから笑つて生きてます

流 奈美子
人間哀史どこまで飛べば春の海 大峠 可動

宮口 笛生

遊ぶ子と地蔵が同じ顔してる 森田 文
くつろぎのポーズで大の字になろう

倉垣 恵美
五百羅漢のやさしい風に逢いにゆく

島 ひかる
切なさを沈めて秋の水溜り 池 森子

愛情に疑いはない豆を煮る 宮尾みのり
はすかいに見れば世間はみな喜劇

村上久美子
自己主張 孔雀が羽根をたたまない

高田美代子
そっくりの似顔絵だから気に入らぬ 大川 幸子

〈推薦句〉

故郷が実感できる墓の道 牧瀬富喜子
自信ある影はうしろを振り向かぬ

的場十四郎

高杉 鬼遊

児玉 歌子
したたかに生きる女の返し縫い
砂浜を駆けて来たのは未来だな 倉垣 恵美
ライバルが投げた浮輪にうろたえる

古谷ひろ子
無人駅草ものびのび生きている 小寺 九

使い捨てられない前に暇をとり 森 茜
夕やけ小やけ子供はみんな塾へ行く

守先 伸子
骨壺に入るくらいの嘘にする 藤田 芳郎

なぜ逢えぬ汽車も電車も走ってる 菊地トミエ

〈推薦句〉

ひとりより二人がいいとパンを分け

森脇 和子
組でみじんに刻む消費税 尾宮 弘治

川柳塔賞雑感

西尾 栗

川柳塔賞の児玉歌子さんは、各地の例会に出て活躍中ときく。その研讃こそ、塔賞獲得の絆となった。次は路郎賞目指して、一路邁進を祈る。

秀句鑑賞

同人吟 田中正坊

―9月号から

今年から同人吟の秀句鑑賞を二ページ建とし、これまでに九名の方に執筆いただいた。

原稿依頼にあたって、「初めに鑑賞の立場あるいは川柳観を」とお願いしたので、今回も含めて十人十色のコンパクトな柳論とそれにもとづく鑑賞が展開されたように思う。

朝日新聞の日曜版には、歌壇と俳壇が併載されており、私も愛読しているが、短歌には複数の選者が選んだ☆がつくものが多いのに俳句にはまれにしかない。三十一文字で思いを述べつくす歌と、文字にしない七・七に思いを秘める句との違いだろうか。川柳の場合も、選者・鑑賞者によって句の評価が分かれることが多く、それはこの文芸の宿命であるとともに、難しいところだとも思う。

川柳は言葉の芸術であるからには、レトリックは無視できないが、何よりも自分の思いをこめた句―その人でなければ作れない句、キラリと光るものがある句、そして平凡だが、やはり私の好きな句を選んだ。お盆で鑑賞を依頼しそびれ、ピンチヒッターとなった。

冷静な目だなやっぱり他人だな

玉置重人

的確な評価や判断を下すためには、何よりも冷静な観察が必要だ。自分自身や身内の場合、どうしても「ひいき目」になり、眼鏡が愛情にくもらされる。だから「冷静な目」はときによってありがたいが、「やっぱり他人なんだな」という一抹のさびしさも伴うから人間とは勝手なものである。

イカを刺くひとの不幸はすぐ忘れ

千葉風樹

もう一つ、ひと（他人）の句。イカの皮を剥いたことはないが、布巾で端をつまんで引っぱれば、スリルと簡単に剥けるらしい。自分に振りかかった不幸は、振り払っても振り払っても忘れられないくせに。

愛しくも煩わしくも血の絆

岩津ようじ

血縁・肉身とは、所詮、このようなもの。しかし、「血の絆」が切れかければ、居ても立っても居れないのが人間でもある。

秒針の速さ余命を考える

安平次 弘道

そつと弘道さんのお年を調べてみた。まだまだお若い。しかし、一般に若いとか、年をとったとか言うのは、自分の年齢を基準にして物を言っていることが多い。したがってこれは、私と比べた場合であって、もう年には不足がないとすれば、一年が一月に、一時間が一分間に感ずるときもあるだろう。

お若いと言われて見ても九十二

鶴声庵 覚然坊

わが川柳塔同人には、こういう方もおられる。しかも、バリバリの現役である。来年、創立七十年を迎える「川柳塔」よりも二回り近く年長なのだから恐れ入る。この句、いわゆる「秀句」のカテゴリーに入らないかも知れないが、この人ならではの句だと思ふ。にんげんを長くやつてるから解る

藤解 静風

「亀の甲より年の劫」―私のきらいなことわざの一つだが、やはり一定の年齢にならないければ解らないことだってある。いわゆる「見えないものが見えてくる」のだ。若いころに読んだ本を読み返したり、戦前や戦後に見た映画を再び見た時、ハツと気づかされることが多い昨今である。

なにもかも中途半端で終りそう

春 城 年 代

今秋、武庫坊さんとともに金婚を迎えられた年代さんの最近の心境とお見受けした。はつきりした目標をもって人生を設計している人は別かも知れないが、できればあれをしてこれにして……と思っているうちに、どんな年月が経ってしまう。もともと人生には、完成も完結もなく、中途半端に終わってもいいのではないだろうか。いや、それが人生なんだと私は思っている。

物を持つよりもむづかしい減らし方

福 元 みのる

私もケチなコレクターの一人で、これまでいろいろな物を中途半端に集めたことがあるが、今では少しでも物を減らすことに努めている。実はそれがなかなかむづかしい。物を捨てることに快感を覚えた時期もあったが、それに徹することができない。いつか読んだ『清貧の思想』には、心洗われるのだが、それなりに自分の花を咲かせるぞ

春 木 圭一郎

花の咲かせ方にはいろいろある。ひとの真似をする必要はない。自分には自分の咲かせ方があるはずだ。結果はどうあろうと、『自分の花』を咲かせようという決意は尊い。

生きていく芸がだんだんうまくなる

松 本文子

ほんとだろうか。文子さんは世の中を器用に生きたり、生きたいと思っている方とは思えない。もとよりこの住みにくい世を生き抜くためには、少しは生きるテクニクといったものも必要かも知れない。そしてそれは年を重ねると、知らず知らずのうちに身につくだろう。しかし、ふと立ち止まってみると、そのような「芸」さえ、うとましく思われることもあるのではないだろうか。

いやな事聞いた耳シヨパンで洗う

永 田 俊子

むかし中国に「いやな事」を聞いた耳を清流で洗った故事があるが、俊子さんはなんとシヨパンの名曲で洗い流すというのだからさすが。『浮き世』は『憂き世』、生きていくためにはいやなものを見たり、いやなことを聞いたりすることは避けられない。そんなときはクヨクヨしないで、名曲や名画、あるいは美しい句や歌を読んでサッパリしよう。

美術館少し女が嫌になる

田 中 叶

なのに美術館へ行くと、作品の前でベチャクチャとこざかしく喋る女人たち。少数だろうが、こんなのいや。間違ってたらごめん。

軍服が一番似合う僕の顔

北 山 悟郎

申しわけないが、この句を読んで思わず吹き出してしまった。悟郎さんは戦争で片足をなくされた元傷夷軍人。階級や軍歴は知らないが、一時、口ひげを生やされたことがあって、陸軍少将ぐらいに見えた。と言っても、いかめしいのはお顔だけで、声は大きい、いたって物やわらかな人である。

五十年戦友より生きた蟬しぐれ

吉 岡 美房

わずかな期間だが、軍隊生活を体験した私は、夏ともなれば戦争が思い起こされ、この種の句には弱いので少しセーブしたが、やはりこれは見のがせない。まして今年十月は、学徒出陣五十年にあたる。二十歳前後で散華したわかものは数百万人にものぼる。五十年経った今日こそ、その戦友たちが偲ばれる。

般若経 無の字は二十一あつた

工 藤 甲吉

一句だけ、自選集からとらせていただいた。ときに鋭い時事諷刺もまじえて、欠かさず投句される大先輩、甲吉さんの作句姿勢に学ばなければならぬ。静かに心経を読誦される姿が目につく。今月十七日、句碑が青森県尾上町の猿賀公園内に建立される。

— 煙抄 —

秀句鑑賞

— 9月号から —

園山 多賀子

近すぎて相手の上辺しか見えず

山口 三千子

余り身近だと一辺しか見えず、ある程度の距離を置くと、全貌を観ることができ

マンネリの中で安心してしま

宮本 かりん

マンネリの自己過信の怖さ。私にもジョーンと応える一句。

エンピツの芯が折れてる程の乱

流 奈美子

鉛筆の芯に心を見抜かれているような焦燥感を表現された句。乱の一字が効いている。

あれ以来母の涙は涸れたまま

池 森子

涙壺は涸れたまま、作者はどんな悲境に佇ったのか、想像するにあまりある。人は皆それぞれ悩みを秘めて生きている。強く生きたいものだ。

人間の欲が出てくる銭の音

越智 青園

生きている限り、欲とは縁が切れない。ともすれば、財布の中の札は消え、がちやがちやと小銭の音がするさい。

歯ブラシもタオル掛けにもある順序

牧 渕 富喜子

家風が窺われる句。きつと秩序ある円満な家庭かも。

口惜しさを噛みしめる歯は残ってる

山本 すみ

雇い歯は、物を食べても味が無い。まして口惜しさを噛みしめることもできない。とは言いでいい。

思い出せぬままに会釈を返しとく

円増 純子

知らない人から会釈され、問い質すのも不本意なので、会釈だけを返すのはよく経験することだ。

夫の吹くラッパだったら信じよう

福原 辰江

「私の句」音痴でも、夫の笛なら踊ります。爪先を我が家に向けて立ち話

桑名 知華子

我が家へ向けて心は急ぎながら、立ち話は何時までも尽きない女たち。

便利さをカードに乗せて自己破産

河津 正治

現金を持たぬ便利さに心ならずも買い漁る心理。「カードに乗せて」がよい。他人事てなし、ご用心ご用心。

二人三脚妻はよろめく足がない

本田 忠男

妻の歩幅を信じ、頼り切れればすべて安泰。下手な字が嫌いで今日も長電話

渡辺 杏村

ペンを持つのが億劫でつい電話。近く電話代も上がるらしい。追伸も書ける封書にしたいものです。

老婆よ先に発つなと念を押し

山門 幸夫

私の句に、「夫よりも先に死ねないそれも愛」。こよなき夫婦愛。実感句として頂く。

私の好きな紫を取り入れた句を一句。

紫の似合う婦人と乗り合わせ

森 茂美

紫に絵筆を染める花しようぶ

倉垣 恵美

奥尻のニュース悲しい梅雨末期

小林 英子

カタカナの名前ばかりで百花咲く

松浦 登志子

北斗七星は悲しい

田村新造

しんしんとした寒気が体のしんまで突き刺さる。体の先からはとばした水分は前板に当って飛び散ると、すぐに凍りついてしまう。氷点下四十度、極寒期は雪も降らない。

便所は捕虜収容所の室内にはない。いくら寒くても、吹雪の夜でも屋外へ出ねばならなかった。室内が寒いので、明け方には必ず目がさめた。屋根も風よけもない俄か作りの捕虜用の便所からは、収容所の正面入り口が見えた。その鉄の扉は夜間は閉ざされて、横にある通用門にソ連兵の歩哨がマンドリン（自動短銃）を抱えて立っている。

正面の鉄の扉にもたれかかって、また今夜も何人かが凍りついて死んでいる。毎夜四、五人はそんな凍死者（病死者）が出た。脳が狂っているのだ。だれも助ける者などはいない。大半が病人で、殆どが狂いかけている。シベリアの黒竜江岸にあるブラゴエチエン

スク日本人捕虜収容所、昭和二十年冬、この世の地獄であった。

黒竜江岸の国境陣地、環環で終戦を迎えた関東軍第六国境守備隊の兵士たちがそこに収容され、適量の食糧も与えられず、重労働と栄養失調で発疹チフスに罹り、医薬もなく次々と倒れた。四十度の高熱が続き、脳症で狂って思考力はなくなる。

ただ、内地への郷愁の思いだけが燃えたり、狂った夢の中で破れた軍服を着て、雑のうと水筒を肩にかけ、破れ靴を履いて、「おれは日本へ帰るんだ。早くしないと汽車が出る」などとうわ言を吐いて深夜、戸外へさ迷い出て、正面入り口の鉄の扉までたどりつき、そこで凍死してしまう。夜ごとの繰り返しである。誰も止める者などいない。みな病人である。翌朝、まだ病人になってない者がその死体を空厩舎に運び、裸にしてはしごをかけて積み重ねていく、いつものパターンである。

体の水分が出るとブルブルと小刻みに震えます。見上げる夜空に北斗七星が頭上で、手を伸ばせば届くところで瞬き、その柄杓でアムールの水を汲み上げている。

これは私の自分史におけるシベリアの一節だが、川柳として

望郷に泣いた寒夜の北斗星

捕虜という呼び名悲しい北の果
死体積む手付きも馴れて捕虜哀し

などなど、平成3年1月号から「雪のシベリア」として発表させてもらっている。

私は昭和十六年三月、現役兵としてソ満国境（当時の呼称）、黒竜江岸の関東軍第六国境守備隊（環環駐屯地）へ入隊し、昭和二十年8月この地で終戦、いち早くシベリアへ連行されて対岸のブラゴエチエンスク収容所へ抑留、そこから捕虜生活が始まった。苛酷な労働、食糧不足、栄養失調、発疹チフスなどで、千四百名の戦友が次々と倒れ、一冬を越すまでに半数が死に絶えたが、「雪のシベリア」は、その状況を書いている。翌年4月、幸運にも重病人として再びアムールの氷上を馬車で逆送され、今度は八路军軍（現中国）の捕虜で泣き、いろいろないきさつはあったが、6月20日午前零時を期して八路军の歩哨全員を殺害し、三百余名が収容所まると集団脱走（黒河事件）、追われ追われて興安嶺を逃げ回り、ある者は追撃で射殺、ある者は逮捕銃殺、あるいは飢餓の野垂れ死にあり、結局は三人だけが生き残り、コロ島から昭和二十一年11月8日博多着、シベリアからの帰還第一号になった。そして今、川柳小説として書き残そうとしている。

興安嶺で別れて戦友と以後逢わず

銀河系

河内天笑選

箕面市 岩 津 ようじ

これはこれはあなたも老化防止策
今に惚けてやるとはきつい脅しよう
飛天でも顔出しそんな西雲

出雲市 竹 治 ちかし

冷や汗を何度もかいて強くなる
母だけに父の頑固が許される
体調を理由に男捨てて去に

米子市 石 垣 花 子

風呂敷は丸も四角も包みこむ
生きてゆく余分な枝葉切り捨てる

青森市 工 藤 甲 吉

毒舌はばったばったと切りまくる
息巻いて来てあつさりといなされる

米子市 八 木 千 代

羽化前夜 花火の音を聞いている
鈴虫の喜劇はすでに始まった

米子市 中 井 ゆ き

わだかまりあり乾杯の声が出ぬ
義理で来た席を忘れて酔っている

鳥取県 石 谷 美恵子

ゆったりの演技 しんどくなってきた
飲めるとき飲んでおきないと天の声

鳥取市 美 田 旋 風

励ましが日毎重荷になつてくる
曲がり角までは強がり言っていた

鳥取県 土 橋 睦 子

のんびりと生きているので瘦せられぬ
海の子に今年の海の絵が画けぬ

十和田市 齊 藤 島

神木の蟬のおしっこ受けてくる
何処の子も一人一役村ねぶた

鳥取市 春 木 圭 一 郎

回れ右謀反を起こす蟻もいる
ゆったりと生きてみたらと天の川

枚方市 海 老 池 洋

共犯になる乾杯とつゆ知らず
夜店では元氣にしたカブト虫

鳥取県 新 家 完 司

夜間飛行無事に着いたらまた生きる
高度一万メートル鳥も神さまも居ない

和歌山市 桜 井 千 秀

やたら隙見せる女のだまし舟
責められてどっこい強くなるわたし

兵庫県 倉 垣 恵 美

絵の中ですこしわたしを踊らせる
青虫が一生懸命逃げて出た

大阪府 榎 本 露 児

風の音集めてハンクグライダー
七十の思い出にあるハーモニカ

堺 市 高 橋 千 万 子

かくし芸道楽ものの声になり
勘違いされたまんまで受け答え

和歌山市 宮 口 克 子

返事せぬ野郎を見るとむかつくぜ
それからは人目を避けて陽をさけて

熊本県 高 野 宵 草

デパートのかぶと虫にも故郷の夢
夕立ちにすっぱかされた水を撒く

鳥取市 西 原 艶 子

ふるさとの訛りも水も腹にしむ
踊り疲れてみんな仏の手に還る

西宮市 奥 田 み つ 子

空が狂うと体内時計まで狂う
あの人の電話のベルに彩がある

八尾市 高 杉 千 歩

遊び疲れ言わず早寝の凡夫婦
すぐメスを入れる噂に医者を変え

宝塚市 丸 山 よ し 津

雷が落ちて兄弟げんか止む
継続は力 報いは求めない

海南市 三宅保州

核がある限り楽天家になれぬ

真つ二つそれから切りにくい西瓜

和歌山県 上岡正直

カタツムリけっこう早く引越した

和歌山市 山口三千子

遠出する日は生活の臭い消す

島取県 西浦小鹿

朝方の虫の死骸を焼いている

和歌山市 福本英子

やがてゆく途を綺麗に掃いている

和歌山市 榎原公子

いろはには この美しい組み合わせ

名古屋市 藤井高子

旅好きの帽子が欠伸しています

京都市 都倉求芽

薔薇のトゲ眼鏡で見れば恐ろしい

兵庫県 玉田三重

慢心の男を少し泳がせる

静岡市 片平静代

死にたいと言つては栄養剤を飲み

姫路市 福島姫女

能面の奥で美人を探してる

高槻市 乙倉武史

飲み水が病んで浄水器が売れる

福岡県 本田忠男

外嫁の親切うちの嫁が妬き

倉吉市 最上和枝

洗面器わたしのする顔が浮く

藤井寺市 高田美代子

こぼんちゃんをじらし続けたことがある

岡山県 山本玉恵

のど越しの良さへ命をはずませる

岡山県 千原理瑛

途中下車ばかり私の旅つづく

米子市 林荒介

本音を吐いて足跡を盗まれた

米子市 政岡日枝子

約束を果たして山に帰る鬼

西宮市 西口いわゑ

炙り出せば何か出そうな白紙なり

吹田市 山本希久子

真直ぐな視線子供が詫びている

鳥取県 田村きみ子

赤トンボが来たのに稲が不作です

羽曳野市 吉川寿美

子等がみな巣立ちボツンとある時間

富田林市 藤田泰子

ノストラダムスの予言気になる月の暈

倉吉市 米田幸子

姑さんが来るから部屋を磨いとく

和歌山市 堀畑靖子

恋する耳に聞こえる風のシンフォニー

今治市 渡邊伊津志

米子市 澤田千春

乗리카えの駅で肩の荷かるくする

岡山県 土居ひでの

ニアミスですんだ夫婦のすれ違い

和歌山県 藤井春子

言葉じり触れずにおこころ悩むごと

旭川市 朝倉大柏

思い切り言わせ一言だけ聞かせ

弘前市 村田善保

会者定離いつかは割れる鏡拭く

広島市 流奈美子

悟りにはまだまだ遠くいる吐息

和歌山市 古久保和子

脳みそにいっぱい詰まるコマースヤル

有田市 松井かなめ

情けない絆よ枕裏返す

大阪市 尾崎黄紅

まちがい電話うつくしい声でした

倉吉市 奥谷弘朗

いくらかは無駄があるから面白い

鹿児島県 大山舞鳥影

夏休み説りの違う孫集う

和泉市 中川楓

味方への塩ひと振りかむずかしい

砂川市 大橋政良

うしろ指さしてる指に疵がある

倉吉市 野口節子

唐津市 木内 ミチ子
幸せに輝く中で古希迎え

姫路市 大原 葉香
夢を追ひ夢に溺れて落伍する

八尾市 山下 美津留
こだわりが再就職の邪魔をする

大阪市 津守 柳伸
満天の星 脳味噌が空になる

岡山県 池田 半仙
乱暴な友の言葉にある温み

大阪市 中西 兼治郎
天に星 地に大ジョッキ中ジョッキ

香川県 木村 明人
ドンチヨウの降りて来るまで頑張ろう

高知県 赤川 菊野
匿名で書いたがすでにばれている

静岡県 蘭田 猿杓
口開いているのに歯医者話しかけ

香川県 新川 マサエ
光るもの外して老後土に生き

池田市 岡本 吉太郎
ゲートルを知らない足がのびにのび

香川県 池田 かおり
運転をして女房のお供する

米子市 鹿島 松子
塩味の効いたお方で距離をおく

鳥取市 岩原 喬水
こっそりと手ぶらで帰るUターン

和歌山県 西口 忠雄
他人とはこんなもんかとひとり言

香川県 成重 放任
女房を孫に取られて羽根伸ばす

青森市 漆戸 凡々子
俺に似たおどけた羅漢様に会う

京都市 松川 杜的
時々フォークボールを妻も投げ

八尾市 片上 英一
満天の星あおぐとき人は善

寝屋川市 岸 あやめ
御親切過ぎて私を困らせる

宇部市 中村 三良
出し抜けのジョークに笑う義理はない

岡山県 富坂 志重
妹がそつと見に来る新家庭

唐津市 市丸 はる子
集まれば養生談義する仲間

米子市 新 正子
道楽で泣かせる頃が男だぜ

寝屋川市 平松 かすみ
苦も楽も海に抱かれている日本

姫路市 中塚 遊峰
救されてゆるして古希を恙なく

米子市 小西 雄々
素朴さを上手に父の処世術

鳥取県 清水 加代子
自分にも出来る何かをはじめよう

岡山県 福原 辰江
自分史の足跡深くする流転

大阪市 藤田 頂留子
衝突の詫びてる方も血が流れ

茨木市 藤井 正雄
ニュータウン夜店も出てる盆踊り

川西市 松本 ただし
でかい法螺吹きたくなつた胃の痛み

静岡県 三浦 つね
捨て切れぬ古着をしまふ土用干し

唐津市 浜本 ちよ
見も知らぬ天国へなど行くものか

米子市 木村 春枝
赤とんぼお地蔵さまが呼んでいる

鳥取県 さえき やえ
源氏ばたるが塾へ行く子をはなさない

富士宮市 渥美 弧秀
孫叱る娘の涙見てしまふ

岡山県 矢内 寿恵子
昭和史の傷えぐり出す世紀末

和歌山市 楠見 章子
花柄の手帳で新規まき直し

出雲市 園山 かおる
派手に言う話どこかにくい違い

姫路市 北条 てる代
嫁が来てさとの敷居が高くなり

八尾市 秦 正子
暴走車に無事故無違反阻まれる

和歌山市 木村 初子
涼風とバタバタ遊ぶカレンダー

黒石市 相馬 一花
大切な鉢から順に盗まれる

唐津市 山口 ふさ子
長のつく名刺片手で差し出され

岡山県 荻野 鮫虎狼
日本の沖はきれいな地図の色

香川県 山地 マツエ
窓際の椅子で時流に遠く居る

島根県 岩田 三和
昼寝から覚めて三時の茶の香り

藤井寺市 中島 志洋
オーバーな相槌を打つ聞き上手

鳥取県 山内 芳江
人生を狂わすカードとも知らず

河内長野市 植村 喜代
何十年ぶりの身内と会う葬儀

大阪市 亀井 円女
甲子園家事の手抜きも許される

吹田市 吉川 渉
甲子園数珠を手にする親がいる

大阪府 榎山 隆
マイペース守る生き様平泳ぎ

唐津市 仁部 四郎
老兵の地図に地雷がまだ残り

有田市 生馬 美英子
小刻みに出して年金使い分け

奈良市 米田 恭昌
窓際の椅子にも慣れた不甲斐なさ

枚方市 濱田 良知
どないしよう中空つばの熨斗袋

兵庫県 遠山 可住
器用貧乏得手がお金になって来ぬ

岡山市 井上 柳五郎
漆黒の夜空へ花火媚のいろ

鳥取県 土橋 はるお
死ぬるまで別嬪さんに目を向ける

倉吉市 淡路 ゆり子
パチンコに遊ばれていた今日の負け

鳥取県 権代 康女
快い話夢中で聞いている

和歌山県 杉山 精子
ないしよないしよ二歳の声がこそばゆい

青森県 諏訪 明雄
名句出るツボの指圧を頼むなり

唐津市 久保 正剣
含差を知ってる寡婦と知らぬギャル

西宮市 亀岡 哲子
擬餌鉤に釣られて虹の空跳ねた

寝屋川市 江口 度
忘れ物の扇子が増えて秋になる

藤井寺市 菊地 繁男
指鳴らし銚子の追加する若手

倉吉市 加崎 正雄
金婚に金の髭剃り買って来た

西宮市 菊池 トミエ
帰省子のひげ一段と濃くなって

吹田市 西岡 豊
スーパーに負けた市場の模様替え

藤井寺市 楠 昭子
マンガから今日の政治が読めてくる

鳥取市 前田 一枝
最高点は選びたくない人だった

倉敷市 田辺 炎六
酸性雨降るな頭がうすくなる

寝屋川市 前 たもつ
雅子姫のお披露目旅行いそがしい

唐津市 山口 高明
土石流ローンの済まぬ家をもみ

羽曳野市 徳山 みつこ
カラフルなドレスまじった新組閣

羽曳野市 福田 悦子
一億円プロの男にある勲章

今治市 渡辺 南奉
ああ冷夏地球のうめく声がする

岐阜市 渡辺 杏村
改革の旗印から幕が開く

和歌山市 玉井 豊太
儲けさせてくれぬ冷夏へ嘆き節

姫路市 小井 里兆
日本丸前途の見えぬまま船出

尼崎市 春城 年代
人ごとのように老人福祉いう

苗香のむ

小出智子選

しばらくすると水はいつもの水になり

台所猫と私にある会話

突然のことで娘はまだやれぬ

自分史に重ねて唄う赤トンボ

跡継ぎのない仏壇が大きすぎ

有頂天 塩と砂糖をまちがえる

この人もむかしは他人だった人

迎え火を焚けば子猫も畏まり

秋茄子のうまさは嫁も知っている

ハンカチが真っ白だった頃のこと

繕った笑顔で父に会いに行く

誘惑を逃がれコスモス揺れている

心配もせずに年金待っている

男傘かりて北風よけている

とても佳い笑顔を朝市に貰う

ありがとうと言われてとても好きになる

生真面目な人に欠伸をうつされる

二十年まだ開けてはいない福袋

はっとした心道草したくなる

大阪市 北川 弘子

堺市 高橋千万里

和歌山市 田中 輝子

寝屋川市 籠島 恵子

堺市 小西 小雪

大阪市 西出 楓楽

守口市 結城 君子

和歌山市 木本 朱夏

大阪市 鍛原 千里

尼崎市 春城 年代

和歌山市 松崎 幸子

松江市 佐野木みえ

大阪市 神夏磯典子

米子市 寺沢みどり

名古屋市 藤井 高子

米子市 新 正子

藤井寺市 高田美代子

堺市 横田マリ子

吹田市 栗谷 春子

借物の知識をひけらかす金魚

外は雨 身の上話長くなる

初盆の準備に俄然活気付く

ワンピース買いきさやかな憂さ晴らし

大根を買って葉っぱもいるのです

お腹から笑ってみたい秋日和

放つとけば自然に脱皮するのだが

若い気であるのに齢を書かされる

盆の僧が団地の風を切ってゆく

一人来てまたひとり来た話好き

十年も会わぬと奥さんも替り

ポケットの中の倅せ握りしめ

許すこと出来て三時のお茶淹れる

梅漬けて推理小説解けはじめ

背伸びして青い果実を摘みたがる

ぴりぴりとブラックユーモア利いてくる

字余りのまんまで今日は逢いに行く

尻尾振る犬におやつを買っている

嫁三人法事に華を添えている

おしゃべりは手短にして賢夫人

会者定離成田の沖は風いている

七癖を他人の方が知っている

腹立てなくなった 淋しくなってきた

祖母が使った竹箒にある温み

口喧嘩姑を呆けさせてはならぬ

和歌山市 堀畑 靖子

今治市 野村 京子

堺市 山本 半銭

西宮市 奥田みつ子

鳥取市 中澤 正恵

新居浜市 原 ますみ

米子市 白根 ふみ

芦屋市 黒田 能子

大阪市 町田 達子

松江市 浦辺 静江

河内長野市 植村 喜代

香川県 川崎ひかり

八尾市 高橋 夕花

米子市 石垣 花子

香川県 山地マツエ

出雲市 石倉美佐子

岡山県 山本 玉恵

姫路市 中塚 遊峰

大阪市 鈴木 節子

寝屋川市 宮崎 菜月

堺市 神原 文

鳥取県 権代 康女

島根県 松本 文子

寝屋川市 井上すみれ

和歌山市 小川百合子

一枚ずつ剥がすと芯のないらっきょ

この辺で線引いておく他人ごと

朝昼晩きっちり食べる病み上がり

見て楽し買って楽しい孫の物

長編のドラマのタクト母が振る

振り向けば愚かな事に慌ててた

美しく死に度いなどと恰好つけ

視野低くすれば気がつく草の花

災害の憂き目もみずに秋の月

人形とお話をする暇もない

夫には電話明細〇秘です

騙される振りも女の胸算用

カチカチと帰らぬ刻が通り過ぎ

京阪になって気になるお総菜

銀の鈴お上りさんの顔で待つ

流し離真夏の磯に帰りつき

浅漬けの茄子も胡瓜も涼しそう

お茶を飲むだけの交際しています

脆いから好き阪神も霧島も

またしても貧乏くじを引き当てる

七変化紫陽花少し単細胞

安心をして軽口を叩きあい

太陽が昇ると元氣湧いてくる

ゆとりとは好きなだけする好きなこと

紫陽花も今年の雨に飽きたらし

堺市	宮本かりん	和歌山市	古久保和子	和歌山市	岸野あやめ	和歌山市	田中 みね	兵庫県	酒井 靖子	米子市	茂理 高代	寝屋川市	堀江 光子	熊本市	永田 俊子	八尾市	高杉 千歩	鳥取市	西原 艶子	松江市	松浦登志子	香川県	辻川よしみ	大阪市	本間満津子	寝屋川市	平松かすみ	大阪市	大河未佐子	和歌山市	福本 英子	弘前市	一戸 ツネ	鳥取市	植田 一京	富田林市	藤田 泰子	伊丹市	前田しゅう子	出雲市	園山多賀子	和歌山市	森 茜	鳥取県	羽津川公乃	姫路市	福島 姫女	有田市	松井かなめ
----	-------	------	-------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	--------	-----	-------	------	-----	-----	-------	-----	-------	-----	-------

目の位置を変えて過去から脱皮する

残されて生きる厳しさ思い知る

祖母の吹くシャボン玉見て泣きやんだ

振り上げた拳が澄んだ瞳に弛む

日時計にかかわりのない老いの城

かたつむり敵を作らぬマイペース

息子から叱られるもうそんな年

まだ少しおんなを残す夢のかず

完走をした熟年の赤いシャツ

伸びやかな四肢太陽が大好きで

バーゲンがあるまで我慢してる服

窓枠が額縁となるローカル線

掛け物の写経が盆にびつたりで

蟬しぐれ心静かに聞く冷夏

ゴシックの一句目―何かによって掻き回された水はたちまち濁ってしまふ。だが、時間の経過と共に汚れたものはみんな底に沈めて清められてゆく。大抵の事はこの水のようなものだと言う確かな眼がある。二句目―返事もしない猫との会話はひとり言かも知れないが、ドラマの一齣のように温かく、作者のがんだ後ろ姿が見えるようだ。三句目―「突然のことで」に親としての狼狽振りが窺えるが、愛し合う二人であれば強いことも言えないのを知っている。複雑な思いを端的にまとめられた。四句目―自分史という硬いようにも思えるが、この場合このことばより無いように思う。この作者も「赤トンボの歌」には忘れられない思い出があるのだろう。

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出智子

和歌山市 山口三千子

米子市 永井三津子

堺市 近藤 豊子

鳥取県 石谷美恵子

和歌山市 木村 初子

和歌山市 杉山 精子

茨城市 堀 良江

兵庫県 北川とみ子

大阪市 稲本 凡子

柏市 上鈴木春江

大阪市 松尾柳右子

泉佐野市 内田 倫子

米子市 服部 朗子

大阪市 亀井 円女

除 く

金井文秋選



取り除く話がいやな忠魂碑
排除した葱苗畔にぴんと立ち
高圧線の爪に梯子車出す騒ぎ
効き過ぎて花まで枯れた除草剤
世直しへ分解掃除する自民
切除するメスへ折りがこめられる
出揃った惜しいと思う芽を間引く
除きたい客が一番先に来る
警報が解除大きく息を吐く
父さんを除くプランがはずみ出す
太り過ぎ贅肉除く朝を駆け
置けば邪魔除けば不便街販機
不名誉な兵役免除で生き残り
取り除くつかえ棒の蟻り
雑草が聞いた団地の除草剤
旗振って一番先に除かれる
雑音を除くと本音耳に入る
紙袋除けばニッコリ桃の顔
除かれた同士繋いで輪をつくる
煩惱を除くでだての写経筆
わだかまり除けば肩が軽くなる
初産の不安を除く母がいる

雄々 忠雄 白光子 新造 鉄治 大柏 美恵子 清芳 水煙 南奉 朴竜 白峰 凡々子 かおる 静子 重人 明水 志重 和枝 玉恵 通彦

灰色を除き大物居なくなる
光るものすべて除いてボランティア
除け者にされて一匹狼に
雑念を除くつもりで聞く法話
母と娘の歓談父さん蚊張の外
男と女恋を除いて逢うもよし
天高く羅漢が集う除幕式
除草剤タッブリゴルフ場のエゴ
小骨除く母の指先魔女のよう
山門を出るまで我執消えていた
人參を除けてハンバークをペロリ
ポリープを除いてからの空の青
除草剤効いて蛙の声が消え
もやもやが取り除かれていた茶漬
自分史に削除部分が多すぎる

やすお 武史 恭昌 寿瑩 あやめ 典子 宵草 英士子 勝美 有一朗 雀踊子 宵明 風云児 とよ子 希久子 杜的 路児 美代子 一花

新しいドラマがほしいダンス靴
服買って空気相手にダンスする
若やいで妻がダンスに行くと
子や孫に隠れて通うダンス塾
お手をどうぞ女ごころを読んで
フォークダンスあの子の温み手に残る
影までが学生気分になるダンス
コミセンのダンスクラブでボクもてる
もも組のダンスに青い青い恋
合格発表ワルツの曲で帰宅する
草原でフォークダンスをした昔
美しいスワンなんですワルツ舞う
求愛へ鶴はダンスを繰り返す
あの人と組めるチャンス wait っている
フォークダンス若き日想う彼おもう
今日のうつつダンスで奇麗に揺り落とす
ダンス果てとおこさん炎の匂
星影のワルツ踊ってさよなら
鮮やかにステップを踏む老社長
ゴーゴーもどきようすくも宿浴衣
積立てた甲斐ありましたフラダンス
旅の恥へつり腰のフラダンス

大柏 内倫 和子 俊子 宵明 とし子 シマ子 正雄 新正子 典子 玉恵 高朗 重人 洋 正坊 螢

ダンス

平松かすみ選



初歩教室

題一 呼ぶ

吉岡美房

初歩教室に投句をして頂く方も最近大きく入れ代り、古い方は同人・誌友として他の投句欄にいい句を数多く発表されているのを見るようになったのは、大変、よろこばしいことだと思っています。その一方で、新しく投句される、本当にこれから始めるという方も多くなっています。したがって初歩教室も、作者の作句歴に格差のあるのは止むを得ませんが、新しい方も他の欄のいい句や選者の選評などを参考にしながら、人真似でなく、自分自身の感動を如何に十七音字で表現するかを勉強して頂き、一層の精進をお願いしておきたいと思います。

それでは添削句から発表します。

呼ぶ声にふと目覚めたる亡母の顔 ふさ子
(亡母の呼ぶ声を探して目が覚める)

つますいた時に心へ亡母を呼ぶ 静子
(蹟くといつも心に亡母を呼ぶ)

不眠の夜は亡母を呼びます甘えます 円女
(この齡で眠れぬ夜は亡母を呼ぶ)
オイと呼ぶ人今は亡く寂しい日 姫女
(おいお前だけで通した亡夫を恋う)
ふと亡母が呼んだ気のある盆の墓 志華子
(亡母の呼ぶ声が聞こえた盆の墓)
迎え火で亡き父母を呼んでくる 侑里
(迎え火で亡き父母呼べば笑み給う)
盆かえり合掌の中に呼ぶ声を 秀香
(迎え火の中で亡父呼び亡母を呼ぶ)
呼んでいる方にはんやり父母の顔 辰男
(名を呼べば盆灯籠に父母の顔)
花束を投げて波間に父を呼ぶ 春枝
(花束を投げて名を呼ぶ慰霊船)
呼んでみる水平線に消えた戦友 幸夫
(還らない戦友を水平線に呼ぶ)
われを呼ぶ靖国の友 終戦日 修光
(靖国の友が呼んでる敗戦忌)
輪をつなぐいい友がまた友を呼び 彩子
(反戦歌 友が友呼び輪をつなぐ)
「ちゃんと呼び老いて親しみついてくる 友照
(おじいちゃん呼ばれて齡とあきらめる)
おーいはい呼び合う二人卒寿まで ふさ子
(オイとしか呼ばぬ夫と来た卒寿)
親子孫呼び名時々間違えて タミ
(間違えて呼ぶ程孫に囲まれる)

補聴器を外した姑を呼んでいる 三重
(補聴器を外した姑を呼んでいた)
姑と呼ぶ嫁に甘えて身を沈め 高栄
(さん付けで呼んで娘と違う嫁)
紙おむつ嫁呼ぶ姑の末世紀 めぐみ
(看病的嫁呼ぶ姑の変わりよう)
祭り太鼓ふる里も呼ぶ老母も呼ぶ 孝由
(秋祭りふる里が呼ぶ老母が呼ぶ)
母さんと呼ばれる夢を見続ける 義
(再婚の夢母さんと呼ばれたい)
酒二合父の呼び声二重奏 君枝
(もう一本欲しいお酒が呼んでいる)
ドアホンと受話器は妻の守備範囲 行隆
(盆休み呼び鈴電話妻任せ)
観客を呼ぶ芸だから胸をうつ 幸子
(胸をうつ芸満員の客を呼ぶ)
閉店前呼び込みの声一段と 弘子
(閉店前呼び込む声を張り上げる)
九官鳥呼び声まねてすまし顔 さち子
(九官鳥までが私をオイと呼ぶ)
九官鳥が父さんと呼び暮らしてる 幸枝
(父さんと九官鳥に呼ばれてる)
籠の鳥呼べど出られぬ定めあり 秀香
(呼んでいる声へ出られぬ籠の鳥)
振り向いてくれるまで呼ぶ好きな人 ますみ
(好きな人振り向く日まで呼びつづけ)

悪友が麻雀に呼ぶ電話ベル 杏村

(麻雀とわかる電話に呼び出され)

呼ばれても返事の出来ぬ出演中 美寿子

(電話だと呼んでも出れぬ風呂の中)

呼ばずとも顔見て動く古女房 慧心

(呼ぶ前に妻は顔色読んでいる)

山登り孫の呼ぶ声後を押す 黎之助

(孫の呼ぶ声が引っぱる山登り)

仕返しに聞こえぬ振りし出ぬ厨 美智子

(仕返しに聞こえぬ振りし出ぬ厨)

噂呼ぶ救急の音闇の中 正雄

(救急車来たら噂が噂呼ぶ)

友呼んで嬉しいことを共に酌み 隆

(嬉しいを頷つに友も呼んで飲む)

呼ばれても行きたくないと青みかん 志重

(呼ばれても熟れるに遠い青りんご)

呼び込みの勢い買った西瓜玉 たもつ

(呼び込みの勢い西瓜買わされる)

国なまりが親しさを呼ぶ朝の市 義子

(朝市のお国訛りが呼ぶ旅情)

神を呼び仏を呼んで助け待つ 芳水

(人間の都合ばかりで神を呼び)

悪友が呼ぶ声にある魔力 幸子

(悪友の魔力に負けて呼び出され)

グランドへ人呼び寄せる好ゲーム 君江

(新しいブーム人呼ぶジョーグ)

呼び出しはうちの子供と母あわて 春風

(学校によもや我が子で呼び出され)

リュック背に山が呼んでる夏休み トミエ

(夏山が呼ぶから行くという息子)

呼び出しの歓声あがる秋場所 一乗

(歓声へ人氣力士が呼び出され)

青空へ呼んでこだまの帰る朝 美寿子

(青空へ朝の幸せ呼んでみる)

同窓会昔のあだ名で呼んでみる 方郎

(同窓会綽名で呼んで盛り上がり)

べた風いで海がおやじを呼んでいる あき子

(べた風い海がおやじを呼んでいる)

アッシー君ポケットベルで呼び出され 章子

(ポケベルがアッシー君を呼んでいる)

呼ぶ声に振り向けは彼笑つてゐる 侑里

(恋人の内だけさんをつけてくれ)

呼ぶ声でその日の機嫌よくわかり りつえ

(わたし呼ぶ声で夫の機嫌よくわかり)

ニックネームで呼び合っているヘネムーン ひろ子

(恋人の頃の呼び名でヘネムーン)

兄呼びに行つた子がまだ帰らない 節子

(兄呼びにやつたらみんな帰らない)

嵐呼ぶ餓鬼大将の夏休み 三津子

(嵐呼ぶ腕白どもの夏休み)

本当は助け呼んでる不登校 みつこ

(助けてと登校拒否が呼んでいる)

一石を投じ意外な波紋呼ぶ 義男

(一石が意外な方で波乱呼び)

わらび餅テイクが客を呼んでいる 志華子

(郷愁が客を呼んでるわらび餅)

着想・表現ともに立派な句

猫を呼ぶ父の一番優しい声

立ち話の呼ぶ声も聞こえない 弘子

子ら巣立ち急に優しく妻が呼ぶ 絢子

一度でも貴男と呼んでみたかった 行子

呼び出した彼女弟連れて来る あづま

ちゃん付けて呼び合うクラス会は古希 きぬ

旧姓で呼ばれてからの国なまり 芳郎

哀しくて戦友の名呼べば海が哭く 黎之助

悪いけどあなた呼んでも逝きません きぬ

呼ぶ程の用もないのに呼ぶ夫 はる子

反抗期呼べば空向く葱坊主 ツネ

呼ばれない男が旗を振りたがる 忠男

おばあさんなどと気安く呼ばないで ますみ

二十年私の名前オイですか よしみ

私の句

夏の絵の向うで誰か呼んでいる

呼び止めて見たい蛇の目とすれ違い

◇

題「裏」—10月15日締切(12月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

老地柳城

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。二百字詰
原稿用紙に清記をお願いします。編集部

川柳塔おっぱい吟社

木村 明人報

礼文島祖国の風が暖かい
子育てがすめば女房も強くなり
肩の荷も夢も分けあう老いの坂
モツレ糸元をただせば解けてくる
ゼンマイが狂い始めた古時計
年金のライフに重荷の交際費
引つ込めた道理に無理がカラミつく
哺乳乳ビンみるみる空にする元氣
文無しの親に息子もそのとおり
考えてかんがえてから馬鹿になる
文庫本 旅の道連れ持ち歩く
したためる文にも迷つ胸の内
枯れるのがこわくて情の井戸を掘る
妻刈をする時候には雲雀見す
あつい恋 泡と消えてもしてみたい
組み立てに汗をカキカ扇風機
宅急便係の便りも入れてくる

迷親子 正雪
マツエ マサエ
よしみ 伽名子
くに子 チカエ
吟笑 明人
ふみ 放任
迷貫 白柳子
いさむ かおり

竹割った気性で嘘が出てこない
校長室フワフワソファがうらやまし
小なみ子
大橋もガイドの声も夢の中
文仙

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

仲良し同土笹舟流した川だった
仲良しの友の笑顔がこぼれない
不可思議も心にしずめ仲良しに
終着駅で仲良しばかりたむろする
心配も一緒に病んでる仲よしで
一番の仲良し身内よりあたたかい
仲良しに励まされて生きている
仲良しが人形になり輪を作る
れんげ田と仲よしの唄遠くなる
森羅万象みな仲良しで生きたいな
仲よしの雀が今朝も餌をねだる
同好の仲良し切磋琢磨する
仲よしを分析したい時もある
仲よしと香辛料を掛けつこする
仲よしのことはみんな壺に入れ
仲よしで良きライバルに恵まれる
輪の中の仲よしこつこに疲れる
仲よしこよし昔の夢がよみがえる

城北川柳会 吐田 公一報

長寿して三度拝したご成婚
調子よくしゃべる政治家不明金
蜘蛛の巣の蜘蛛頃として居を守る
近所ボスあらぬ噂を撒き散らす

ふみ 昭子
春蘭 八重子

指切りの別れへ虹が冴えている
呆けると妻は淋しいことを言う
置き方で帽子一つが落ちつかぬ
家出の子氣遣う闇に風の声
間違いを素直に認めてホッとする
メモ帳を見れば亡妻生きている
親の敷く路線と違う子の進路
貫禄の違いを見せつけている寡黙
街宣車悪夢の軍歌まで散らす
常識の違ひ金持ち怒らない
浮気から調子くずれの夫婦仲
宿題の子が気を散らす祭笛
振り返る我が人生も万華鏡
気分転換緑の風という古刹
縁談のギャップでもめている家族
花散らす風のとに初夏の風
絵ごころが欲しいと思う花菖蒲
太い柱の家で安心して眠り
寝たきりの母に見せたい家の芝

川柳東大阪 森下 愛論報

こつこつと祖先探しに穴を掘る
百八十度探す死角がきつとある
探すのを諦めた頃出る財布
かたつむりウインクをさせると雨が降る
アジサイに心変わりをさせると雨が降る
エプロンを花柄に替え雨が降り
かたつむりを探す首塚濡れている
何探すんだったか二階から降りて

東雲 隆
度 晋吾
真柳 作一郎
文秋

愛の鞭を根にもっている逆恨み
根が深いアラブのケンカに神がいる
根も葉もない噂に悩む美人秘書
浮草にやっぱり根もあり花をつけ
中東の争い根本にある宗教
本当は心が疼くおべんちゃら
べんちゃらに思わずゆるむやせ財布
べんちゃらはいらぬ常連さんだから
唄声が風に乘つてる峠道
悔いのない道が男の背につづく

岸和田川柳会 田中 文時報

サンプルを見ると喉から手が出そう
二十一世紀のサンプル明るい色ばかり
棠裾ひく美人が壁にいる古墳
控え目の裾に女の彩がある
裾の乱れまでロボットの阿波踊り
ポケベルが仕事仕事と責めてくる
ミス責める言葉の中にある温み
男気を出して一人で責めを負う
責めるのはよそう返り血怖いから
清貧を責める勇気は僕にない
責められて恥の上塗りしたくない
言いすぎた私を責めている鏡
コネつなく粗品大きい方がいい
温かい言葉を添えて粗品くる
しようもない粗品へ並ぶ妻の午後
人の持つ粗品欲しさに買いに行き
逆転にしびれて酔った甲子園

晋 吾
猪太郎
太一
勝美
春男
恒明
高尚
久論
愛風
湖風

東雲
一弥
京
狸村
萬的
富志子
甚一
昭二
通彦
浪速子
二南
天笑
ひで
さよ子
月子
朝一
文時

聴く程にじんとしびれる節回し
公約はしびれるほどの美辞麗句

川柳化粧槽

植村客遊子報

同じことまた言う年のせいだろう
妥協する決意で肩も軽うなり
ばら色の夢見嬉し朝の風
母の忌に拾う亡母の涙壺
生い立ちは語らぬ雑魚の群れにいる
殺し文句で男を騙す夜の蝶
腰低く来たセールの捨てぜりふ
卒寿の父連れて人情の薄いこと
募る愛ときめき押さえ女一人
賢くて娑婆の空気がなじまない
若葉旅ガイド解説夢の中
胸ばらしあとの空しさ倍になる
お宮さんの鳩くれくれとついてくる
咲き誇るつじのしがらみからみつき
古い事知っているのも取得です
父の日は肉焼く庭に笑顔寄る
カメラには妻他所行の顔見せる
低姿勢相談事を持つてくる
狂い年何時まで鶯鳴くのやら
人情の昔を恋うる老夫婦

川柳クラブわたの花

片上 英一報

白光子
勝晴
岳詩
遊峰
治夢
サワ子
朱玉
三青
小鷹
悲子
葉香
礎石
姫女
早笛
はる女
茂章
美代
奮水
嘉
春蘭
金也
客遊子
英一
シマ子
英一
美津留

言わずともその目はすべて知っている
火砕流どうかおさまれ願う民
願を掛け守られそうな蛸を断つ
平凡な服は安心して着れる
平凡な顔で毎日平和です
平凡な暮し切り干し煮る匂
平凡に生きて理想に遠く住み
平凡を嫌って若い子は自立
平凡に世渡りできぬ癩の虫
平凡な暮しも健康なら愉し
三度の膳おいしく食べて凡夫婦
平凡な暮らしになれた夫婦です
平凡に暮しています総理どの
平凡が物足りぬとは何を言う

佳句地十選 (9月号から)

渡部 さと美

月欠けて満ちてゆつくり生きてます
丸呑みの暗記に骨がない脆さ
生きるとはいいいな西瓜胃にとどく
真実は書けぬが嘘はなお書けぬ
血の出ないようにさっぱり斬り捨てる
原点に戻り迷いが解けてくる
ゆつくりと来る幸せは間に合わない
いつまでも吹いてはいない父の風
お父さんを偉いと言って聞かせよう
金丸のバカと落書きしてあった

俊子
雅恵
花枝
幸枝
正子
初子
春子
千枝子
暁子
道子
ますみ
トシエ
明子
みき子

美
月子
信子
栄美子
幸
しげお
正雄
武庫坊
透太
智子
雄々

平凡な顔が私の自慢です

喝采のまつた中にある笑顔

平凡に見えて嵐も雨もある

平凡に暮しただけを生長し

長い目で見ると平凡に夢がある

平凡になすびが生つて慈なし

宝くじ当って夫婦うろたえる

年寄りには年寄りらしくお茶にする

南大阪川柳会

金井

文秋報

夏雲の流れをとめる塔は朱に

良心に背くと責めるそば枕

心得ているがついつい欲が出る

温顔が亡母に似ている秘仏展

心得を教える父の道具箱

社員心得昔の文字で書いてある

よく食べて飲んでお喋りとまらない

定年の日々温顔になってゆく

糸切れた風のんきではいられない

編み針を止めて午後の余り風

友愛を心得違ひせんといて

終電車の時間を知っているお酒

会場の私語をとめさす咳払い

窓叩く風は背かぬ風と知る

穏やかなお顔で愚痴を聞いてくれ

前チャックはずしたままで市場かこ

青年は壁に当たってからとまる

呑気に見せてジェラシーを抱いている

しのぶ 弘直 剛治 友甫 拓生 隆 一風 鬼遊 文秋報 作二郎 楓楽 庸佑 寿美 雀踊子 萬的 凡子 直子 千里 秋子 頂留子 智子 悟郎 真柳 文秋 勝美 度 冬葉 シメ子

成長の過程で背く反抗期

孫抱いた師の温顔を見てしまつ

背かれて人の心が見えてくる

心得て居てもいたらぬ事ばかり

苦勞などなかったよな母の顔

本人は背いているとは思つてす

急がない旅を地酒が引き止める

好きだからたまに背いてみたくなる

デパートで女房が止まる場所がある

心得ているから首は洗つて

岩美川柳会

羽津川公乃報

毎朝の日課テレビのドラマ見る

見物で高見の組に回つとく

行けもせぬ旅の地図だけ見るばかり

親分気出してめんどろ見るといふ

顔見るまでは一杯過ぎたかと思つ

今年こそ今年こそはと手相見る

ブスなんて見慣れてくれれば苦にならぬ

手相見る人の手相が見てみたい

アングルを変えたと見えたり落し穴

気の弱い男の視線ばかり見る

カルテ見る医者の表情じつと見る

悲しい時一番高い山を見る

華やきを見せれば背信視かせぬ

背のびして汚ないものを見てしまつ

前はかり見て生きてきた百日紅

猿じつと見ている猿に似てしまつ

柳伸 トミ子 文子 シマ子 ハル子 千梢 芳郎 久子 東雲 恒明 喜与志 善幸 孝由 希久代 嘉津江 はるお 芳江 一京 單車 睦子 公乃 美千千 美恵子 大漁 螢 公弘 忠良

川柳塔とつとり

武田 帆雀報

ゆつくりと幕を引くまで夢を抱く

老木に咲く花の夢賭けてみる

絵に描いて置きたいような夢だった

子が夢を見たのか枕抱いて起き

夢の中いつも私が主人公

夢破れてもふるさとに母がいる

星空に思い出一つしのばせる

星空へ弱い心の愚痴零す

星空が幸せバズル投げかける

星空が冴えて迷いが吹つ切れる

光陰の矢を星空に解き放つ

星空を見上げ宇宙の人となる

母恋し今夜の星はよく光る

忘れたい事ありネオン街泳ぐ

次男坊都会でなけりや泳げない

学歴も地位もないのがよう泳ぐ

妻の手の中で泳いでいたわたし

玄海を泳ぎ知将の馬に乗る

あんちゃん泳ぎに行つた浜がない

父さんの泳ぐ背中を見ておこつ

高らかに蟻が奏でる労働歌

うちの嫁蟻に劣らぬ働き手

欲望に蟻地獄とも気がつかぬ

大蟻と小蟻で仲の良い夫婦

蟻に似て甘い話に寄つて来る

ズボンの中に蟻が一匹おるらしい

孝由 揚芝 一枝 輪多朗 初枝 艶子 正恵 美津子 主一郎 俊路 螢 孝男 由多香 静生 行男 多可志 粗粒 帆雀 山人 公弘 黙光 友夫 一京 侑里 宗吉 喜与志 きみ子

川柳後楽吟社

從野 健一報

追従笑いの音程が狂う

乾杯の音頭無口な人がいい

鈴虫を飼つて胡瓜ばかり食べ

ほんとかな金婚日の日に妻忘れ

シルバークード貰つて寂しい粗大ゴミ

ボケベルに浮気の虫もちぢこまり

燃えつきた命が消える流れ星

聞き耳を立てる淋しい日のポスト

聞く耳を持てばなだらか老いの坂

夜勤明けちくわ一本買つてくる

川柳のある駅身内のように見え

一人行く一本橋は神まかせ

子の寝顔悔いのなかつた今日の汗

下手くそを上手いと言われ調子のり

蝸牛やっぱり梅雨がよく似合う

鉢巻が島の男の心意気

愛情の歩幅が合つてよき夫婦

旅の宿テレビ見ながら寝てしまひ

川柳塔わかやま吟社

宮口 克子報

金魚屋も蟬も真夏を撒きにくる

田に生きる男に土と陽の匂い

木偶人形とても見事な芝居する

虹を追つ心が渴かないように

夏の夜があつてそれからずるずると

異常気象冷たい夏で医者通ひ

夏祭り胸は少女のまま踊る

草風 拓治 青銅 柳五郎 博友 美智子 哲郎 義親 道博 佐加恵 吟平 桃風 邦季 金吾 玉水 健一 照路

形見分け句で母と逢うしじま
何かが匂うつかり乗れぬ口車

發育が匂う産着を干している

シヤネル5の匂に驕るものがある

温かい人太陽の匂する

進物の底に潜んでいる匂

ドクターストップそれでも酒のいい匂

人形の向き変えてから床につく

仕送りを飲んでこけしに詫びている

寄り添つてこけしの恋の清らかさ

もの思ふ夜は人形の目も渴き

人形でいれば夫がおだやかに

人形にされて自分を見失う

瞳を入れて心通わす人形師

虹だ虹だと病妻を呼びにくい

虹ある間愛の告白急がねば

太陽を恋う地球に虹のイヤリング

虹を追う事に疲れた白い足袋

約束した虹と一緒にえ尽きる

虹色の和紙に妬心の女文字

胸張つて生きる心に虹抱いて

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

政治不信ならば世の中変える党

子育てが済んで女は髪を切り

ゆつくりと橋を渡つたかたつむり

のど自慢子供が唄う恋艶歌

風鈴の舌を切られて喋られぬ

しあわせと愛犬の目が語りかけ

正博 勝太 榮美子 佐代子 紀美女 公子 三男 愿 登志代 三枝子 惠美 光代 英子 射月芳 鉄治 和成 紀久子 寿子 好笑 克子

朝市へ魚見にゆく宿の下駄
図書館の隅に私の本がある

薬にも毒にもならぬ世の教え

喜んで貰えばよいと若ノ花

曖昧な語尾に納得いかぬ父

五月雨や天に政争地に地震

度忘れとアウンで通す老夫婦

邪魔つけだでもね居ないと物足りぬ

天然のにがりの味で父の汗

挨拶のおんな署長はまだ二十歳

美女悪女撫で切りにする草刈機

累卵の政権七党一会派

川柳ささやま社

平野百合子報

ひと言のお世辞が言える年になり

里の井戸いつも西瓜が冷えている

いい人の面影小箱に入れておく

ご無沙汰で重ね重ねの身のつらさ

誰も乗らぬ縄電車の重い腰

裏道をうまく泳いで時の人

迷いごとやっぱり母の胸に聞く

妻亡くしわが一代の落し物

目の高さ落し相手の本音追つ

実印の重さが生活まで変える

野仏に祈り重なるにぎりめし

円満夫婦やっぱり妻がラッパ吹く

拔擢へ祝いの酒が胃に重い

酒だけの元氣へ酒が落ちはじめ

落ち目ばかり歩き疲れて深い闇

ミチ子 義美 旭恒 虹汀 久仁於 幸夫 四郎 高明 正剣 純子 恵美 貞子 ヒサ子 市三 つや子 素水 和子 靖子 とみ子 富美 芳郎 可住 百合子

西宮北口柳會

丸山よし津報

母の極楽肩トントンで足りている

極楽と地獄を分ける運命線

極楽へ行く日貴方と訣れます

一杯のビール極楽にしてくれる

極楽へ旅立つ父の髭をそる

極楽へ行く決めてる楽天家

古シヤツに過去の苦勞が沁みている

清新なみどりのシヤツに入れた票

このシヤツにやさしい手形ついてます

カラーシヤツ腹の一物語ってる

ティーシヤツに老いの肋の見え隠れ

家族みな元氣で白くシヤツを干す

敗戦の涙のシヤツが洗えない

チャップリンのシヤツは笑いと涙あと

私の影をはじく列車とすれ違つ

雑音をはじき飛ばしてまっしぐら

はじき返す思慮分別は持つてゐる

そろばんではじき切れない罪の数

ノラ達が華やいてゐるコーヒ館

華やかさ緑無き妻の地味好み

手の届く範圍で華美に生きてゆく

噂とは華やかであり怖いもの

華やかに黒を着こなすにくい人

流行遅れの父の背広が捨てられず

駅でドア開くと吹き込む蟬しぐれ

貴婦人になって不自由つきまとう

未だ寝てる駅前までの銀座街

羅漢さま泣き出しそんな顔もいる
一時よりティッシュくれないノンバンク
顔色を変えずに嘘をついている

川柳たけはら

森井 菁居報

青い海ゼリーのように光ってる

雨音に耳を澄ましている蛙

一年振りの句碑へやさしい雨が降る

ご近所の噂話はほどほどに

うつの日の泪誰にも見せられぬ

新空港 発破の音を近く聞く

アジサイの色鮮やかな雨の午後

梅漬けてひと息ついたお茶の味

氣をもんでいるのにあなた笑ってる

雨の午後孫が帰った味気なさ

まだ捨てたものではないぞ顔洗つ

降り続く雨島原の人思つ

皿二つふたりの好きな彩を溶く

ストレスを捨てて手頃なシヨッピング

病床の窓辺のトマト完熟よ

被爆時の記憶はなくて原爆忌

伸びんとす尺取虫は先ず縮み

どの党が一番嘘が上手かな

雑草の力に兜をぬぎました

子よ走れ母はやりくりするばかり

胃の痛みふと三人の子を思い

しまい風呂見えない明日に手を合わす

山越えて越えてはるかな地平線

目いっぱい生きた女の吐息聞く

白溪子
萬的
しげお46
中史子

蘭 幸

菁 居

房 子

愛 子

光 子

栄 恵

浪 子

喜久恵

一 路

一 枝

静 佳

ヤスエ

伸 子

カツ子

千 恵

鮎 子

比呂子

白 狐

麻 代

夏 喜

喜美子

平々凡々レモンの好きな台所
病む窓の今日もみどりがあふるばかり
自販機の無口がボクの性に合う
吉野ヶ里の遺跡にみる祖先の血

梅雨晴れ間ジャガ芋を握る忙しさ

父の日もカーネーションの小鉢買つ

京都塔の会

松川 杜的報

わだつみのこえが沖から響く夏

沖は夕暮れ別れのときが来たようだ

霧笛鳴る沖へ祈りの母がいる

沖の雲漁師は心にとめておく

民宿の借景沖に飛ぶカモメ

沖へ出た父を氣遣う雲走る

被写体の沖の白帆が動かない

廃船が沖へ曳かれてゆく霧笛

夏草の匂のなかで泣いてみる

思い切り夏草茂る無人駅

二尊院茂る青葉に沈む道

雑草が茂る新葉に残る

青い鳥茂る樹海に見失つ

また苦情聞く雑草を茂らせる

遺産分け面倒だから寄付をする

面倒をいとわぬ友がいてくれる

面倒を避けた別居に日が長い

面倒な男が隣に来て座る

面倒はかけたくないが寿命です

面倒な話は酒の前に聴く

面倒なはなし水虫かゆくなる

淑 子
不 朽
静 風
正 宏
規 代

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

代

規

固苦しい事は苦手なうどん好き
どの道を行つても展望台に着く
紫陽花の色とりどりに梅雨最中
復活のお茶壺道中江戸に着き
繰り言を扇子の襷にたたみ込む
日本の深さを知る日よき日なり

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

ご先祖に詫びて煙を一つ売る

温室の煙ときどき眠くなる

花畑みんなを笑顔にしてくれる

専門と畑違いの職に就き

家庭菜園品評会も花ざかり

治ったと快気祝の軽い筆

大根がうまくて治す気の病い

擦り傷をたちまち治す母の息

薬より治す意欲の自己管理

治ったはおかげと祖母の礼参り

磨崖仏の足を洗って夏の川

バカばか馬鹿を何べん捨てに行った川

氾濫の川根こそきに夢を断つ

川は男だ太郎も次郎も三郎も

天国に女ばかりと言う噂

フルムーン天国と言う湯につかり

天国も地獄も同じ金次第

天国から地獄へ落ちていく麻薬

キャンプ用品豪華になつて夢薄れ

喜々としてカレーの匂うキャンプ場

天幕を張つて見あげる夕茜

てる

しげお

笑女

達子

幸

水客

三男

一風

和子

宏子

春堂

泰

欣之

勝美

頂留子

美幸

度

柳伸

榎

寛然坊

とみを

美津留

夕花

正子

かつみ

弘直

些細なことは星空が吸うキャンプ村

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

あと味はブラックコーヒーたつぷりと

あと味の悪さを救う鐘が鳴る

あと味がよくてうれし靴をはく

あさ漬けが古い漬物おしのける

トンネルの向うに夢がありそう

あさ漬けが恋しくなつたひとり旅

旅みやげ頼ずりされた感謝よ

トンネルの向うに見える青い空

トンネルがいくつもあつて嫁さおくれ

あと味に酔つております昼の月

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

家計簿に響くカードは妻が持つ

いつまでも父の太鼓を響かせよう

娘から女に変わる傘渡す

玄関で傘の雫を気兼ねする

逢えた日の傘はいたわるように干す

義理の傘今日の雫を軽くきる

日傘くるくる軽い約束して帰る

案の定傘置いてきた梅雨晴れ間

夢枕亡母は今でも戒める

つづかない愛を知つてた蕎麦まくら

饒舌な枕に夜を耐えている

奇跡への願いは虚し北枕

あの人が来ると空気が変になる

万歩計朝の空気を吸いこいで

波留吉

澄子

紫香

武庫坊

森生

彰一

庸佑

メ女子

節子

恵美子

杜的

萬的

白溪子

年代

諷云児

立谷勇次郎報

夢之助

六浦

鹿太

フクヨ

定人

紫香

弘治

美々

尚利

十四郎

向西

幸代

汚れても音色涼しい南部鉄

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

勇次郎

派手を着て来ればよかつたバスツアー

延子

女だけの団体恥も見栄も捨て

きみ子

団体をむかえるロビーのいい笑顔

房子

可も不可もなく団体の中に居る

たつみ

団体生活先ず手始めは保育園

多賀子

団体客必死にガイドの後につき

みえ

夕映えの雲が私をはなさない

邦代

夕映えへ逢う指切りはしておこ

早苗

窓越しの夕映えそうめん茹でている

清子

夕映えに野良の夫の汗光る

登志子

夕映えにお地藏さんを入れて撮る

雄々

人間に明日を与えて夕映える

茂美

母の旅土産探しくたたびれる

妻美

保険屋が先に土産を置いて行き

芳枝

出雲弁の土産はなしがおもしろい

螢

お土産の手のぬくもりがまだ残る

小鹿

おみやげのすそ分けが来る雨の午後

満江

お土産の中味はアリバイかも知れぬ

雀踊子

湯けむりの中で北斗の星さがす

桂子

母の背を流す幸せ湯のけむり

静恵

湯けむりが私の答知っている

文子

湯けむりの街で穴場を探してる

与根一

湯けむりの中へ孤独を捨てに行く

太泡

湯けむりにはんりの酔ってきたうなじ

友子

宿浴衣つんつるてんの大男

米子

ふつ切れた指に重たい宿浴衣

畔

宿浴衣不意に笑わすカメラマン

あの人と同じ模様の宿浴衣

宿帳は妻で通した宿浴衣

国説りまる出しにして宿浴衣

川柳塔鹿野みか月 土橋

恥掻いて大きくなってゆく子供

フルムーン頼る夫の目がきれい

勝つ気などないが病歴数を増し

うそでいいお世辞が欲しい初春の夜

今日もいい一日だった夕陽を拝む

ぬくもりを背中の孫と分かち合う

養老院よりも気楽な部屋であり

あんなには夜を返してとは言わぬ

アツケラカンと秘めることなし凡夫婦

時間前ころのベルが急ぎだす

天水で急場をしのぐ有難さ

雨雲に急ぐ布団の日向干し

燃えそうに消えそうにおくれ花急ぐ

病夫の背を掻く手が心細くなる

掻きまわす口には蓋も底もない

大掻きで命からがら生きてきた

汗かいて傷つけ合っているらしい

愛情も掻きませ母の八宝菜

雪を掻くホラ襦袢が見えてきた

掻き揚げの中で親しい声をきく

バイトから一人おなかの奥が見え

鼻歌でバイト帰りのペダル踏む

アルバイトした候で晩酒かい

静江

長三

義良

町紅

螢報

早苗

弘子

正恵

明美

一京

幸枝

喜与志

隆風

久枝

智恵子

公子

三千代

くに子

節子

富恵

諷人

信江

孔美子

汲香

和子

八重子

はるお

葉がくれの茄子あざやかに雨上がり

焼茄子のぶつぶつ小言が爆発

茄子紺の浴衣がはずむ夏祭り

茄子の刺油断はできぬライバルだ

焼く漬ける茄子に恨みはないけれど

焼茄子が食いたいという後遺症

ほたる川柳同好会

井上

直次報

故里の波は子供になつて聞く

長梅雨が明けたとたんに土用波

荒波にひたすら母の百度石

胸の中感情という波もある

いつまでもよくよするな土用波

無理をして波の聴える家を買ひ

荒波を避けて入江にいる私

暮れかけてドラマのような波の色

変革の波の落し新首相

波風が立っていそうなふたり連れ

二十歳の恋波にのまれて夏終る

宮水の珈琲を飲む波止場町

石投げて広がる波紋聴いている

漬物を漬けるに母の手が呼ばれ

無理のない役目についていい余生

父の役目が果して披露宴

名刺には書けない役で活躍す

ロボットに役目ははたす熟練工

終つたらまた始まった痴話喧嘩

宴会の続きの顔が終電車

かつ乃

実満

睦子

きみ子

公弘

しげる

螢

薫風

吉太郎

一笛

馬洗

方郎

万之助

英子

喜美子

昭子

しずえ

佳子

保子

直次

明光

純次

敵子

洋子

幸子

眞郎

祥司

三幸川柳教室

三宅

保州報

自然破壊ページじまだらになる凶鑑

山並みの自然をかえてゆく文化

山河清流自然が遺す造形美

参道の自然を消したアスファルト

自然界の多彩に勝てぬ絵の具皿

あの時の勘で拾った愛の種

人の秘話拾って騒ぐワイドショー

これからは喜怒哀楽の喜を拾う

ライバルの噂を拾うカフェテラス

点と線拾って街のルーツ観る

ブランドを拾い集めて顔がない

視界ゼロ ヒントを拾う旅に出る

口添えができず鉛筆走らせる

鉛筆で翔んでる妻の置き手紙

鉛筆で下書きをするラブレター

たかが鉛筆活字となつて人を斬る

頬杖をつくえんぴつが走らない

核心を掴み鉛筆身を削る

鉛筆は削られながら精を出す

色鉛筆好きな色から減っていく

国訛り入れて杜氏の労働歌

次期総理もつ決めている屋台酒

風穴をふさぐ男の苦い酒

春夏秋冬 酒に口実など要らぬ

男にも泣きたいときがある手酌

祝い酒下戸は下戸なり酔っている

ワンカップ余つて程のよいはてり

一本のビールが旨いJリーグ
いい男と向えば旨い酒になる
父の日を自分で祝つ缶ビール

サークル檸檬

小林

一夫報

まどろめば桃遙かより流れくる

遙かなる風景リラの花が散る

原爆ドームを支える遙かなる祈り

雲動く遙かな父のサインかも

消印の日付 遙かな人想つ

カンナの朱 人はあやまち繰返す

足の爪 誰も同じと思つて

濁流を写すテレビがゆれてくる

ひまわりが見てる三時の大欠伸

ひと駅を歩いて気付く街の彩

未来とは松葉ばたんの種を採り

肩車したらはつきり他人の子

はびきの市民川柳会

榎本

吐来報

總會屋手入れてキリン泡を食い

鬱の日はマンガを読んでよく食べる

野心持つ男はお世辞絶やさない

梅雨明けをいらいら待つは地下の蟬

肩書が取れて落ち着く男達

二桁の昭和が国の顔になる

草原を雲に負けじと駆けてみる

輪になつて座れば空気温かい

ステージを終えて一流歌手の汗

気にかかる一つに妻の男運

町子
公子
親路

千代
正坊
薫

一夫
みつ子
智恵子

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

喜美子
慶子
薫風

真夏日の白さに映える浴衣藍
浴衣着てみようか風鈴揺れている
欠伸され長口舌は尻すばみ

リハビリも欠伸出て来た回復期

おみくじを巫女の優しい手にもらう

いたずらな神で二人に吉と凶

落ち込んだ日のおみくじが吉と出る

おみくじの女難の文字にしたり顔

ナイターとドラマでテレビもめ続け

ナイターの興奮積んだ終電車

ナイターになった母校のユニホーム

空びんをゴロゴロ並べ妻の留守

妻の留守狙つて友がさけてくる

黒松が留守の間に赤松に

留守電へお留守ですかと言つて切る

お隣が留守で預かる宅急便

会心の授業チョークがよう折れる

教え甲斐ありそうな顔する月謝

近道を教えてもらい苦労する

教えません稽古を積んでゆくのです

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

言い訳に嘘もまぜてる風の私語

コースに合わぬ蛙が一つ居り

いきいきとはずむ電話とかわす声

家中の音聞きわけて母の病む

忍ぶこと大正生まれの母の意地

嘘少し混ぜて話を和らげる

祝詞にはきれいな嘘で色をつけ

良子
みつこ
繁男

一屯
絢子
美代子

志洋
昇

泰子
たかし

美津留
昭平

昭平
敏

敏
辰子

辰子
シマ子

シマ子
かつみ

かつみ
晋

晋
一壺

一壺
美南子

美南子
山人

山人
すみれ

すみれ
美津子

美津子
きくゑ

きくゑ
伊久栄

伊久栄
半仙

半仙
秀香

秀香

可愛い嘘まあるく包んで聞いてやり
恍惚の嘘にやさしいボランテア
澄んだ目に嘘の順序が狂い出す
包装のかわいい嘘を一つ買い
反対のシユプレヒコールこだまする
休日を味方のように雨が降り

静岡川柳塔

永倉 僕川報

憂きことは捨てて没我の趣味に生き
終章は何時果てるとも苦にならず
寝たきりの見舞泣かれて困り果て
花束をいただき涙出て困る
鍋底の景気へ予算組み直す
泣く力ためて幼児の自己主張
荒れ模様積る想いを吐き捨てる
衣も食も豊か平和な世に育ち
偕老同穴墓まで続く血の絆

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

つんとした女のようなメロン買った
果物屋メロンはメロンの位置がある
そうめんを晒す確かな夏の天
ギャル御興黄色い声が天をつく
雑草は天に向って意地を張る
原爆ドームを望むいびつな石の姿勢
川はソフトに少年を眠らせる
港町 外人さんが焼くパン屋
古希の顔見たくもないがクラス会
新婚のお膳は今日も玉子焼

終戦日 人それぞれの暑い夏
向日葵が方向音痴になる冷夏
談合があつて掃除婦まで呼ばれ
それからを話せば長い花手桶
天国へ行くのに急ぐことはない

川柳大阪

高須實金太報

置傘が欠伸出来ない忙しき
また一つ心を貰う今日が晴れ
開運は晩年だよと嘘の易
玉の汗もつ誰からも借りはない
梅雨明けの心が晴れた青い空
雷鳴を響かせ梅雨のフィナーレ
政治家の汚れ選挙で掻き落とす
頭掻く癖叱られて頭掻く
ゼネコンは掻けば掻くほど垢を出し
掻く指が他人届かぬとこにふれ
声かけて他人のそれ似恥を掻く
牛の声山羊の声して島の朝
改良という名で豚が見合いする
牛売の日父も夕陽もみな無口
路地裏で同じ詠りが小さな灯
ストレスはどこ吹く風のペアルック
一票の重さは同じ浮動票
痒いとこ掻いてもらえる妻という

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

敗戦の八月 一生忘れず
御先祖へお盆の経が短すぎ

八月の砂に球児の汗が飛ぶ
八月の天 お祭りの梯子する
だんじりの汗が暑さを連れてくる
善行も差し引く不徳汚名のみ
やんわりと優しく書いた請求書
炊事する妻の苦労がわかる留守
炊事場は姑に任せて嫁バート
炊事する母の返事は背中から
赴任地の自炊に浮ぶ妻の顔
庖丁のいらぬ炊事共稼ぎ
寅さんを取り巻く温い人ばかり
若者の悲鳴遊園地のスリル
茶袱台にスリルが欲しい喜寿夫婦
帯をとく女スリルを見せつける
幸運と背中合せにあるスリル
対向車谷を横目にバックする
谷底を覗く足許崩れかけ

川柳藤井寺

高田美代子報

欲張って父より高い樹にのぼる
背が高いだけです親の欲目です
習い事欲がないので進まない
欲得を離れた友の希少価値
欲言えは限らないから諦める
結局は金の力でつくけじめ
安楽死神にもけじめつけられず
気短がすぐにけじめをつけたがる
けじめつけ小さい釘を打っておく
爆弾を抱いてけじめをつけにくる

ナアナアの風にけじめの灯が揺らぐ
飾りにもならず灰皿重ねられ
吸殻が喋ってくれた鑑識課

禁煙車の隅でエッセー読みふける

灰皿は煩悶と倦怠つづすとこ

灰皿は会議の苦悩つんである

ペランダで吸う屈辱に堪えてまで

灰皿にすべてを捨てて妥協する

一本の煙草を吸ってよくしゃべる

酒煙草やめれば俺もおしまいだ

浮雲になろうなろうと煙草の輪

吸殻に亡父が悲しいほど匂う

灰皿に父の迷いが落ちていく

一本のタバコ男の絵を飾る

煙草吸う女西陽を遮らず

遺産など残さぬつもり旅に出る

Jリーグほどに盛り上がりぬ野球

同居する踏ん切りつかぬ髪洗う

小虫でも頭も足もあつて逃げ

逆立ちで歩くと軽いことを言う

いずも川柳会

吉岡きみえ報

愛に泣き愛に喜ぶ安い母

ネクタイの安物夫に見破られ

甘く見た軽いカードに重いつけ

テレホンのカードがつかぬ人と人

ライバルにブラックカード伏せておく

ばあさんは福祉カードを抱いて寝る

飢えた子にさしかけてやる愛の傘

一屯
きよ子

和夫

寿美子

宗一

智久

淑子

春蘭

末一

吸江

和子

修六

花梢

悦子

美房

晋

みゐる

政代

昭子

美代子

篤子

リチエ

清子

明子

かおる

茂之介

茂美

酒を愛で女を愛しああ天寿
相愛の視野に景色は入らない
愛してる言葉大事にしています

つつましく愛を小出しにしています

愛は静かに心に白い花咲かす

本当の愛が知りたく旅に出る

戻ったぞー元氣な夫の旅みやげ

旅先の訛りで女酒をつぐ

宿帳に日本人と書いておく

旅の絵が好きでまた来た美美子の碑

味付けが魅力で決まる旅の宿

当てのない旅で無人の駅に降り

雨女雨が落ちつく旅にする

大切なものを探しに川の底

純行の旅に暮らしの顔がある

ふところと相談してみる旅心

ご成婚雨まで味方して晴れる

四面楚歌終着駅が雨となる

かけ違ふボタン穴から雨期となる

種蒔いて心の満ちる雨の音

山陰路雨が付録のように降る

花咲いて散って女の雨期になる

川柳塔みちのく

小寺

花巻報

呑むことに決まってゆつくり腰を据え

ゆつくりとさばく運転事故がない

ゆつくりとたつぷり元氣吸うエイズ

ボランティアだからゆつくり歩を合わせ

ゆつくりと後から効いてくる法話

嵐蝶

寿美
美磯

教

草丘

芙佐子

れいじ

房子

流石

満江

早苗

まこと

昌枝

多賀子

文子

ちかし

きみえ

白揚

義良

祥庵

克子

鳳笙

青湖

一光

順三

和香子

正徳

嵐蝶

ゆつくりと横目で通る事故現場
ゆつくりと歩けばミミズ干し上がる
ゆつくりとゆつくりと行く福祉バス

出陣のネプタへ雨が無情すぎ

紫陽花の未練がしきり雨を待ち

やさしさの雨に騙され闇の傘

ずぶ濡れの男にかさす赤い傘

スクランブル信号僕に降る雨だ

禁酒禁煙禁欲しろというカルテ

たっぷりと感謝料払った恋でした

たっぷりと飲んで帰って高軒

囁かれる臍になつぷり追肥する

川柳ねやがわ

高田

博泉報

てっぺんは知らねが下はよく見える

不正禁学ロボット役に甘んじる

一枚の切符貰ってから思案

忘れてた海の色を知る津波

うれしい雨七色の彩がつき

小さな嘘ついて別れを言う女

失恋にとてもし優しい青い海

てっぺんの会話を肩が凝って来る

ロボットの氣力がほしいやせ蛙

一枚のカルテを抱いて闇の中

海越えた恋で逢瀬もままならず

みちのくのリングの青さ紙に抱く

見知らない子らも一緒に地蔵盆

水平線金波に染めて日が落ちる

てっぺんで皆に任せている安堵

龍人

龍人

雅城

五楽庵

井蛙

生恵子

花匠

ツネ

善保

祥子

甲吉

黙人

たもつ

勇太郎

恵子

あやめ

菜月

欣史子

波留吉

英明

頂留子

洋

庸佑

一風

光子

高栄

ルイ子

ロボットのようなハートで困ります
一枚のシャツ干してあるワンルーム
はてしない海へ人間線を引く
想い出が一枚ずつにある魚拓
海の神留守で奥尻お気のどく
麦茶冷やしてあとは自分の時とする
てつぺんに妻を据えておく平和
コスモスがくすぐるようになる類
一枚の紙にけじめが確とある
小さな石踏んでロボット骨を折り
我は海の子海は怖いと書き残す
二階の灯消えるゆつくり茶を入れる
海はもつと心を広く持てと言ふ
梅雨晴れ間干場で話す両隣
もう一枚の舌をこの人持っている

倉吉川柳会

渡辺

善句報

熱が出るまでがなんばって遊ぶ
絆断ち切る一枚の紙がある
遊ぶこと知らぬおやじのなつば服
実印を押せば紙でも重くなる
大山は大仏うみなりはお経
夏の宵紙人形が羽化をする
正直な姿見はもう見たくない
仏さまにわたしたちだけの頼みごと
この本が生きた姿勢を変えさせた
カモメール再生紙だと書いてある
庭に咲く一番花で仏を飾る
紙おむつしたくはないが止むを得ず

かすみ 黎の助 時弘 一芳 君子 吉之助 亜也子 雅文 英千子 冬葉 度 文秋 紫香 磔 完・司 とみお 秋女 独歩 石花菜 和枝 よしえ 螢 サカエ かつみ ゆり子 碧水

この人の野心まんまんのど仏
二合の飯仏と分けて三日食う
仏壇の前に座って思ふこと
一枚の紙に思いを書きつづる
パンダの姿みたら一茶は何と詠む

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

冷蔵庫でおいしい西瓜が待っている
鈍行の母にハンカチ振ってみる
ハンカチで欠伸を包む通夜の席
ハンカチの紅が火傷を暗示する
桐下駄のぬくみ忘れた足の裏
白鳥の足になり切るバレーナ
わたくしを知り尽くしてる土ふます
ふらついた足に小猫がじやれて来る
足が出た家計あんだの使いすぎ
好きな人住んでる方へ足が行く
足二本ラッシュアワーに浮いている
足音を待ってた頃が花でした
足も足も出ないが全力投球だけはする
鐘の音は弥陀の足音だと思ふ
クレヨンで海で溺れる父の親父
静けさが妙に気になる父の海
絵日記の海にあふれている個性
八月の海から届く鎮魂歌
忘却の絆沈めて果てぬ海
潮さいにしりりが少しづつ解ける
父の眼に確かな海の彩がある
被災地の海奥尻に雨が降る

御前 雄々 京子 寿満湖 苦句 すすみ 真柳 澄子 澄子 文夫 正子 年代 尚利 勇次郎 薫 夢子 フク子 求芽 武庫坊 紫香 諷云児 英子 佳秋 福一 行隆 正一 歌子

斬られ役邪魔にならなとこで死に
ロボットが会社経営指図する
お風呂屋さんあつて人情温い町
清水崑の河童なつかし冷用酒
蛇の目傘干して京都も梅雨が明け
フルコースマナーばかりに気をとられ
卒寿も昼寝私も昼寝平和だな
散髪を一日延ばしに回復期

堺川柳会

河内

月子報

キリストも釈迦も頼らぬ父の腕
終着駅が見える一花咲かせよう
屋台から無名の男吠えている
無駄なもの何一つ無い姑の智慧
無駄だとは解ついても百度石
信号は赤だが臨機応変に
シャンデリアの真下真つ赤な嘘と嘘
辞令一枚また浮草の舟が着く
無駄口を叩きたくない正念場
ごめんねが言えず延長戦になる
たつた一つの駅はあなと決めている
ポストには入れぬ手紙を書きつづけ
無駄口を叩き合うほど気を許す
本心は手紙にしよう発車ベル
カタカナのヒントの海に溺れそう
忠実に吠えているのに叱られる
無駄でないと怠け心に言い聞かせ
ブランコが揺れてヒントが掴めない
臆病な犬で見境なく吠える

キク子 正治 正坊 萬的 鹿太 園歩 杜的 芳子 桂子 寿恵子 妻子 花梢 凡子 文時 勝晴 一二三 二南 美子 森子 泰子 道胤 春蘭 摩耶 紀美女 頂留子 寿美 美代子

躓いた石がヒントをくれました
吠えるにも風の方角みきわめる
かあさんが一日吠える夏休み
正座して父の手紙を読み直す
いじわるなヒント今夜は眠れない
弟と別れた駅に来てしまふ
傷なめて吠える力を溜めている
無駄がない代りストレス溜めている
恋人が来ると必ず吠える犬
一吠えをしたらすすきりするだろう
あたたかい大きな文字の手紙待つ

若葉の会

宮崎シマ子報

待ち呆け刻む時計のそつけなさ
蟬とる子蟬の時計を知らぬだろ
辛せを今も刻んでいる時計
感情を持たぬ時計に救われる
砂時計ゆっくり落ちる日曜日
災害で止まったままの時計みる
島ひとつ見え隠れする旅さなか
島遍路煩惱捨てる杖を引く
明るくて素直な嫁は島育ち
無縁仏いっそ淋しい盆供養
教会も祖先の話をしるお盆
盂蘭盆会居士紋灯へ来て遊び
盆明けてもの二人と蟬の声
よう笑う娘三人よく食べる
海の神信じて童話の中にいる
値の高い順に金魚が浮いてくる

昭子 東雲 かりん 半雪 小楓 夏子 星子 文子 満州 光子 香住 洋 能吉 留吉 弘直 シマ子 千枝子 田実子 正晴 宣司 とよ子 晚子 欣史子 清芳

富柳会

池

森子報

泣き砂を歩く女のしのぶ恋
良心も少し揺れてる千鳥足
フルムーン夕陽に揺れる成田発
チャンバラをしても急所ははずす妻
六つ止り一つの癖は母ゆすり
痩せ細る涙で泣いてる五色砂
砂の粒一つ一つにある主張
砂の塔仮説の中で背を伸ばす
愛の花やさしい風に揺れている
癖のある字が枯れている見舞状
若いのに胡瓜は腰を曲げる癖
チャンバラを見れば目の色変り出し
砂浜に雨は音なく別れの九月
今斬られ二度目は川へ落ちる役
チャンバラのリズムは矢張り三昧太鼓
雲仙のマグマが笑う砂防堰
加速度がついて崩れる砂の城
一癖が男をあげる武器にする
好きだから彼女の癖をつたえる
チャンバラをしたとは美人気が付かず
砂丘ゆく今日旅人となる歩幅
熱砂と戯れた波もやがて母
宗一 志洋 三夫 登子 絹子 昭子 美代子 花子 昭水 トシエ 二三子 智久 文次 透太 維久子 美房 柳太 花梢 森子 英一 東雲 希久子

翠洋会

渡部さと美報

晩学の汗にやさしい広辞苑
汗のシャツ思い残しのない仕事
別の名は鬼でもやはりよい刑事
核家族 鬼は時々やってくる
うちの鬼 友達いっぱいいる不思議
侵略とどう違うのか鬼退治
読経すみタイミンクよく出すお布施
たおやかに尼僧お布施を裏返し
穴や小石よく見つけます老いの足
穴場と尋ねて来ればラッシュアワー
追伸に男がはまる落とし穴
先まわりして落とし穴うめている
青信号続くそろそろ落とし穴
ポケットに穴あいてからつきが落ち
もう少し痩せろとベルト穴が言う
同じ穴のむじな轟く永田町
れんこんの穴も目方で買わされる
楓 久峰 拓生 照子 登志子 正坊 光子 ひろ子 綾子 淑子 佳秋 蛙 みつ子 正雄 宣司 恭昌 鬼遊

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽白石春嶺・宮尾みのり氏の同人推薦を承認
▽平成五年度路郎賞・川柳塔賞を決定
▽会計部から平成四年度決算の概略を報告
▽諷川児氏から菜・薫風句碑建立除幕式・記念川柳大会について報告
▽川柳塔碑の合祀法要について報告 お盆では遺族の参列も困難であるため、来年から川柳塔碑除幕日(十一月十二日)に変更することに決定

本社 九月句会

九月六日(月)午後五時半

メンズファッションセンター

戦後最大級という十三号台風は、幸い大阪付近に被害はなかったが、他の地方の同人・誌友の身辺が案じられる、

「おはなし」は、河内天笑氏。氏が目指しているのは、ユーモアのある、例えば須崎豆秋氏のように、やさしい言葉で深い内容を持った句だという。目標とする作家からは、句のころ、まとめ方、発音、字づらのバランス、リズムの取り方を真似、くれぐれも本歌どりはせぬようにと強調。人の頭にくっついて離れない句が、すなわち路郎師のいう「命ある句」だと解釈する。他にも先輩たちの句を沢山あげての話には、説得力があり、聞く者に作句意欲が湧いてくる「おはなし」であった。

月間賞は吉村一風氏(八尾市)に輝く。

(司会—東雲)(受付—智子・冬葉)
(記録—ダン吉・みつ子)(清記—楓葉)

席題「敏感」 池 森子選

敏感だもつ鈴虫が鳴いてくれ
刑事十年 敏感な耳持つている
北浜の風 敏感に明日を読む
敏感な秘書にも困る社長室
敏感と敏感同士 気が疲れ
バスボート警察大の鼻だししか
コンタクトレンズを嫌うわたしの眼
ぜんそくの息子に台風が来るらしい
恋は敏感 人の心がすぐ読める
花は敏感 笑ったりしおれたり
敏感なところに触れて社をクビに
敏感な目にする障子張り替える
敏感な母に気疲れしてしまう
花の香に敏感になる恋してる
敏感に伝わってくる花の息
敏感な火種を女もてあます
敏感な神経 夜を眠らせぬ
敏感に反応してる袖の下
敏感なキーに一日遊ばれる
邪魔になるらしい動作ですぐ悟り
世を捨てた男の耳がよく動く
敏感な女 身内を敵にする
敏感に四季折々の風邪を引く
目にをはに敏感すぎてまだ独り
目の動きとらえてすぐに幕を引く
敏感な女が消えた長い橋

ダン吉 薔児 寿美 憲太郎 ルイ子 勝美 豊太 文 月子 みつ子 洋 公一 ただし 諷云児 天笑 狸村 稚代 房子 歌子 薫 千秀 雅文 英一 楓葉 満津子 メ女

敏感になってひとりで森へくる
敏感な指の先から老いて来る
すぐ怒る地雷のような敏感さ
敏感な動作 野良猫嫌い
敏感に隙を突かれて縄のれん
佳
敏感でとっても好きな赤いバラ
顔色へ敏感な母 意気を盛る
敏感なわたしを笑う森の風
虫の音に拘りもなく勘が冴え
敏感な情けを男読み違え
人
敏感に言葉をさぐる花の間
地
地球上のたつたひとりに敏感だ
天
善悪の風を見分けるかたつむり
張りつめた空気がジョークで切り抜ける
軸
兼題「のびのび」 吉村一風選

鬼遊 諷云児 美房 笛生 たもつ 岳人 愛論 岳人 冬葉 太茂津 楓葉 いわゑ 鬼遊 森子 花梢 天弘 照子 里兆 (新) 正子 (松) 千秀 紫香

のびのびとさせてやりたい塾通いのびのびになった返事はワープロで家よりも塾がのびのびすると言うのびのびになると鮮度が落ちますよのびのびと寝てたら頭またがれる素振りではのびのび振っていたクラブ雑学をかじりのびのび今日を生きのびのびと鬼と話そうしまい風呂金に縁無いがのびのび生きてますのびのびと老後を過すための汗かあちゃん留守でのびのび寝ていますのびのびの顔が昼寝の中にある告白をしてのびのびと雲を追うのびのびと婦唱夫随の座にあそぶ物忘れ続くのびのび見えるだけのびのびになつて不義理重くなる婚約がのびのびになる災害地のびのびとして夫に馴らされるのびのびとやれと新人こき使いのびのびのびのび飛んで露天風呂のびのびが続くストレス溜りだし爪先でのびのび聞いているワルツのびのびになつていた娘のいい話肩書がとれてのびのびひとり酒延びのびの出世払いに活を入れ悠々自適たまには風邪もひくけれど案外にのびのびしてる子沢山妻だけはのびのび出来ぬ夏休みのびのびと育ち相手がまだいい

達子 花梢 三男 森子 しげお 洋 女 だし 風云児 志洋 美代子 雅文 典子 吐来 ただし 雀踊子 狸村 白溪子 美房 美津留 いわゑ 度 英一 憲太郎 隆 笛生 武庫坊 志洋 千歩

人の 地の 天 軸 兼題「改める」 西口 いわゑ 選 改めてわたしの明日を考える 若き花散って校則改める 改めるのはお前からアンタから 改名をしたのにツギが戻らない よう煙草やめたと妻の五重まる 改めて楷書の歌に聞き惚れる 改めて夫婦茶碗を見る夕餉 改めて欲しいら抜き日本語 改めてよかった軽い傷で済み 改めて見たことがない妻の顔 ときどきは改めて見る妻の顔 雲行きを読んで態度を改める 女房をオイと呼ぶのはやめにする 国会百年さん付けで呼ぶ様変わり 改めて言葉すつしり胃にたまる 改めて無理を頼みに来た土産 禁酒禁煙 改める夜の誓い酒 改まる妻の正座に身構える 真実を見たくてメガネ替えてみる

仙吉 小路 満津子 一風 文子 高栄 章久 正坊 洋 ただし 一風 武庫坊 小路 たず子 花梢 花茂津 露児 良知 愛論 白溪子 柳弘 昭子 吸江

受胎告知 男の膝が改まる 夜型をすっぱり止めて早寝する 改める誓いは何時も明日から 改めてみたら妻にも艶ぼくろ 改めるはずが今夜も千鳥足 良いことを知らせる行を改める 改めて紹介をされ照れている あの人が来ると雰囲気改まる ノルマだけこなす態度を改める 改めるつもりはないが帽子脱ぐ 改めて出直す傷が深すぎる 改めて改め生きる道探る 改めることが多くてそのまんま 一線を引くと言葉も改まり 改めてお返事すると逃げられる 自立して夫ときどきスーバーへ 菊の軸かけて床の間改まる 黄昏てなお改める事ばかり 人の 改めて亡母を見直す冬の月 悔い改めてから面白くない男 改める粹な助言をありがとう 軸 改めて自分を知ると怖くなる 兼題「早い」 河内 月子 選 ストレスを溜め早いこと惚けはった 天笑

歌子 月子 章久 典子 房子 しげお 美智子 三男 美津留 風云児 悟郎 岳人 吸江 三男 千歩 度 みつ子 森子 楓楽 雅文 いわゑ

停滞を横目にスイスイとベダル
 早口に私の脳波ショートする
 出勤は遅いが帰るのは早い
 早とちり嬉喜びをしてみよう
 救急車が来るまでの処置役にたち
 早い話 頭下げれば済む話
 無理をして早く帰れば妻は留守
 朝顔を咲くと早起き苦にならぬ
 母の膝ひと足早く秋を知る
 早い話 私肴にされている
 早い者勝ちのチラシに騙される
 時計には負けない母の朝がある
 スローモーションのくせに女性にや手が早い
 寝つきの早い男を憎む蕎麦枕
 早うからつめる老母の旅支度
 早口についていけない老いの耳
 西瓜なら誰にも負けぬ僕の口
 ねぼすけがはやばや起きている
 パーゲンであきれ妻の手の早さ
 よその子の育ちが早いランドセル
 決断は早いが何処か抜けている
 ある予感 早々と手は打っている
 待たされた割には早い診察
 女に手の早いアンはまだ負けぬ
 早耳のオバタリアンがいる団地
 祝儀出る仕事と聞けば早いこと
 台風の前さ負けぬ妻の勘
 首位の座をあきらめるのはまだ早い
 長距離へ母早口になる電話

かすみ 欣史子 英子 房子 文秋 三男 良知 楓楽 智子 シマ子 公一 女 勝晴 たず子 洋 勝美 美津留 天笑 志洋 鬼遊 諷云児 花梢 紫香 恭昌 萬的 トメ子 美津留 二南 冬葉

早合点 金がいるとは知らなんだ
 佳
 早飯の癖がいまだになおらない
 休日のように早起きして欲しい
 回転の早さときどきどじを踏む
 白旗を早目に振って丸く居る
 良のお酒あると言ったら飛んでくる
 人
 予定より早く帰って叱られる
 地
 釣りに行く朝はさっさと起きてくる
 天
 大切な一日だから早く起き
 軸
 母ちゃんの料理は早いのが自慢
 兼題「相場」 吐田公一選
 だいたい相場 与野党話つき
 この辺が相場だ見合い妥協する
 魚屋の相場で喋る釣天狗
 相場割れという商いがビルを建て
 パブルから地獄極楽見た相場
 あんな娘が株の話をする時勢
 慰謝料の相場を聞いてからの鬱
 長雨にキヤベツの相場まで狂う
 係長止りが俺の相場まし
 両の手が巧みに動く兜町
 通り相場を姑にたずねる熨斗袋
 清貧の思想に縁のない相場

萬的 落児 満州 吐来 楓楽 英子 いわゑ 重人 智子 月子 拔智 昭子 正子 吐来 道胤 道胤 落児 雀踊子 文秋 諷云児 たず子 鬼遊

迷惑通り上がる相場が怖くなる
 切れ者と通り相場で友がない
 手頃という相場もあって縁きまる
 円高ペラランじつくり成田発
 朝市の相場 夕餉の膳にのる
 相場欄 見ながらかき込む朝の飯
 出たとこ勝負と妻が言う相場
 うどん屋でお布施の相場聞いてくる
 相場には手は出さまいと亡父の声
 誘拐は割に合合わないのが相場
 相場より安くしている小商い
 保険やに命の相場聞かされる
 妥協する相場が狂う自尊心
 友が居て仲間相場にしてくれる
 亡母からの形見 相場はつけられぬ
 相場とは怖いがボロいもんらしい
 夢よう一度 株券抱えている
 細々と蓄めて相場でする火傷
 相場師も狂っていると言う世相
 子供までねぎる相場しっている
 住
 相場師の目はどん底も舐めている
 相場どうあろうと株に手を出さず
 相場低迷 毛細血管が透ける
 小遣いの相場 息子に聞かされる
 すぐバレーる嘘で男の相場下げ
 人
 惚けたのは相場から足引いてから
 地

庸佑 千秀 里兆 達子 美代子 吸江 ゲン吉 藤児 庸佑 英一 保州 満津子 ただし 道胤 典子 章久 花梢 花梢 ダン吉 哲夫 吐来 白漢子 森子 天笑 正坊 天笑

神代から女は強いのが相場

天

相場師のくわえ煙草に火が点かぬ

軸

相場師の果ていつの世も天と地と

公一

兼題「力」

橋高薫風選

なにより力 愛するひとがいる

甲子園チームの力出し切れず

新大臣 肩の力を抜き給え

力づくでは結ばれぬ赤い糸

あり余る力ななめ走り出す

酒の力で口説かれたつつまらない

どんぐりの力は空を切るばかり

パソコンは上手いが力ない息子

均等でも力仕事は厭でっせ

忍耐力テストのような妻の愚痴

夕焼けを見ると力が湧いてくる

今日手術 力をくれた千羽鶴

薬石の効でこの世に生かされる

傍に居るだけで力と言ってくれ

学力をつけた上にも受験術

目の高さ変えてすんなり出る力

腕力がありそうなので黙っとく

互角ならあとは気力で勝負する

横綱も苦手の力意識する

鬼の面 墨絵の中にある力
杭を打つ力 男の貌になる
底力どこかに秘めた妻と居る

稚代

文子

公一

重人

勝晴

志洋

文時

武庫坊

歌子

楓楽

月子

満津子

洋

螢

典子

英一

三男

満州

達子

いわゑ

正坊

文秋

岳人

美津留

神様のお力かりる片思い

気力とや鏡の奥に炎が走る

腕相模ほんとに負けたお父さん

母背負う力はいつも持っている

男勝りで小さな力瘤がある

一言で決着がつく力の差

切れ味のいいのは力お金さえ

座るだけで力を見せる人も居る

力貸す話へ呑み屋梯子する

力抜くこと覚えたり喜寿達者

無重力になってみたいと思つ

税務署で日頃の力出しきれず

産院で土用うなぎを出してくれ

怪しげな金が力になる政治

決戦に力むころを茶で鎮め

実力を過信ストンと闇になる

朝顔が毎日咲いている力

金の力借りるどこか漏れてくる

いつまでも力頂く師の手紙

切味のいいのは力お金さえ

座るだけで力を見せる人も居る

力貸す話へ呑み屋梯子する

力抜くこと覚えたり喜寿達者

無重力になってみたいと思つ

税務署で日頃の力出しきれず

産院で土用うなぎを出してくれ

怪しげな金が力になる政治

決戦に力むころを茶で鎮め

かすみ

みつ子

美智子

美智子

天弘

天笑

たもつ

欣史子

柳弘

良知

典子

かすみ

信義

狸村

森子

智子

一風

薫風

大阪文化祭川柳大会

とき 11月6日(土) 午前11時開場

ところ 大阪府中小企業文化会館

宿題と選者(各題2句)

「モラル」

「蓋(ふた)」

「生きる」

「時事雑詠」

「淡い(あわい)」

「涙」

席題 当日2題発表

会費 1000円(作品集代を含む)

西宮市民川柳大会

とき 10月24日(日) 正午受付

ところ 西宮市立勤労会館8号室

会費 700円(作品集郵送)

宿題と選者(2句)「ときめき」福島直球

「裁く」和田光代「瀬戸際」島本 泰

「もめる」竹内良伸「謎」赤松 隆男

「夫婦」黒川紫香「酒」小松原爽介

投句 10月10日締切(62円切手5枚)

川柳の心伝えよ句碑二つ

西尾 栞・橘高薫風句碑除幕式

白鳥への旅

藤井 正雄

八月二十一日朝、新大阪駅団体待合室の混雑の中を川柳塔社貸切観光バス二台は、予定どおり午前九時出発、深日港に向かう。途中渋滞のため、フェリーは一時間おくれの便に乗船、快適な船旅約一時間で淡路島津名港に着く。鳴門大橋での大観潮の景観は、バスを徐行してもらい、大きな渦潮に一同感嘆する。車はさらに徳島路から讃岐に入り、香川県白鳥町中央公園に着き、地方参加や地元の方々と合流する。公園内体育館前の小高い丘に理事長の句碑が建立されており、除幕の神事が厳粛に挙行された。

「島一つ買って暮らせば涼しから」句意

そのままに建立されている句碑の背景は、瀬戸内海の家を望み、大小の島々の彼方に小豆島も遠望できる。なお、この公園内の体育館は新築で、今秋の「東四国国体」のバレーボール会場に予定されている。

記念撮影後、主幹の句碑が建立されている白鳥温泉に向かう。私たちの宿泊場所である福祉センター白鳥温泉前の黒川のほとりに、「温泉や坐りらかむに寝る羅漢」句が建立されており、主幹・理事長ともに同形の大きな立派な句碑で、先程と同じ神事が執り行われた。

なお、句碑除幕を祝って多くの祝吟・祝電が寄せられたが、次の二句が印象的だった。

句碑二つ路郎先生もお喜び

東野 太八

川柳の心伝えよ句碑二つ

田辺 聖子

除幕式の後、同センターで総数百五十余名の大祝賀会となり、地元の踊りにカラオケも

出て実に盛大な宴であった。午後九時頃、散会となり、ゆっくり湯につかり、三々五々各部屋に分かれ、それぞれ賑やかな談笑が続いていた。

翌二十二日は、午前九時から白鳥公民館で記念句会が開催された。午後帰路にいたが、観光コースよろしく、屋島・瀬戸大橋と回り、予定どおり午後八時半、新大阪駅に着いて解散となったが、車中では「手袋」の課題で句会が開かれ、次の句が天位に選ばれた。

孝行の軍手 毎日洗う幸

天正 千梢

今回は、地元の建立委員会や、おっぱこ吟社の皆様と川柳塔社の世話役の方々のお陰で、実に楽しい旅行となり、参加してほんとうに良かったと思う。ほんとうに充実した二日間であった。



感激した除幕

川崎 ひかり

ふるさと創生事業の一つとして町の助成を受け、中央公園と黒川温泉に葉・薫風両先生の句碑が建立され、除幕式典が地元の久野町長、安部町議会議長、富田教育長はじめ川柳塔社・おっぱこ吟社会員ら百五十余人の参加で挙行されました。

白鳥神社猪熊宮司による厳かな神事の後、前町長の孫田中康一君とおっぱこ吟社の田中なみ子さんの手で幕が引かれると、遠く瀬戸の島々を背景に薫風先生の句碑が夏の陽光に輝き、あたかも川柳塔社の前途を照らしてい



るかのようでした。

ついで会場を移動して、阿讃の山々を背にカジカ鳴くお湯の里、黒川温泉の地に新しく架けられたホテル橋のたもとに、葉先生の句碑が涼風の中に姿を現わした時の感激は終生、忘れることができないと思います。

祝賀会も大盛会で、歌あり踊りあり、楽しい一時を過ごしました。裏話を少し書きますと、祝賀会終了後、おっぱこ吟社の会員はすぐ白鳥公民館に集まって句会の会場準備にとりかかり、翌二十二日も朝六時から集合して準備し、ようやく九時前に完了することができました。幸い昨年の経験が役立ち、思ったよりスムーズに行きましたが、何と申しましても少人数のことゆえ、何かと不便をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

なお、句会における各題三才は次のとおりです。(人・地・天の順)

「川」

時に魔女時に淑女で渡る川
大臣の出た川下へ群れる蝶
花吹雪 川一杯の絵巻物

「松」

松の芯 姑小姑みなやさし
呼掛けは二の松あたり足拍子
松枯れて政治貧しくなるばかり

「浜」

余所者に朝の浜辺は面白い
源平のふるい話をする浜だ
今日も又あの日の船を待つ浜辺

ご参加に感謝

木村 明人

このたび西尾・橋高両先生の句碑除幕式に遠路多数、ご臨席下さいまして誠にありがとうございました。異常気象で毎日が雨天でしたが、式典当日だけ好天に恵まれました。これも両先生のご人徳によるものと存じます。

西日本全体から百五十余名ものご参加、両先生の交流の広さに驚き入りました。また、本社からは首脳陣挙げてのご出席、遠くは佐賀県唐津、門司、鳥取、広島、岡山や近畿一円、四国四県からのご参加で、祝宴会場が手狭で、不便をおかけして申し訳ございませんでした。明るる日の記念句会も盛会であったことを会員一同、喜んでおります。山合いの寒村でございますが、機会をおつくりいただき、時々、両先生の句碑をお訪ねくださいますよう、切にお願い申し上げます。

黒川の目玉にしよう主幹句碑 木村 明人
オリブの香りも届く薫風碑 同

柳界展望

編集部

勝又明城氏に決定した。また、同年度の最優秀作品賞は次のとおり。

ぞろぞろと降りても一人旅の顔 保田 二郎

★倉吉市制40周年・農業博打吹川柳大会が8月10日、

★広島川柳会（石原伯峯会長）の川柳『ひろしま』は8月号で誌齢500号を迎えた。また、番傘加越能川柳社の川柳『白鳥』も8月号で300号を迎えた。

★第24回川上三太郎賞がこのほど決定した。本賞は宮川蓮子さん、準賞は塩田悦子・進藤一車・高橋葉月氏。

★第20回かもししか賞が矢田大雪氏に決定した。準賞は紫崎昭雄氏、特別賞は太西うめさん。また、第14回柳紅賞は高田寄生木氏の次の句に決定した。

人形の眉の辺りの火の句

★川柳宮城野社の平成4年度宮城野賞の同人の部は石川みつ子さん、会員の部は

★第17回茗人賞が決まり、8月21日付「日本海新聞」に発表された。

（茗人賞）

夜が明けて拾った大の顔をみる 土橋みどり

（準賞）

手打ち蕎麦 昔話がしたくなる 津村千恵子

果たし状ユーモア添えて出してみる 山岡 久枝

★第17回茗人忌川柳大会は8月29日、鳥取市のホテル・ニューいなかで開かれた

が、各題天位句次のとおり
古希祝う乾杯 命うすくなる 岸本 静生

他人の家の悲しい墨をすっている 原 章峰
悠久の流れに一寸法師なら 白根 ふみ

お互いに慰問袋が笑い合おう 中原 諷人
穏やかに聞いて大きくなつた耳 板尾 岳人

新同人紹介

白石 春嶺

— 薫風・紫香・宵明推薦 —

宮尾 みのり

— 薫風・紫香・宵明推薦 —

ことだ 矢内寿恵子
子もり唄 母のうちのわの風になる 森田 華子

★NHK学園生涯学習フェスティバル川柳中部大会が8月22日、石川県根上町社会福祉センターで開かれた

が、本社同人の河内月子さんが席題「喜ぶ」で石川県知事賞を獲得した。

誕生日 嫁がおぼえてくれている 河内 月子

★平安建都1200年協賛都大路創立15周年記念川柳大会は8月29日、比叡山ホ

芳加津

★第8回国民文化祭いわて

93文芸大会川柳大会は10月

10日、花巻温泉・ホテル千

秋閣で入選句を発表する。

★熊本県文化懇話会は8月25日、芸術振興に功績のあった80歳以上の芸術功労者を発表した。川柳部門から本社同人の永田俊子さんが選ばれた。顕彰式は9月17日、ホテルキャッスルでの芸術祭で行われる。

★姫路文学館・はりま文芸祭実行委員会では川柳大会の作品を募集している。課題を明記して主権者へ。

題と選者は、弱点●藤本静香子▽疼く●石部明▽炎●森中恵美子。10月31日までに400字詰原稿用紙に各題2句と住所・氏名・年齢・性別・電話と大会(平成6年1月30日・文学館)への出欠を明記して主権者へ。

★川柳グループ・ほむら21は次の規定で第1回竹内明日生賞を募集している。作品

川柳塔碑合祀を挙行

「川柳塔」碑の合祀法要が8月16日、高野山奥の院大霊園の碑前で挙行された。参加者は故松永すすむ氏夫人の恵子さん、故植山武助氏夫人のハル子さん、黒川紫香副主幹はじめ同人・誌友8名で、高井良行大霊園園長の読経により厳粛に行われた。今回の合祀者は、山本

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

品10句(テーマ自由)をA5判原稿用紙に書き、別紙に住所・氏名・年齢を記入し、10月31日までに〒703岡山市祇園地先・旭川荘電ノ口寮2-13・ほむら21編集部河原敏明へ。参加料は500円で寺尾俊平ほか4氏の選考により入選1編に10万円、佳作2編に1万円と記念品を贈る。

★生駒番傘創立20周年・桑原竹堂句集『菜』発刊記念川柳大会は10月24日午前10時から生駒山宝山寺和光殿で開く。宿題は「菜」(事前投句)のほか、二十もえる・微笑・虹・未来・夢・変わる・信仰(各2句)会費2000円(句集・軽食・記念品・発表誌呈)

★川柳みどり会は11月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社・朝日ホールで第2回セリユウトークを開く。第1部のトークは渡辺

▽出版△

■小川ひろし川柳句集『風と語りた』(川柳噴煙吟社刊・B6判98頁)吉岡亀城・谷川黒仙序文。風にんげんに疲れて語りた。

▽志△

■山海友照・松永恵子・富山ルイ子の3氏から川柳塔碑基金として金一封を拝受しました。また、松永すすむ・植山武助氏ご遺族様から合祀法要にあたってご寄付をいただきました。

第20回 堺まつり協賛 堺市民川柳大会

と き 10月17日(日) 午前11時開場

ところ 堺勤労者総合福祉センター
(阪和線堺市駅西出口北西100m)

兼題と選者(各題2句 午後1時締切)

「打 つ」 河内 天笑選
「火 」 重谷 峰菜選
「影 」 西山 幸選
「蓋 」 土田 欣之選
「甘 い」 恒弘 衛山選
「器 」 墨 作二郎選
「薄 い」 鳥本 泰選
「道具」 梶川雄次郎選

賞 各題秀句賞

会 費 2000円(昼食・粗品・作品集)

主 催
堺 川 柳 会

第43回 岸和田市文化祭 岸和田市民川柳大会

と き 10月11日(月) 正午開場

ところ 岸和田市市民会館地下会議室

席 題 (当日発表) 福浦 勝晴選

兼 題 「優しい」 河内 月子選
「空 港」 深日白光子選
「口 紅」 小出 智子選
「雑 音」 梶川勇次郎選
「報 道」 野村太茂津選
「熱 意」 橘高 薫風選

※兼・席題とも2句 締切午後2時

会 費 1500円(植山武助遺句集・軽食・
大会誌呈)

賞 文化祭賞・文化祭奨励賞・文
化協会賞・操子賞・きしせん賞

主 催
岸 和 田 川 柳 会

文化祭参加 吹田市民川柳大会

と き 10月24日(日) 午前11時半開場

ところ 吹田市文化会館メイシアター
3階(阪急吹田駅前)

宿 題 「美 人」 西川 景子選
「調 子」 松本初太郎選
「欠 伸」 川島諷云児選
「お 前」 友田茶の子選
「意 地」 高杉 鬼遊選
「なんで」 田頭 良子選

席 題 (当日発表) 竹森 雀舎選

※各題2句 出句締切午後1時

会 費 1000円

賞 秀吟賞・参加賞呈(投句拝辞)

懇親会 3500円(句会終了後)

主 催 吹田市教育委員会
文化団体協議会
吹 田 川 柳 会

第27回 文化祭参加 東大阪市民川柳大会

と き 10月17日(日) 正午開場

ところ 東大阪市立社会教育センター
(近鉄布施駅北へ5分)

おはなし 森中恵美子氏

宿 題 (各題2句・出句締切午後2時)

「粒 」 玉置 重人選
「やんわり」 坂本 晴美選
「妖 」 高橋 古啓選
「色 」 久保田寿界選
「追 う」 中林 酔虎選
「親 心」 金井 文秋選
「実 力」 片岡つとむ選

席 題 (当日発表) 藤原 一志選

※各題秀吟賞・賞状・楯・発表誌呈

会 費 1000円

主 催
東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

富田林市民川柳大会

と き 11月7日(日) 正午開場
と ころ 富田林市中央公民館2階講堂
 (近鉄富田林駅下車 西へ100m)
宿 題 「火」 田中 透太選
 「水」 西口いゑゑ選
 「土」 大路 美幸選
 「木」 小出 智子選
 「金」 黒川 紫香選
 「花」 池 森子選
席 題 (当日1題) 吉岡 美房選
 ※各題2句 出句締切午後1時半
会 費 500円(軽食・記念品・発表誌呈)
懇親宴 3000円(当日受付)
主催 富田林市市民川柳会
後援 富田林市教育委員会

枚方市文化祭協賛 第3回枚方市民川柳大会

と き 10月31日(日) 午後1時開場
と ころ 枚方市立枚方公園
 青少年センター3F
 (京阪枚方公園駅下車 西へ徒歩3分)
お 話 番傘川柳本社主幹 磯野いさむ
宿 題 「手帳」 住田英比古選
 「静か」 大村美千子選
 「辻」 榎本 信治選
 「白」 波部 白洋選
 「時代」 田中 正坊選
 「払う」 玉野可川人選
 「くちびる」 森中恵美子選
 ※各題2句 出句締切午後2時
参加費 500円(発表誌呈)
賞 市長賞・市教育委員会賞・市
 議会議長賞ほか
主催 枚方くらわんか川柳会

第35回 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場
と ころ 豊中市立中央公民館集会室
 (阪急宝塚線曽根駅東200m)
会 費 1000円(記念品・発表誌呈)
おはなし 番傘川柳本社 志水浩一郎氏
席 題 (当日発表) 田中喜代志選
宿 題 「水」 橘高 薫風選
 「皿」 丹波三千子選
 「青」 高杉 鬼遊選
 「紙」 中尾 飛鳥選
 「命」 中尾 藻介選
 「音」 波部 白洋選
 「姿」 山本 翠公選
締 切 午後1時(各題2句)
賞 豊中市長賞ほか各題に賞進呈
主催 豊中川柳会

第40回 八尾市民文化祭川柳大会

と き 11月14日(日) 正午開場
と ころ 八尾文化会館4F第1会議室
 (ブリズムホール)(近鉄八尾
 駅下車 西武デパート東隣)
宿 題 「許す」 久保田半蔵門選
 「命」 河内天笑選
 「長い」 奥山晴生選
 「面」 大路 美幸選
 「平凡」 平山 繁夫選
 「酒」 田中 好啓選
 「主人」 西尾 栞選
締 切 午後1時(各題2句提出)
会 費 2000円(軽食・作品集・鉢植花)
主催 八尾市・八尾市教育委員会
 八尾市文化祭実行委員会
後援 八尾市民川柳会
 川柳クラブ「わたの花」

城北川柳会

吐 田 公 一

城北川柳会の前身は、城北明老川柳会として、昭和三十六年に当時、大阪市交通局の勤務医であられた北川春巢氏（川柳雑誌社副主幹）が、在住地の太宮町で地元の老人会の方々を対象として発足した会で、それから早や三十二年、川柳会としても名門の一つに数えられるのではないかと思います。

春巢氏の後、聞くところによりますと、この城北川柳会が後継者難で中断されたようでした。それを引き継ぎ再開されたのが川口弘生氏であったということです。弘生氏は常々、「川柳塔の常任理事とはいえ、始終欠席がちで、せめても各地の柳会へ投句することによって、その償いをしたいと思っている」と話しておられました。はるか後輩の私にとっては、今でも耳痛い言葉として心底に残っております。

城北はいつも十七、八人（投句者を除く）ほどの少人数の句会で、メンバーも殆ど固定していて、家族的なムードのある会です。だが少数とは言え、その中味は錚々たる連中ばかりで、神夏磯典子・本間満津子・町田達子・井上白峰・板東倫子・岡田ふみ・松本ただし・今西静子・叶岡史風・上田柳影等々、名を挙げるだけで紙面がはみでるほどで、毎句会の大位五句の批評も、時には辛辣なものがあり、



楽しかった吟行

大いに切磋琢磨しております。

ただ城北は他の句会とタイプが異なっており、毎月五日を兼題の締切日として、兼題三題分を投句によって選句し、毎月第三土曜日を句会日として、当日は兼題の披露と席題二題の選句、兼席題の天の句の投票による月間賞の決定という運営です。

当会では、月間賞を受賞なさった方には楯をお贈りし、年間賞トロフィーにその名をとおめ、年間最多賞の方には、そのトロフィーをお持ち帰りいただくシステムになっております。

また、春秋には会員の相互の親睦を深めるため、吟行を行うことになっております。この時こそ、たっぷりとした時間にそれぞれの人生を、川柳観を語り合いながら時の経つのも忘れて、さながら子供に還ったような騒ぎです。

城北川柳会は、その折々の会員の自選句を載せた句集『城北川柳』が平成元年十月で第四集となり、遅まきながら城北川柳会創立三十周年記念句集として第五集を編纂しているところです。これもひとえに春巢、弘生両大先輩のご加護の賜と思っている次第です。こんな城北ですが、どうぞよろしく願いたします。

10 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 1 時から プレーキ・顎・本・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩 3 分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	9 日(土)午後1時半から 白 紙・指定席・定 石	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	10日(日)午後 1 時から 残る ・ 野 ・ のんき	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	11日(月)午後 1 時から 御飯・尋ねる・しなやか・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩 5 分 〒663 西宮市高木東町 9-4 西口いわゑ
八尾市民 川 柳 会	12日(火)午後 6 時から 示す・港・生涯・ストレス	八尾市立学働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北 1-15 宮崎シマ子
南 海 川 柳 会	15日(金)午後 6 時から 神 経・報道・子供・高価	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	17日(日) 正 午 か ら 太っ腹・看板・ゲーム・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	25日(月)午後 1 時から 地・大臣・習う・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩 5 分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	20日(水)午後 6 時から 反応・まずい・八つ当たり・落着	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
高槻川柳 サークル 卵 の 花	21日(木) 正 午 か ら 意地・他人・犬・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 5 分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
富 柳 会	21日(木)午後 1 時から 石 ・ 匂 う ・ 越える	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町 4-1 池 森子
京 都 塔 の 会	22日(金)午後 1 時から 芋・考える・活 字	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩 3 分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日)午後 1 時から 笑顔・家計・タクシー・(郵便)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲 8-31-11 塩満 敏
※岸和田川柳会は、11日(月)岸和田市民川柳大会(106頁参照) ※堺川柳会は、17日(日)第20回堺まつり協賛市民川柳大会(106頁参照) ※東大阪市川柳同好会は、17日(日)第21回東大阪市民川柳大会(106頁参照)		

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★「一年に百冊の本読めますか」——ここ何年かの間、

自分に問いかけていた。私はコマメな方ではないので

きちんとした読書ノートはつけないが、読んだ本の書

名と著者だけは記録している。それをはじめた二十年

前の年間読書冊数は五十八冊であったが、昨年やつと

百冊の台を越えた。

★『上方芸能』編集長の木津川計さんが何かに本に書

いていたが、彼は百五十冊以上、読むという。私より

一回り若いにしても、やはり大学教授に招かれるだけ

に大したもの、その数々の著述と多彩な話題の源泉

をかいま見る思いがした。

★読書はもとより量だけではなく、質が問題である。

私の場合は、雑学・乱読そのものである。数年前から図書館を利用するようになって以来、それが輪をかけていうようになった。とは言っても、おのずと好みや傾向が出てくるものである。★もう肩のこるものは読めない、句集を除くと小説・レポート・エッセーの類である。ここ数年間では加藤周一・澤地久枝・中野孝次・高橋治・清岡卓行・大岡信・江國滋などに傾斜しているようだ。二十七日から読書週間がはじまる。

★「川柳塔」八〇〇号記念のイベントが着々と進行している。香川県白鳥町における菜・薫風句碑建立もその一環だったが、9月末で締め切った全国誌上川柳大会も、ますますの参加状況。記念川柳大会と特集号の企画も目下、準備中だが、いちだんのご協力を、(正)

○「ええつ、困るう」ととまた叫んでしまつた。思わず叫んだ。ラジオを聴きながら、夕食の仕度中のことである。来年、郵便料金の値上げが予定されている。封書が九十円、葉書が五十五円になるという。なんとそれぞれ四五%と、三理由は郵便事業が赤字で万やむなし、なのだそうです。

「親方日の丸」体質やから、赤字になるのは当然や」に「値上げはないよお」

ひとこと

うれしさのあまり
8月1日に米沢晩明先生ゆかりの地、大洲で愛媛夏の川柳大会が開かれ、田中好啓先生も出席され「襟」の選をなさいました。「天の句が素晴らしいので軸吟を先に読みます」と言われ、「これが天の句です」と絶賛されました。白い襟の少女を夢の中に持つ——私の句でした。披露の後、末席に座っている私の所まで飛んで来て下さって、「宮尾みのりさんでしよう」と両の手で握手してくださいました。割れるような拍手の中で長い間川柳をやっているよかったです。しみじみ思いました。好啓先生には二十五年ほど昔に一度、お目にかかったことがあるだけでしたのに。うれしさのあまり、近況お知らせ申し上げました。

宮尾みのり

と二度目の叫び。

作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
銀河系 (3句) 河内 天笑選
茴香の花 (3句) 小出 智子選
吟 (3句) 「風呂」 柳 葉鶴丸選
「叩く」 柿花 紀美女選
「裏」 野坂 なみ選

12月号発表 (10月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

1月号

課題吟 「八」「百」「八」「百」
「八」「百」
初歩教室「築く」

二賞表彰 本社10月句会

日 時 10月3日 (日) 午後5時半
会 場 大阪市立労働会館
兼 題 「これから」「思惑」「伝える」「厳しい」「腰」
投 句 1 題 当日発表 各題2句以内
会 費 500円
席 題 句箋 (4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
投句料310円 (62円切手5枚) 同封のこと

神夏磯 典子選
福本 英子選
玉置 重人選
金井 文秋選
西尾 葉選

環状線・地下鉄「森ノ宮」下車 (日生球場東側)
路郎賞・川柳塔賞表彰

本社11月句会 8日 (月)

兼題 「先手」「コント」「吹く」
「親しい」「勘」

夜市川柳募集

第5回「加減」土橋 螢選
ハガキに3句 10月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課 題 「硝子」 森中恵美子 選
ハガキに3句 10月10日締切
投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発 表 10月24日 (日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課 題 「風呂」 森中恵美子 選
ハガキに3句 10月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

発行所

川柳塔社

電話 (06) 691-6914 番

振替口座大阪8133368番

定価 六百元 (送料51円)

半年分 三千八百円 (送料共)

一年分 七千五百円 (同)

平成五年十月一日発行

編集兼 西尾 葉

印刷所 藤原 童心 社

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

第2回

千歩の絵個展

日本画・きりえ

ギャラリーミッド 2F

大阪市中央区道頓堀1-9-14
御堂筋道頓堀南詰
(地下鉄⑭出口が便利です)
☎(06) 213-8360

10月5日(火) から 10月10日(祝) まで

(午前11時～午後7時)
最終日は午後5時まで

昭和から平成へと、歳月は、またたくうちに過ぎてま
いりました。

流れの速さについていけない拙い絵ですが、その後の
歩みをならべることに致しました。皆様のご批評をいた
だき、新風を糧に精進をつづけたいと願っております。
ご高覧賜りますよう。お待ち申し上げます。

〒581 八尾市中田2-302 高杉 千歩

0729・98・0928



■自分史・句集自費出版

■小・中・高・大学の教科書

■各種本の製作・出版

いろいろな

本

製作専門!

◇句集・詩集・自費出版等
ご相談に応じます。

- 部数の少ない本も
取り扱っています。

書籍・図書・印刷・電算

ミヤケ プランニング

MIYAKE

planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514

FAX 06-652-2928

図書出版・ジェイパブリッシュ

電話 06-658-8741